

昭和59年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡

1 9 8 5

熊谷市教育委員会

序 文

熊谷市は埼玉県北部の中心であり、歴史的にもゆかりの深い地域であります。三尻地区は、市域の西部にあたり、縄文時代から歴史時代にわたる集落跡、多くの古墳跡、中世の館跡、寺院跡などの存在が知られています。三尻地区には、市指定文化財の名勝である観音山があり、孤立した丘陵で、松林におおわれています。この観音山の北側には三ヶ尻古墳群があり、24基の古墳が確認されている中で、5基が調査され、多くの遺物が発見されています。

当地区では、昭和56年度から県宮ほ場整備事業が継続して実施されています。本市教育委員会では、この事業に伴い、発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、昭和58年度に実施された黒沢館跡・植ノ上遺跡の発掘調査の成果をまとめて報告するものです。

遺跡は、貴重な文化遺産として、後世に残すことが第一に計られるべきですが、工事の性格上やむをえず、記録保存の方策をとることとなりました。

発掘調査によって得られた資料は、貴重な文化遺産として、学術研究、学校や社会教育に資するものであると考えます。こうした、調査・報告を契機として、多くの市民の方々が、埋蔵文化財保護について、より一層のご理解とご協力くださることを願ってやみません。

最後になりましたが、県文化財保護課・深谷土地改良事務所・熊谷西部土地改良事務所、地元三ヶ尻・拾六間住民の方々からご指導・ご協力いただきましたことに、深く感謝の意を表します。

昭和60年3月

熊谷市教育委員会

教育長 関根幸夫

例 言

1. 本書は、熊谷市大字三ヶ尻字黒沢・桶ノ上に所在する黒沢館跡・桶ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県営は場整備事業（熊谷西部地区）に伴う事前記録保存の為の発掘調査である。
3. 黒沢館跡は、深谷土地改良事務所の委託事業により、桶ノ上遺跡は、国庫・県費補助事業により、それぞれ調査を実施した。
4. 発掘調査期間は下記のとおりである。

黒沢館跡 昭和58年7月25日～昭和58年10月20日

桶ノ上遺跡 昭和58年10月21日～昭和59年2月21日

5. 発掘調査の担当、本書の執筆・編集は金子正之が行った。
6. 発掘調査組織は次のとおりである。

調査主体者	熊谷市教育委員会教育長	関根幸夫
調査担当者	社会教育課主事	金子正之
調査補助員	大正大学学生	江口尚史
事務局	熊谷市教育委員会社会教育課課長	岡田 謙
	課長補佐	茂木 優
	係長（前）	岡田伸洋
	（現）	北 傑明
	主査	山川 建
	主事	寺社下博
	＊	島野嘉寿子

7. 集石遺構は、川原石が数多く集中しており、土器片・石臼片・板碑片等が混在し、集石の下に掘り方が明瞭に確認できなかった場合の遺構である。土塙は、土器片・石臼片・板碑片等が混在する川原石の集石のあるものとないものとがあるが、掘り方が確認できたものを土塙とした。
8. 遺構平面図の中で、住居跡はH、土塙はD、集石遺構はS、溝はMと記号化した。
9. 遺物実測図の中心線は、遺物を回転させず実測した場合は実線とし、遺物を180°回転させて実測した場合は一点鎖線とした。
10. 黒沢館跡の基準点の座標は、No.1はX=+17489、518m、Y=-44879、185m、No.2はX=+17543、181m、Y=-44831、230mである。
11. 桶ノ上遺跡の基準点の座標は、No.1はX=+17933、49m、Y=-44733、08m、No.2はX=+18000、89m、Y=-44698、27mである。
12. 遺物の記述の中で、土器は、土師器、須恵器、陶磁器等も含み、やきものの意味で使用した。
13. 遺物の記述の中で、番号は挿図の番号と一致し、名称、大きさ、材質、特徴、残存率、出土位置の順に記載した。土器の場合、材質は胎土・色調の順に記した。
14. 安山岩は、表面の色が白いものを（A）、黒いものを（B）とした。
15. 人骨鑑定は、金子浩昌氏にお願いし、玉稿をいただいた。
16. 石製品の石材は、堀口萬吉氏に、陶磁器については、酒井清治氏に御教授を受けた。記して感謝します。
17. 遺物の写真図版番号は、挿図番号を示す。例えば1-2は第1図の2の遺物をさす。

目 次

序文.....	I
例言.....	II
目次.....	III
挿図目次.....	IV
図版目次.....	VI
I. 発掘調査に至るまでの経過.....	I
II. 発掘調査の経過.....	I
III. 遺跡の立地と環境.....	1
IV. 黒沢館跡.....	4
1. 遺跡の概観.....	6
2. 遺構と遺物.....	7
V. 楠ノ上遺跡.....	22
1. 遺跡の概観.....	22
2. 遺構と遺物.....	22
VI. 黒沢館跡及び楠ノ上遺跡出土の埋葬・火葬の人骨について.....	68
VII. まとめ.....	70

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	第37図 1号土塙
第2図 遺跡位置図	第38図 1号土塙出土遺物
第3図 第1虎口跡	第39図 2号土塙
第4図 第2虎口跡・堀跡(東角)	第40図 3号土塙
第5図 第1虎口跡出土遺物(1)	第41図 3号土塙出土遺物
第6図 第1虎口跡出土遺物(2)	第42図 4号土塙
第7図 堀跡(折)	第43図 4号土塙出土遺物
第8図 堀跡(出隅)	第44図 5号土塙
第9図 堀跡(北角)	第45図 5号土塙出土遺物
第10図 堀跡出土遺物	第46図 6号土塙
第11図 土塙跡	第47図 7号土塙
第12図 土塙跡・集石遺構・堀跡	第48図 8号土塙
第13図 集石遺構出土遺物	第49図 9号土塙
第14図 1~5号溝跡	第50図 10号土塙
第15図 6号溝跡	第51図 10号土塙出土遺物
第16図 1・2号土塙	第52図 11号土塙
第17図 6号溝跡出土遺物	第53図 11号土塙出土遺物(1)
第18図 2号土塙出土遺物	第54図 11号土塙出土遺物(2)
第19図 3・4号土塙	第55図 12号土塙
第20図 5・6号土塙	第56図 12号土塙出土遺物
第21図 7号土塙	第57図 13号土塙出土遺物
第22図 8・9号土塙	第58図 13号土塙
第23図 3・5・7・9・10号土塙出土遺物	第59図 14号土塙
第24図 グリッド出土遺物	第60図 15号土塙
第25図 1号住居跡	第61図 15号土塙出土遺物(1)
第26図 1号住居跡カマド	第62図 15号土塙出土遺物(2)
第27図 1号住居跡出土遺物	第63図 1号集石遺構
第28図 2号住居跡	第64図 1号集石遺構出土遺物
第29図 2号住居跡カマド	第65図 2号集石遺構
第30図 2号住居跡出土遺物	第66図 2号集石遺構出土遺物
第31図 3号住居跡カマド	第67図 3号集石遺構
第32図 3号住居跡出土遺物	第68図 3号集石遺構出土遺物
第33図 4号住居跡	第69図 4号集石遺構出土遺物
第34図 4号住居跡出土遺物	第70図 4号集石遺構
第35図 5号住居跡	第71図 5号集石遺構
第36図 5号住居跡出土遺物	第72図 5号集石遺構出土遺物

第73図	6号集石遺構	第82図	1～6号溝跡
第74図	6号集石遺構出土遺物(1)	第83図	2～10号火葬墓
第75図	6号集石遺構出土遺物(2)	第84図	2号溝跡出土遺物
第76図	6号集石遺構出土遺物(3)	第85図	P—11区遺物出土状態
第77図	7号集石遺構	第86図	P—11区出土遺物
第78図	7号集石遺構出土遺物(1)	第87図	グリッド出土遺物(1)
第79図	7号集石遺構出土遺物(2)	第88図	グリッド出土遺物(2)
第80図	1号火葬墓	第89図	鉢尻全図(「訪題録」所収)
第81図	11号火葬墓	第90図	黒沢屋敷(「訪題録」所収)

付図1 黒沢館跡全測図

付図2 桶ノ上遺跡全測図

図版目次

図版 1 黒沢館跡航空写真	図版 20-1 5号住居跡
2-1 第1虎口跡	2 5号住居跡カマド
2 第1虎口跡	21-1 1号土塙・かわらけ出土状態
3-1 第1虎口跡・板碑出土状態	2 1号土塙・人骨出土状態
2 第1虎口跡・板碑出土状態(5-1)	22-1 2号土塙・川原石出土状態
4-1 第2虎口跡・堀跡(東角)	2 2号土塙
2 第2虎口跡	23-1 3号土塙・川原石・石臼・板碑出土状態
5-1 堀跡(南角)	2 3号土塙
2 堀跡(南角)	24-1 4号土塙・川原石・内耳土器出土状態
6-1 堀跡(折)	2 4号土塙・板碑出土状態
2 土壘跡(北西部)	25-1 5号土塙・人骨出土状態
7-1 堀跡・土壘跡(北側)	2 5号土塙・人骨出土状態
2 堀跡(北側)	26-1 6号土塙
8-1 堀跡(出隅)	2 10号土塙
2 堀跡(出隅)	27-1 11号土塙・板碑・石臼出土状態
9-1 1~5号溝跡	2 11号土塙・石臼出土状態
2 6号溝跡	28-1 12号土塙・川原石出土状態
10-1 G-14区・板碑出土状態(24-1)	2 1号溝跡・12号土塙
2 集石遺構・板碑出土状態(13-2)	29-1 13号土塙・川原石出土状態
11-1 H・I-9区・鉄刀出土状態(24-2)	2 13号土塙
2 6号溝跡・石臼出土状態(17-3)	30-1 15号土塙・人骨出土状態
12-1 堀跡(南側)・かわらけ出土状態(10-5)	2 2号集石遺構
2 堀跡(南側)・かわらけ出土状態(10-4)	31-1 2号集石遺構・石臼(1)・板碑(3)出土状態
13-1 堀跡(南側)・かわらけ出土状態(10-3)	2 3号集石遺構
2 堀跡(北側)・板碑出土状態(10-2)	32-1 4号集石遺構
14-1 2号土塙・人骨出土状態	2 5号集石遺構
2 2号土塙・人骨出土状態	33-1 6号集石遺構
15-1 7号土塙	2 6号集石遺構・石臼出土状態
2 7号土塙・石臼出土状態(23-8)	34-1 7号集石遺構
16 植ノ上遺跡航空写真	2 7号集石遺構・板碑出土状態
17-1 植ノ上遺跡遠景(黒沢館跡から望む)	35-1 1号溝跡・7号土塙
2 植ノ上遺跡全景	2 2号溝跡
18-1 1号住居跡	36-1 4号溝跡・1号集石遺構
2 2号住居跡	2 5号溝跡
19-1 3号住居跡カマド	37-1 1号火葬墓
2 2号住居跡カマド	2 4・5号火葬墓

図版38—1	2～10号火葬墓	図版44	4・5・10・11号土塙出土遺物
2	Q—10区遺物出土状態	45	11・12・13号土塙出土遺物
39	第1虎口跡、堀跡出土遺物	46	15号土塙、1～5号集石遺構出土遺物
40	集石遺構、6号溝跡、3・5・9号土塙出土遺物	47	6号集石遺構出土遺物
41	7号土塙、黒沢館跡グリッド、1号住居跡出土遺物	48	7号集石遺構出土遺物
42	1・3号住居跡出土遺物	49	7号集石遺構、2号溝跡、P—11区、グリッド出土遺物
43	4・5号住居跡、1・3号土塙出土遺物	50	グリッド出土遺物

I. 発掘調査に至るまでの経過

昭和58年4月11日付深谷第94号で深谷土地改良事務所から、県営は場整備事業熊谷西部地区内にある埋蔵文化財の取り扱いについて協議文書が提出され、昭和58年7月12日付教文第383号において埼玉県教育委員会から、発掘調査を実施する旨回答がなされた。

これを受けて熊谷市教育委員会が、国庫・県費補助金、農政側負担金および市費をもって調査を実施することになった。

事業計画によると工事は、微高地に於ける桑畠の抜根整地、水田の整地および道水路のパイプ埋設工事であった。面的に削平される部分は、トレンチ調査によって土層堆積状態・遺跡の範囲の確認をしてからグリッド方式で調査を行い、水路部分は、トレンチ調査により発掘を実施することとした。

発掘調査は、昭和58年7月25日から開始された。

II. 発掘調査の経過

黒沢館跡は、ポンプ場建設予定地にあたり、館跡の約半分が削平されることになるので、調査を実施した。校園により想定した館跡の堀の部分にトレンチを入れ、堀跡を確認した後、ポンプ場によって破壊を受ける部分に重機を入れて表土剥ぎを行った。1辺5mのグリッド方式を用いて調査を行う為、南西隅をA-1として、北へ1・2・3…、東へA・B・C…とし、Aラインは、南から北へA-1・A-2・A-3…と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称した。

遺構確認面の精査をして、遺構を確認してから、各遺構ごとに調査を実施した。堀跡、溝跡は地山の礫層を掘り込んでおり、ビット・土塙は礫層の上に堆積している黒褐色土層を掘り込んでいた。

黒沢館跡からは、堀跡・出入口遺構・土塙跡・集石遺構・土塙・ビットが検出され、内耳土器・かわらけ・鉄製品・陶器片・板碑・石臼等が出土した。

桶ノ上遺跡は、水田になるため、面的に削平されるので、調査を実施した。黒沢館跡と同様に、トレンチ調査を実施して、土層堆積状態を確認したのち、重機によって表土剥ぎを行った。1辺5mのグリッド方式を用いて調査を行う為、黒沢館跡と同じ呼称の方法を使用してグリッド設定をした。遺構確認面の精査をして、遺構確認を行った後、各遺構ごとに調査を実施した。本遺跡は、奈良・平安時代～近世にわたる複合遺跡であるので、遺構確認の精査の際に、奈良・平安時代の遺物と中世・近世の遺物が混在して、多量に出土した。

桶ノ上遺跡からは、竪穴式住居跡5軒・土塙15基・集石遺構7基・火葬墓11基・溝跡5本が検出され、多量の土器・陶器・内耳土器・かわらけ・鉄製品・石臼・板碑・鉄滓等が出土した。

本調査によって、奈良～平安時代の竪穴式住居跡・中世の縄跡・中世～近世の土塙・火葬墓・溝跡が検出され特に中世～近世の資料が多量に出土したことにより、三尻地区の歴史を考えるのに貴重な資料が得られて、昭和59年2月21日に調査は終了した。

III. 遺跡の立地と還境

熊谷市は、埼玉県の北部にあり、東にはさきたま古墳群の所在する行田市、北西には弥生時代中期の再葬墓で有名な上敷免遺跡のある深谷市、南にはおどる埴輪の出土した野原古墳群のある江南村が隣接している。

黒沢館跡、樋ノ上遺跡の所在する三尻地区は、熊谷市の西部にあたり、西側に櫛引台地があり、東側へ熊谷低地が広がっている。本地域は、何本もの水路が南西から北東へ走っており、かつて荒川が流れていることが考えられる。その流れによって自然堤防がよく発達しており、自然堤防上に遺跡は立地している。

黒沢館跡は、標高41m～42mを測り、堀跡の部分が水田となっており、内郭の部分は畠地と水田になっている。東側には「ふるぼり」と言われている水路が南から北へ走っており、堀跡の東隅と平行になるような折りがみられ、「ふるぼり」が本館跡の外堀に利用されたと考えられる。

樋ノ上遺跡は、標高40m～41mを測り、桑畠・畠地・水田及び県立熊谷西高校の敷地となっている。今回の調査は、熊谷西高校の東側にあたり、桑畠と畠地の部分である。本遺跡は、既に4回の発掘調査が実施されており、今回は第5次調査とも言えよう。

第1次調査（註1）は、昭和49年12月～昭和50年3月まで実施され、住居跡17軒（鬼高・真間・国分）、溝跡・ピット群が検出されて、土師器・須恵器・土鍤等が出土した。

第2次調査（註2）は、昭和50年4月～昭和50年7月まで実施され、住居跡31軒（古墳時代3軒・歴史時代28軒）、溝跡5本・土壙3基・掘立柱建物跡1棟・柱穴群1が検出されて、土師器（鬼高～国分式）・施釉陶器・常滑・青磁等が出土した。

第3次調査（註3）は、昭和51年5月～昭和51年7月まで実施され、住居跡15軒（古墳時代後期～歴史時代）・



1. 上辻遺跡
2. 下辻遺跡
3. 樋ノ上遺跡
4. 三尻中学校遺跡
5. 59—63(県道跡地名番号)
6. 三ヶ尻古墳群
7. 三ヶ尻天王遺跡
8. 三ヶ尻林遺跡
9. 59—64(県道跡地名番号)
10. 黒沢館跡
11. 広瀬古墳群
12. 宮塚古墳
13. 塙井古墳群
14. 石原古墳群
15. 原島古墳群
16. 玉井古墳群
17. 別府古墳群
18. 寺東遺跡
19. 天神遺跡
20. 三ヶ尻上古遺跡
21. 新ヶ谷戸遺跡

図1 図 遺跡分布図

ピット群・堀跡が検出されて、土師器・須恵器・灰釉陶器・砥石・多量の土錘・鉄器・青磁等が出土した。

第4次調査（註4）は、昭和52年4月～昭和52年6月まで実施され、住居跡9軒（鬼高窓3軒・国分窓6軒）+土塁群・溝跡11本・ピットが検出されて、土師器・須恵器・陶磁器片（中世）・板碑片・古銭等が出土した。

上述したように、1～4次調査により、古墳時代～平安時代の住居跡及び中世の遺構が検出されて、多量の遺物も出土している。今回の調査では、中世～近世の遺構が多く、奈良～平安時代の住居跡は少なかった。今回の調査区は、古墳～平安時代の集落跡の中心から離れている地域であり、中世になって墓地になったものと考えられる。

註

1. 佐藤忠雄「桶之上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅲ 昭和56年
2. 小川良祐・中島宏「桶之上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅳ 昭和57年
3. 小川良祐「桶之上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧Ⅴ 昭和57年
4. 小川良祐・金子真土「県立能谷西高校（桶之上遺跡）体育館予定地の発掘調査及び校舎・管理棟・体育館予定地出土遺物の整理」 資料館報No.9 さきたま資料館 昭和53年



第2図 遺跡位置図

IV. 黒沢館跡





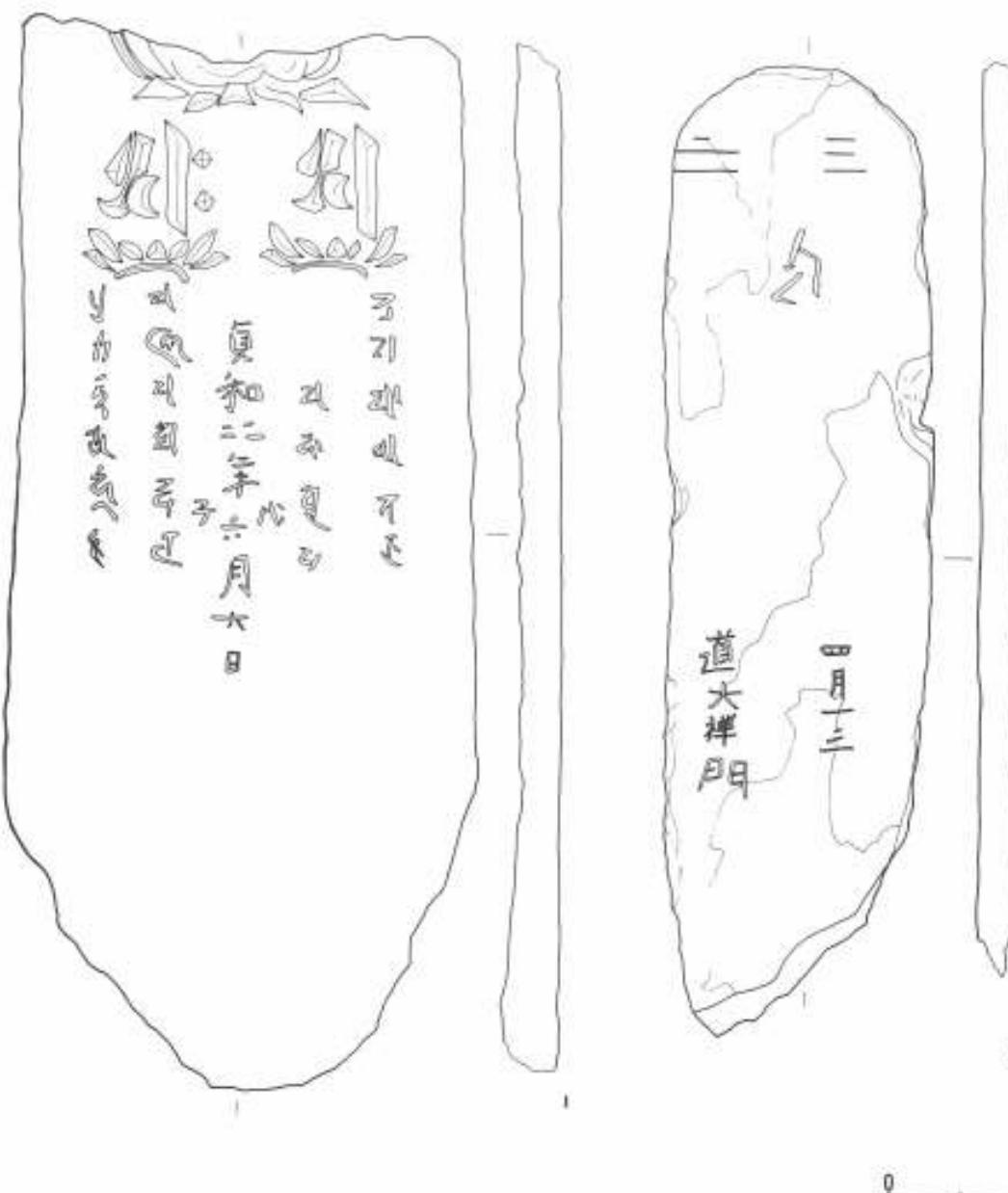
第4圖 第2虎口路・堀路（東角）

1. 遺跡の概観

黒沢館跡は、熊谷市の西部にある独立丘陵の觀音山から北東約1.8kmに位置し、荒川から北へ約2.3kmの所にある。標高は、41~42mを測る。

本館跡は、堀が一周しており、平面形は台形を呈し、底辺が東側にあたる。南側の堀には折がつけられ、西角は出隅になっていた。規模は、東辺66m、西辺39m、北辺62m、南辺は折の東側が37m、西側が24mを測る。

検出された遺構は、虎口跡・柱穴跡153個、土塙161基、集石造構、溝跡6本、土塙跡である。柱穴跡・土塙・集石造構は、館跡の西側に多く見られ、溝跡の内1~5号溝跡は東側にあり、南堀の一ヵ所に集まるようになっていた。出土遺物は、虎口跡から貞和4年（1348年）の年号をもつ板石塔婆が出土し、他の遺構から内耳土器・かわらけ・石臼・古錢等が検出され、2号土塙からは人骨も発見された。



第5図 第1虎口跡出土遺物 (1)

2. 遺構と遺物

虎口跡（第3～6図、図版2～4・39）

位 置 虎口跡は、東辺に2カ所検出され、北側
概 要 の虎口跡は、工事によって壊されないので、
確認面までしか調査しなかった。南側の虎
口跡を第1虎口跡、北側を第2虎口跡と称
する。

第1虎口跡は、調査前において、東側の
道路と西側の畠地を結ぶ畦道になっていた。
地山の礫層を掘り残した土橋が設けられて
おり、板碑片が9枚出土した。

第2虎口跡は、東角の所にあり、第1虎
口跡と同様に地山の礫層を掘り残した土橋
が設けられていた。第1虎口より幅の狭い
ものであった。

規 模 （第1虎口跡）

上幅約4.2m、下幅5.6m、底面からの
高さ50～60cm。

（第2虎口跡）

上幅約1m

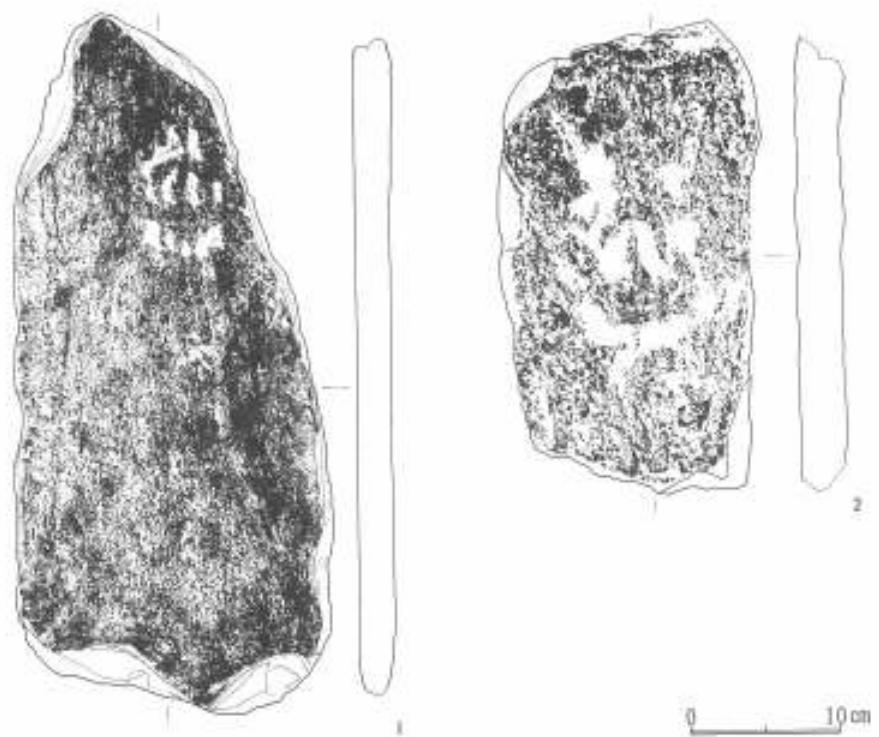
遺 物 第1虎口跡から板碑片が、倒れた状態で
9点検出されたが、第2虎口跡から遺物は
検出されなかった。

5-1-板石塔婆。残存高74cm、幅32.8cm、厚さ
3.9cm。点紋緑泥片岩。種子は阿弥陀三尊
で、銘は光明真言と、「貞和4年戊子六月
六日」

5-2-板石塔婆。残存高67.1cm、幅18.5cm、厚
さ3cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。銘
は「○○○○4月13日、道大禪門」。外面
は焼けており、黒い所、剥離している部分
が多い。

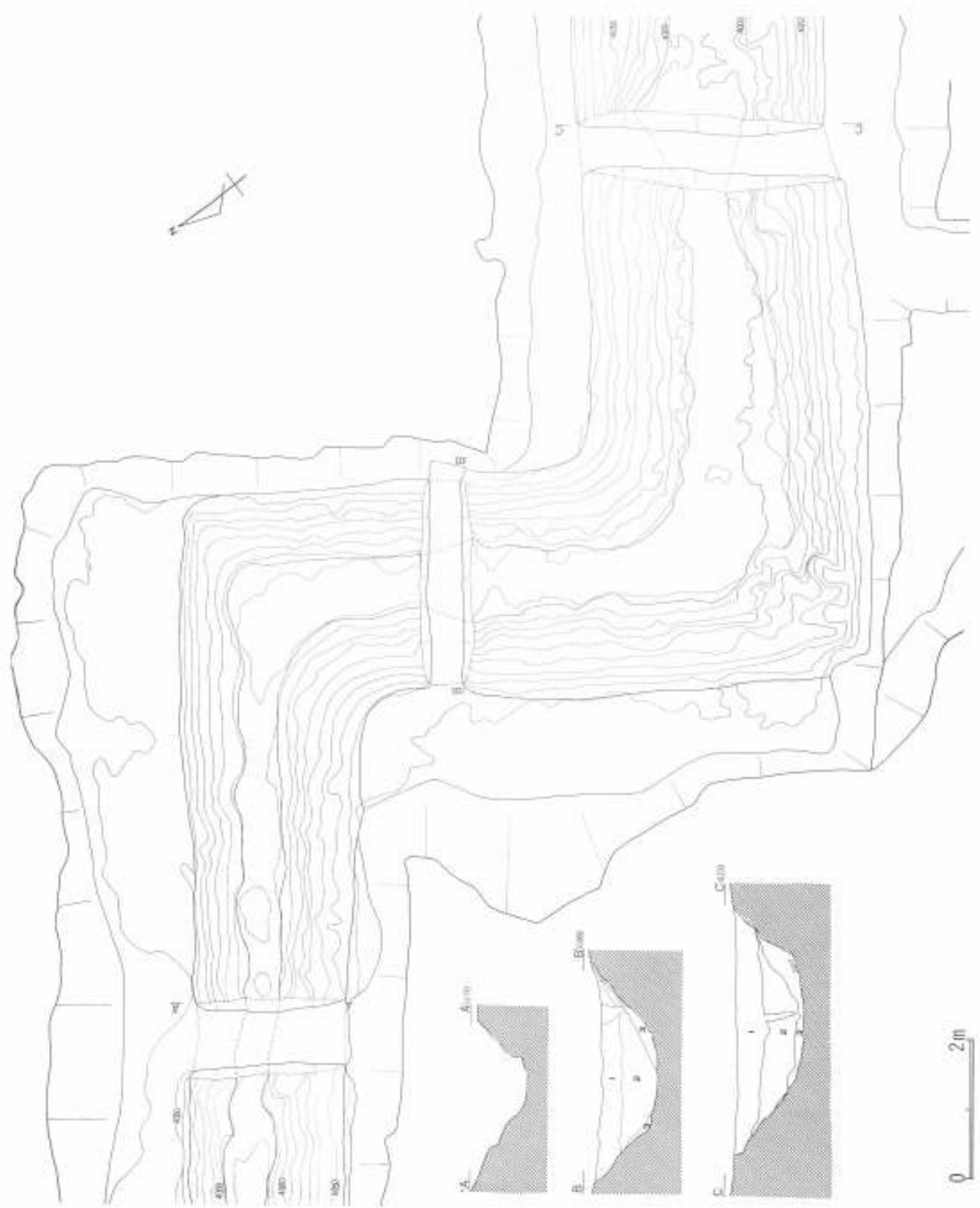
6-1-板石塔婆。残存高46.9cm、残存幅21.3cm、
厚さ2.6cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。

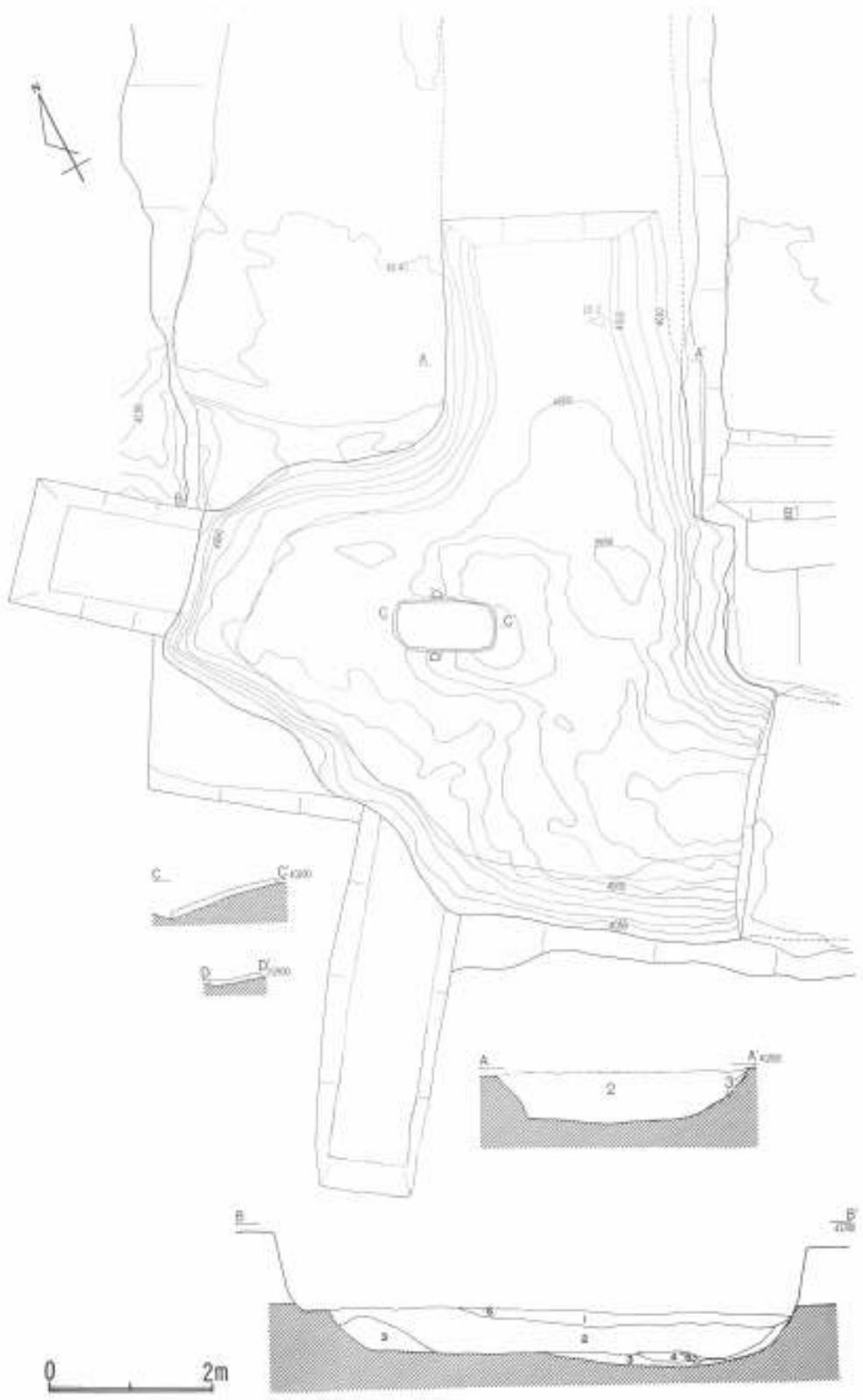
6-2-板石塔婆。残存高31.7cm、残存幅17.4cm、
厚さ3.3cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。



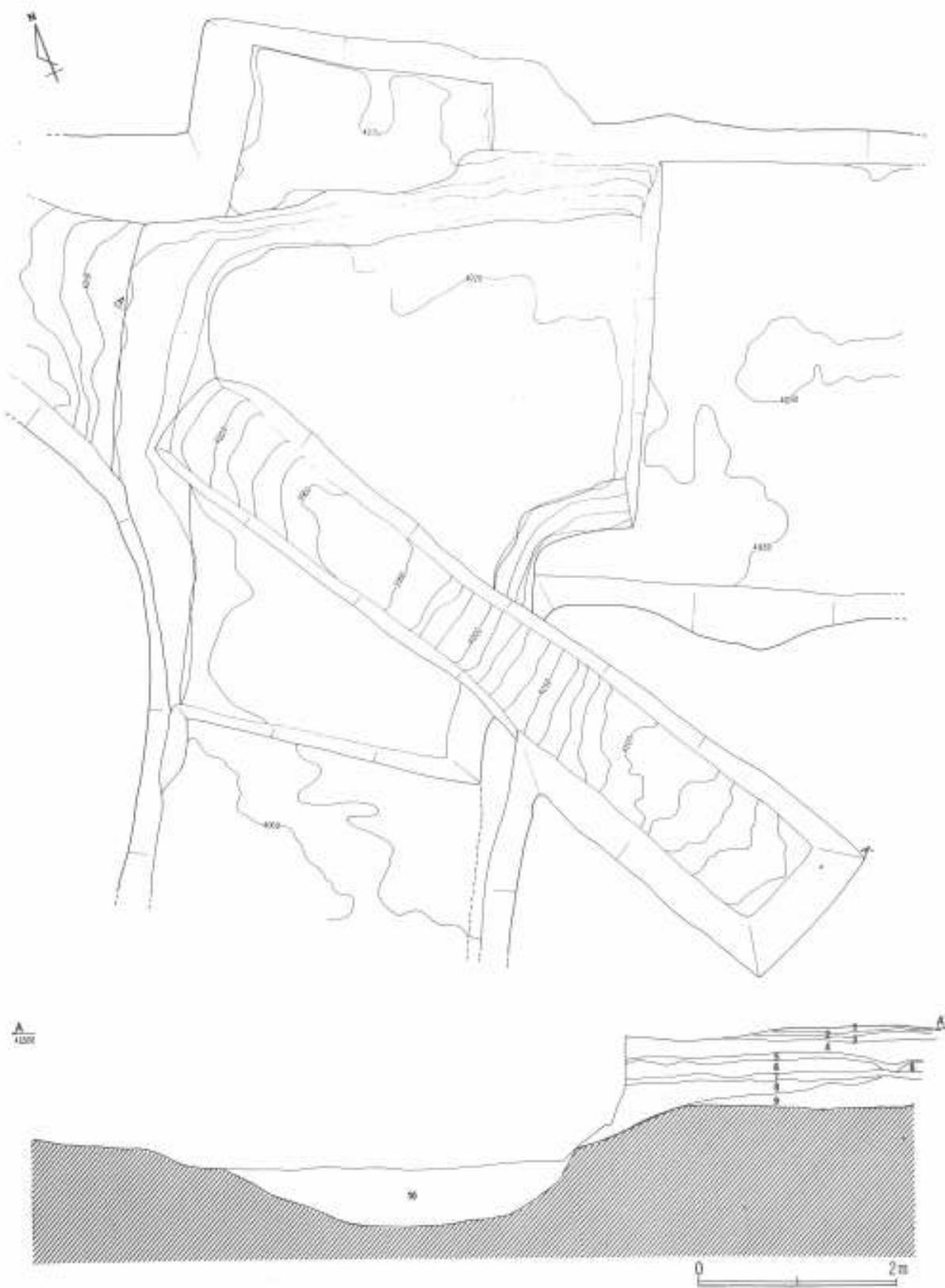
第6図 第1虎口跡出土遺物（2）

第7図 題説(折)





第8図 燐路(出張)



第9图 视路(北角)

堀跡（第4・7-10図、図版4-8・39）

位 置 堀跡は、内郭のまわりを台形状に囲んで
概 要 いて、南堀のはば中央に折があり、西角に出隅がつくられている。断面形はU字形。
折・出隅・東角の土層は、1層褐色土（酸化鉄含む）、2層灰褐色粘質土（酸化鉄多く含む）、3層褐色土（酸化鉄、砂を含む）、4層灰褐色粘質土（酸化鉄、砂含む）。北角の土層は、1層耕作土、2層赤褐色土（酸化鉄多く含む）、3層灰褐色土、4層灰褐色土（砂質、酸化鉄・ \varnothing 1-2cmの礫を多く含む）、5層灰黃褐色土（砂質、酸化鉄多く含む）、6層灰褐色土（砂質、酸化鉄含む）、7層暗灰茶褐色土（砂質、酸化鉄多く含む）、8層灰茶褐色土（砂質粘土、酸化鉄少し含む）、9層暗灰茶褐色土（砂質粘土、酸化鉄少し含む）、10層暗灰褐色土（粘土層、酸化鉄多く含む）。出隅から緑泥片岩出土。

質、酸化鉄・ \varnothing 2-4cmの礫を少し含む）、7層暗灰茶褐色土（砂質、酸化鉄多く含む）、8層灰茶褐色土（砂質粘土、酸化鉄少し含む）、9層暗灰茶褐色土（砂質粘土、酸化鉄少し含む）、10層暗灰褐色土（粘土層、酸化鉄多く含む）。出隅から緑泥片岩出土。

規 模 折：A-A'の上幅2.4m、下幅0.6m、深さ0.78m、B-B'の上幅3.15m、下幅1.35m、深さ0.97m、C-C'の上幅3.42m、下幅1.7m、深さ1m。
出隅：B-B'の上幅5.65m、下幅4.75m、深さ1.38m。緑泥片岩の大きさは長さ1.24m、幅0.63m、厚さ7cm。

遺 物 土器41点、板石塔婆2点、木器2点。

1-内耳土器、頭部径23.6cm、中粗粒砂含み、灰褐色、胴部 \pm 残存。

2-板石塔婆。残存高28cm、幅16.9cm、厚さ2cm。

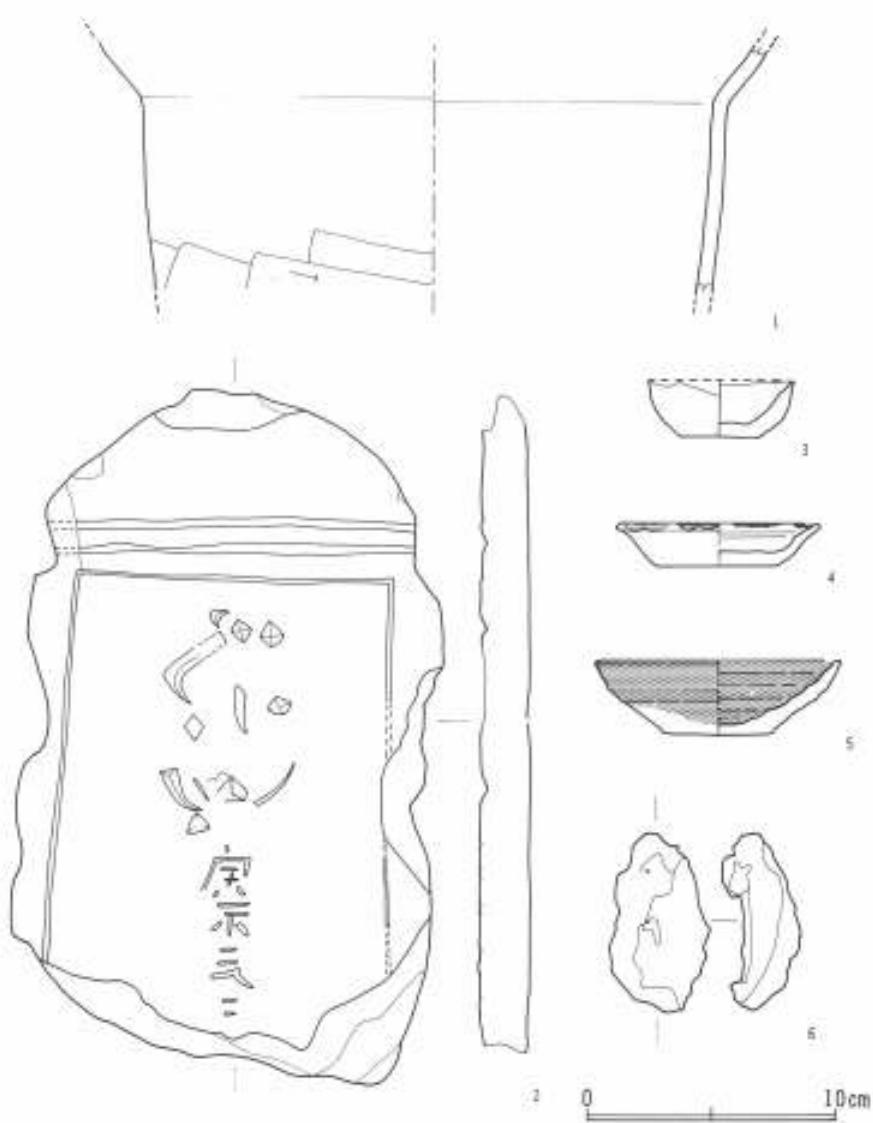
種子阿弥陀如来、銘は「康永三〇」緑泥片岩。

3-かわらけ。口径5.9cm、中粒砂含み、淡褐色。

4-かわらけ。口径8.2cm、中粒砂含み、淡褐色。回転糸切り底。

5-かわらけ。口径10cm、中粒砂含み、内外面赤色塗影。

6-鉄滓。重さ69g。



第10図 堀跡出土遺物



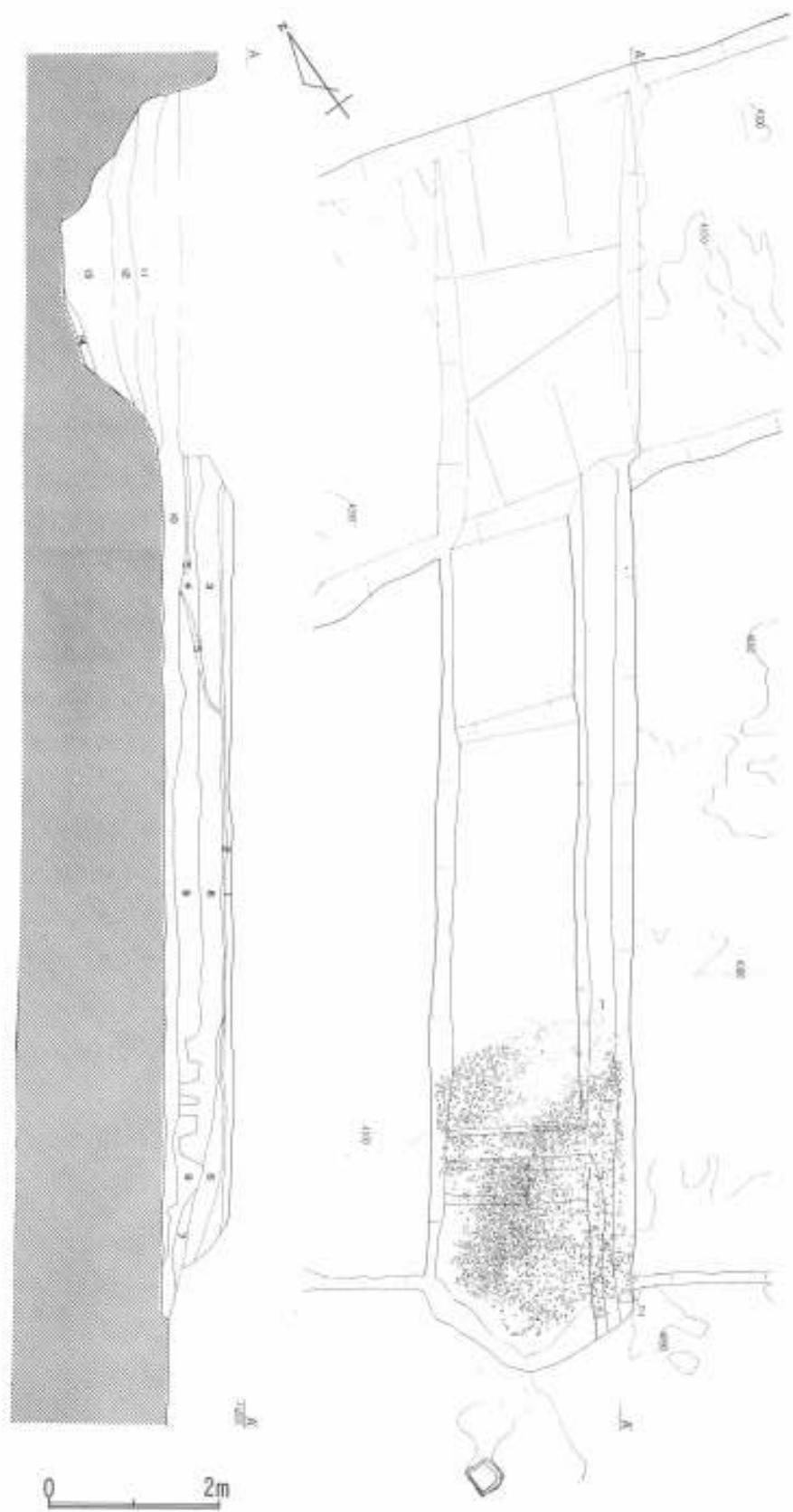
第11図 土塙跡

土塙跡（第11・12図、図版6・7）

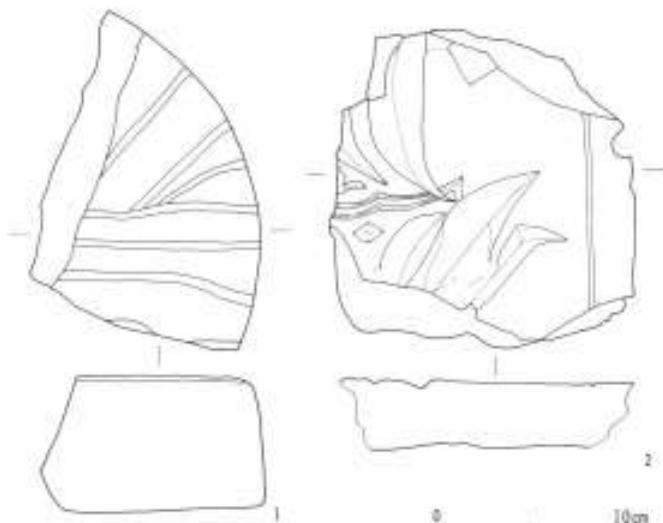
位 置 土塙跡は、内郭の西邊の北側、北邊の西概要個の2カ所から検出された。

第11図の土層は、1層表土、2層灰褐色土（ $\phi 1\sim5\text{cm}$ の礫を含む）、3層灰褐色土（ $\phi 1\sim3\text{cm}$ の礫を少し含む）、4層灰褐

色土（酸化鉄を多く含む）、5層灰褐色土（酸化鉄を少し含む）、6層灰褐色土（酸化鉄を含む）、7層暗褐色土（酸化鉄を含む）、8層褐色土（酸化鉄を含む）、9層褐色土（酸化鉄、赤褐色粒子、焼土粒子を含む）、10層暗褐色土（酸化鉄、赤褐色粒



第12例 上環路・集石造構・堤路



第13図 集石遺構出土遺物

子、焼土粒子を含む）、11層暗褐色土（赤褐色粒子、酸化鉄を含む）であった。

第12図の土層は、1層耕作土（灰褐色土、火山灰含む）、2層赤褐色土（酸化鉄を多く含む）、3層褐色土（ $\phi 1 \sim 4$ cmの礫、酸化鉄を含む）、4層褐色土（ $\phi 1 \sim 4$ cmの礫、酸化鉄を少し含む）、5層黒褐色土（酸化鉄を多く含む）、6層礫層、7層暗褐色土（焼土・炭化物を含む）、8層灰茶褐色土（酸化鉄を含む）、9層暗褐色土、10層褐色土（ $\phi 0.3 \sim 2$ cmの礫を少し含み、酸化鉄も含む）、12層褐色土（酸化鉄を含む）、13層灰褐色粘土層（酸化鉄を多く含む）、14層褐色土（砂を含む）であった。

規 模 西辺部の土壌跡—上幅1.24m、下幅2.05m、造構確認面からの高さ44cm、堀跡の上幅5.5m。

遺 物 なし。

集石遺構（第12・13図、図版10・40）

位 置 集石遺構は、内郭の北辺の西側から検出概要された。トレンチ調査によって部分的に確認されたものであり、更に東西に広がりを

もっている。

規 模 南北方向4.1m、耕作土上面からの深さ68cm。

遺 物 土器13点、板石塔婆2点、石臼1点、集石の上部から出土。

1—石臼。直径27.6cm、厚さ7.2cm。角閃石安山岩。下白で、目の断面形は丸溝である。上面は焼けて黒い所がある。

2—板石塔婆。残存高17.2cm、残存幅16.4cm、厚さ3.8cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。1号溝跡（第14図、図版9）

位 置 本溝跡は、内郭の南部に位置し、北東から南東へ走っており、主軸は、東からN—50°—E、N—30°—E、N—45°—Eの順に変化していく、わずかに蛇行していた。

規 模 断面A—A'：上幅1m、下幅0.2m、深さ0.32m。

断面B—B'：上幅0.46m、下幅0.15m、深さ0.2m。

遺 物 なし。

2号溝跡（第14図、図版9）

位 置 本溝跡は、1号溝跡の西に位置し、北北東から南南西へ走っており、主軸はN—13°—E、N—2°—E、N—15°—E、N—27°—E、N—2°—E、N—15°—E、N—31°—Eの順に変化していく、わずかに蛇行している。

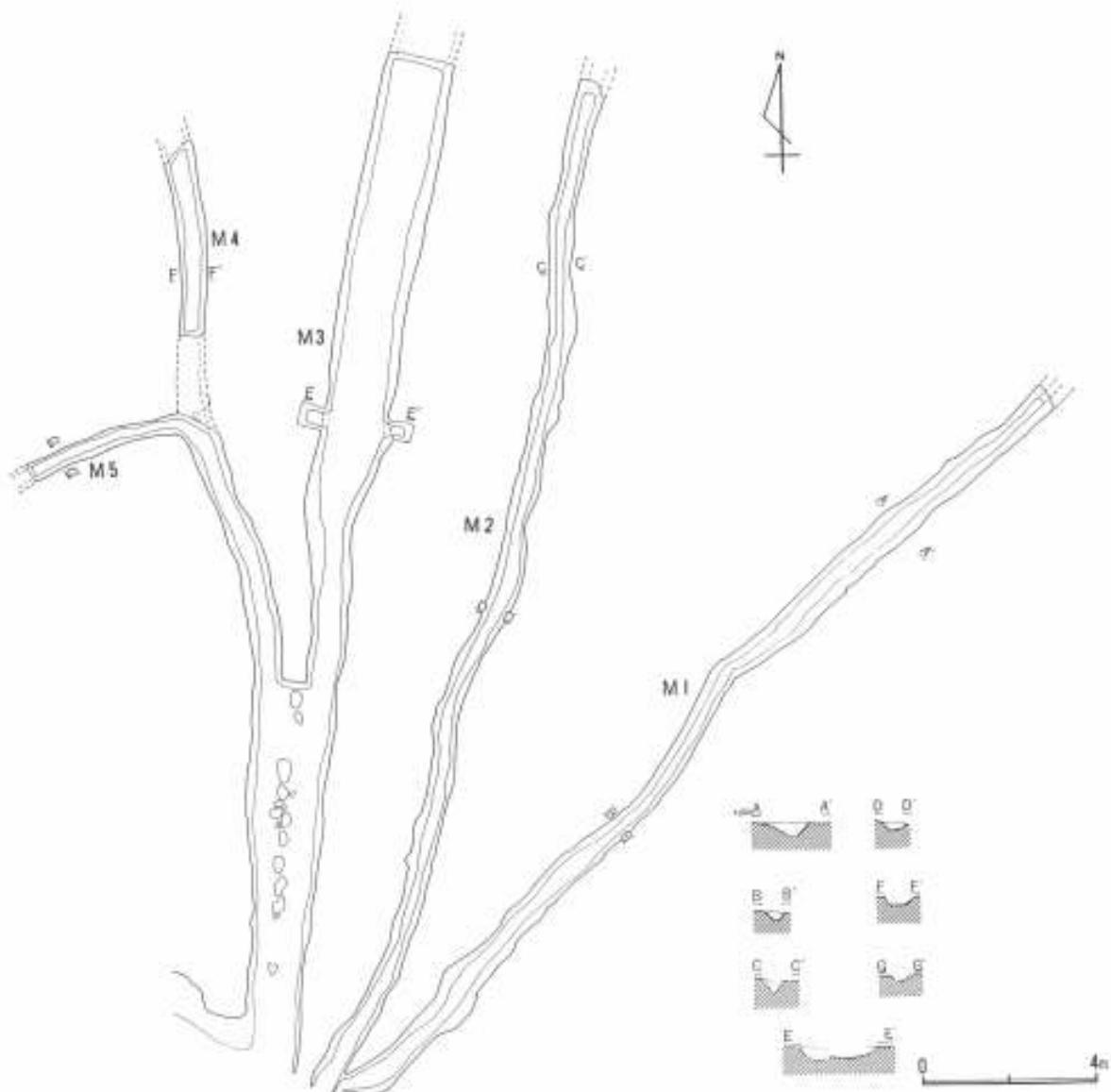
規 模 断面C—C'：上幅48cm、下幅6cm、深さ38cm。

断面D—D'：上幅48cm、下幅30cm、深さ20cm。

遺 物 なし。

3号溝跡（第14図、図版9）

位 置 本溝跡は、2号溝跡の西に位置し、2号溝と同様に北北東から南南西に走っており、西堀の上端から約10mの所から4号溝跡と接していた。4号溝とは、川原石によって区切られていた。主軸は、北からN—11°—



第14図 1～5号溝跡

E、N-8°-Eの順に変化していた。

遺物なし。

規模 橫面E-E'：上幅1.76m、下幅1.4m、
深さ0.3m。

5号溝跡（第14図、図版9）

遺物なし。

位置 本溝跡は、西南西から東北東に走り、4

4号溝跡（第14図、図版9）

概要 号溝跡と合流していた。主軸はS-67°-W、
S-83°-Wに変化している。

位 置 本溝跡は、3号溝跡の西に位置し、北北

規模 橫面G-G'：上幅44cm、下幅26cm、深さ

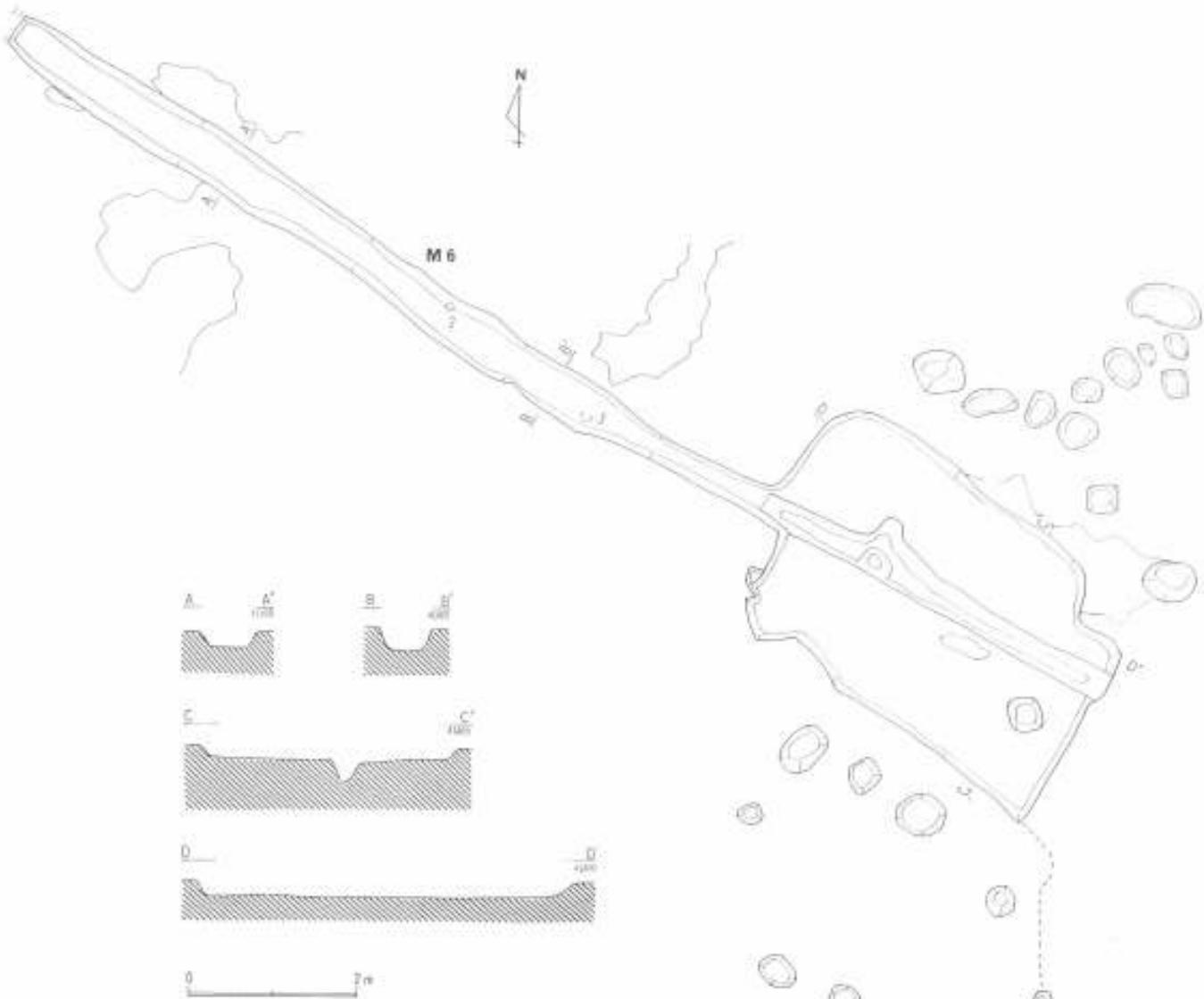
概要 西から南南東に走り、3号溝と接するところから北北東から南南西に走っていた。主軸は、N-20°-W、N、N-42°-W、N-3°-Eの順に変化して、蛇行していた。

10cm。

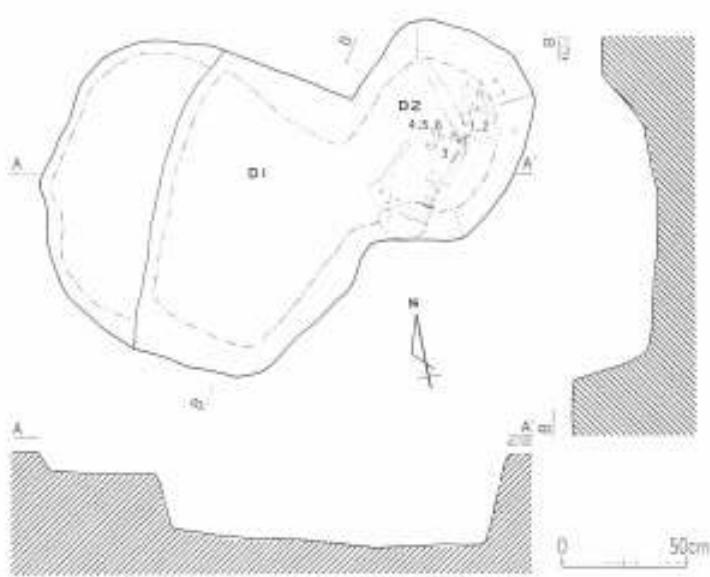
規模 橫面F-F'：上幅65cm、下幅36cm、深さ
18cm。

遺物なし。

1～5号溝跡は、内郭の南角から北西へ約10m
の位置に、流れ込むように検出された。



第15図 6号溝跡



第16図 1・2号土址

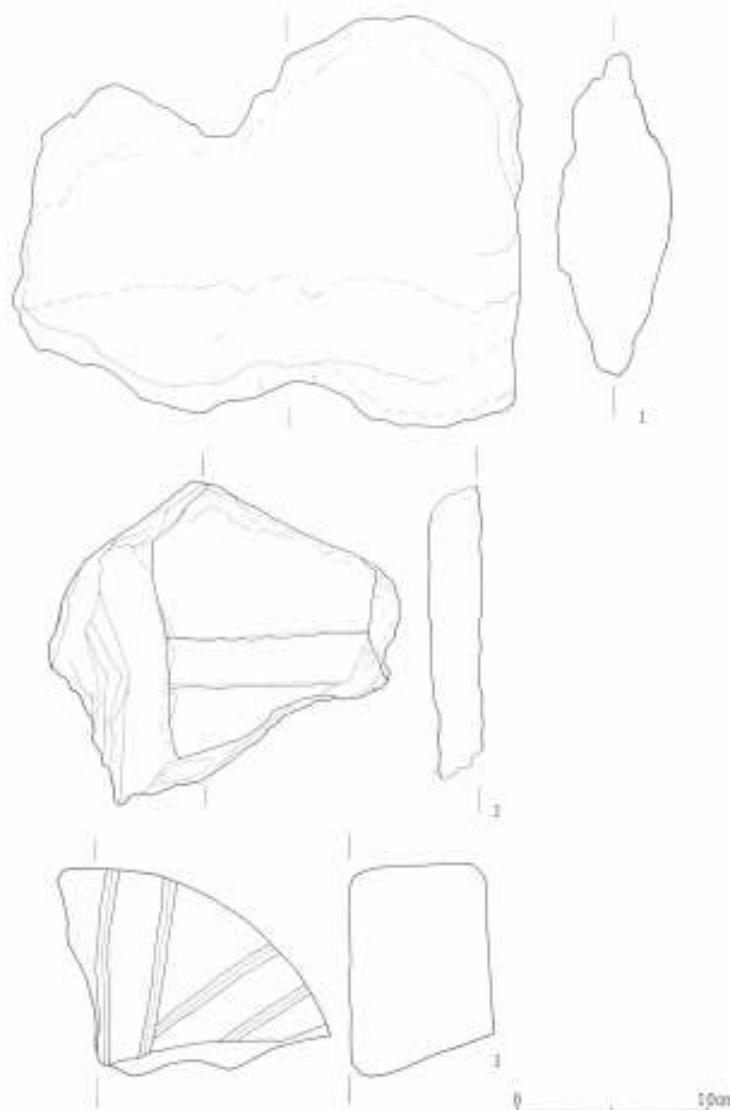
6号溝跡 (第15・17図・図版9・40)

位 置 本溝跡は、内郭の西側に位置し、
概 要 北西から南東へ走り、更に南へ向
 いて行くが明瞭には検出されなか
 った。本溝跡の南東部は、幅が広
 くなっていて、その北と南側には
 ピットが検出され、覆家があった
 可能性がある。

主軸はN-57°-Eを示す。

規 模 断面B-B': 上幅60cm、下幅35
 cm、深さ28cm。
 断面C-C': 上幅3.1m、下幅
 2.84m、深さ14cm。

遺物



第17図 6号溝跡出土遺物

1—石器。横27.2cm、縦21.8cm、厚さ6cm。絹雲母石英赤鉄片岩。分割形を呈し、くびれ部は稜をとるよう、細かく剝離されている。

2—板石塔婆。残存高17.3cm、残存幅18.4cm、厚さ2.8cm。緑泥片岩。頭部破片。

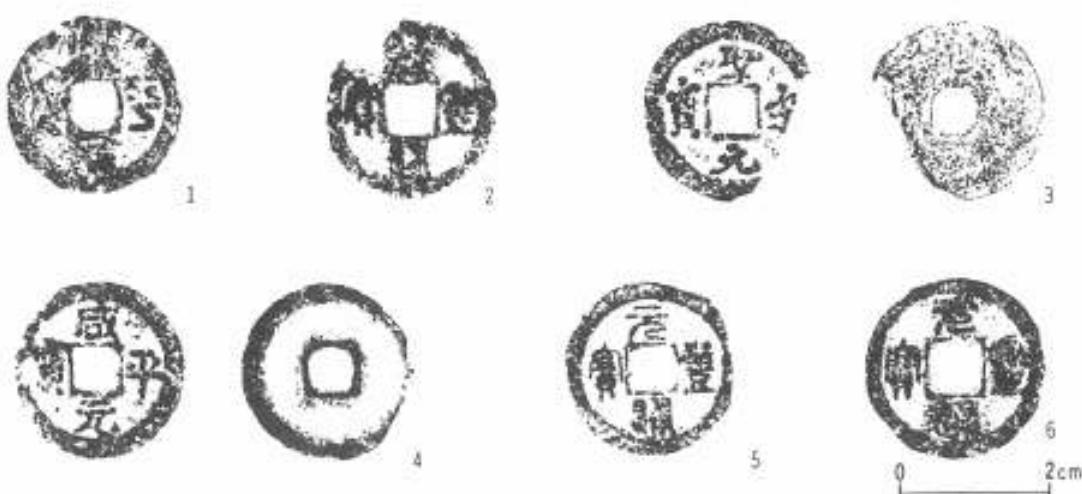
3—石臼。直径26.5cm、厚さ7.5cm。安山岩(A)。下臼で、目の断面形は丸溝である。表面は焼けで黒くなっている所がある。

1・2号土塙(第16・18図、図版14・40)

位 置 本土塙は、内郭の西側に位置し、1号土塙が西に、2号土塙が東にあり、複合していた。

概 要 2号土塙からは、人骨が検出され、腹部上位には古銭6枚が置かれていた。

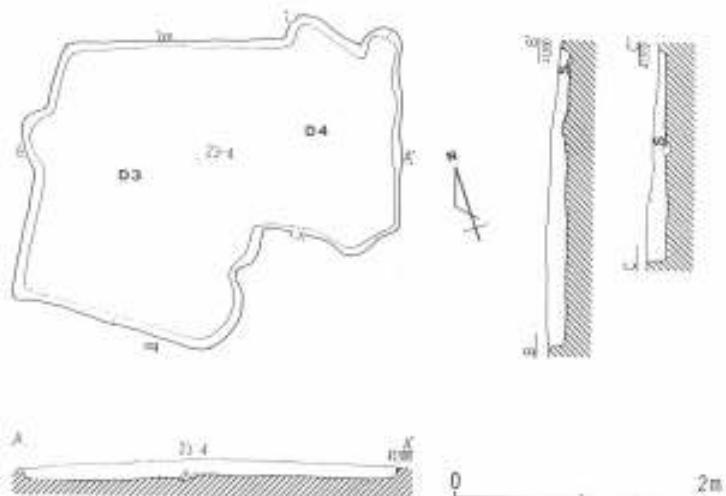
規 模 1号：長径1.24m、短径85cm、深さ36cm、2号：長径88cm、短径70cm、深さ31cm。



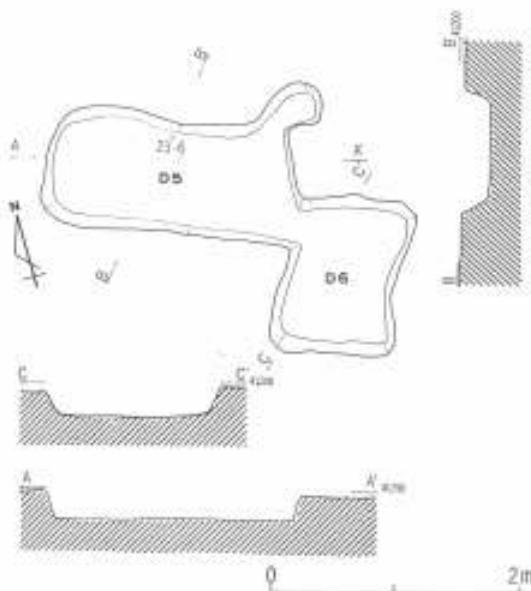
第18図 2号土塙出土遺物

遺物 古銭6枚が、2号土壙の人骨上から出土。
 1—治平元宝。直径2.4cm。篆書体。銅錢。
 2—元豐通宝。直径2.4cm。篆書体。銅錢。
 3—聖宋元宝。直径2.4cm。真書体。銅錢。
 4—咸平元宝。直径2.4cm。真書体。銅錢。
 5—元豐通宝。直径2.4cm。篆書体。銅錢。
 6—元豐通宝。直径2.4cm。篆書体。銅錢。
 3・4号土壙(第19・23図、図版40)

位置 本土壙は、内郭の西側にあり、1・2号
 概要 土壙の北東に検出された。3号土壙が西に、
 4号土壙が東にあり、複合していた。



第19図 3・4号土壙



第20図 5・6号土壙

規模 3号：南辺1.6m、西辺2.06m、深さ16cm。4号：東辺1.5m、北辺0.87m、深さ15cm。

遺物

23-4鉢。器高5.4cm。細礫・粗粒砂を含み、淡褐色と茶褐色の所がある。方形の鉢と考えられ、口縁は外側と内側に凸帯が貼付されている。

23-5砥石。長さ8.3cm、幅2.9cm、厚さ1.7cm。ひん岩。

5・6号土壙(第20・23、図版40)

位置 本土壙は、内郭の東部にあり、6号溝跡の北側に検出された。5号土壙が西に、6号土壙が東にあり、複合していた。

規模 5号：断面A-A'長さ2.05m、南北長0.98m、深さ23cm。
 6号：東辺1.24m、南辺1m、深さ24cm。

遺物

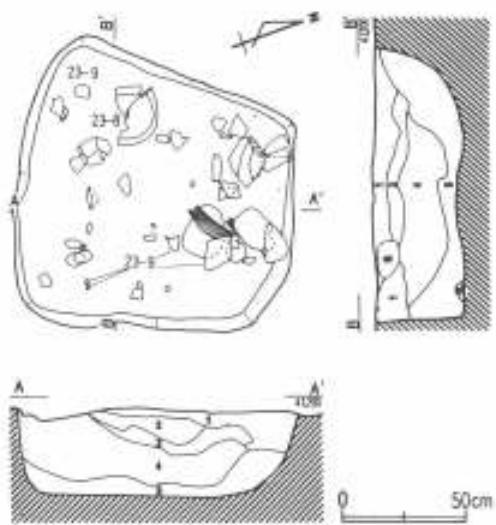
23-6鉄器。残存長6cm、先端部が2叉になっており、柄の断面形は長方形である。

7号土壙(第21・23図、図版15・41)

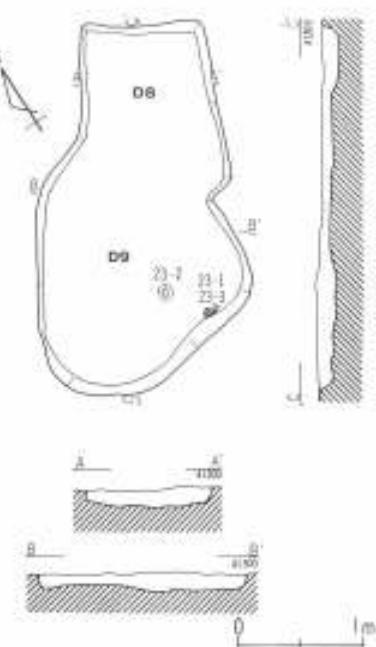
位置 本土壙は、内郭のほぼ中央に位置し、10号土壙の東側に検出された。覆土上部に、川原石・石臼・土器が置かれていた。

長軸の方位は、N-34°-Eを示す。土層は、1層褐色土(炭化物・焼土を少し含む)、2層褐色土(炭化物・焼土を含む)、3層黒褐色土(炭化物を多く含み、焼土を少し含む)、4層暗褐色土(炭化物・焼土を少し含む)、5層暗褐色土(炭化物・焼土を少し含み、ロームブロックも含む)であった。

規模 長軸1.13m、北辺0.81m、南辺1.12m、深さ0.36m。



第21図 7号土塙



第22図 8・9号土塙

遺物

23-8石臼。直径30cm、最大厚8.1cm。安山岩(A)。上臼で、目は不明瞭である。裏面は焼けていて、黒い所がある。本遺構の西角から出土。

23-9内耳土器。口径35.2cm、底径25.4cm、器高19cm。中・粗粒砂を含み、外面は暗褐色だが煤けて黒い所が多く、内面は暗淡褐色、暗灰褐色である。体部内面は、底面から上

へ4.5cmの幅で器面が荒れている。壺残存。

8・9号土塙 (第22・23図、図版40)

位 置 本土塙は、内郭の中央部にあり、6号溝概要の北東に検出された。8号土塙が北に、9号土塙が南にあり、複合していた。9号土塙から、かわらけ3点、人骨片が出土した。

規 模 8号: 東辺1.28m、北辺0.84m、深さ15cm、9号: 断面B-B'長さ1.67m、深さ16cm。

遺 物

23-1かわらけ。口径12cm、底径5.4cm、器高2.9cm。中粒砂含み、淡褐色。壺残存。

23-2かわらけ。口径10.9cm、底径5.4cm、器高3.1cm。細粒砂含み、淡褐色。壺残存。

23-3かわらけ。口径9.9cm、底径3.9cm、器高2.9~3.1cm。底部外面に柾目痕あり。壺残存。

10号土塙 (第23図)

位 置 本土塙は、内郭の東部にあり、4号土塙概要の北東に検出された。遺物は鉄器1点が出土した。

規 模 北辺3.03m、深さ9cm。

遺 物 本遺構の北壁際から鉄器が出土。

23-7鉄器(釣)。長さ4cm、最大幅1.6cm。

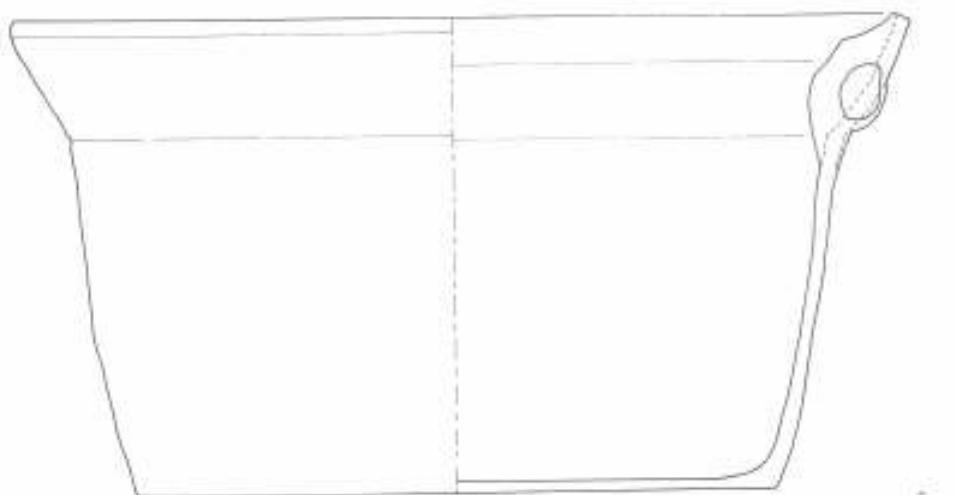
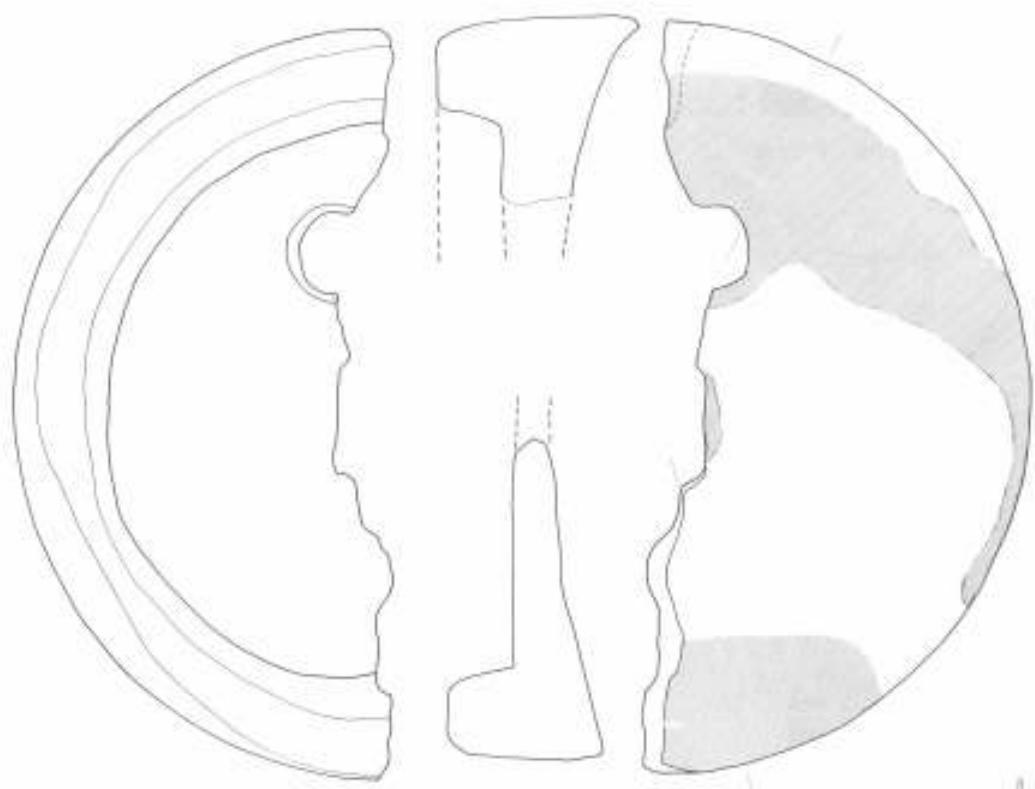
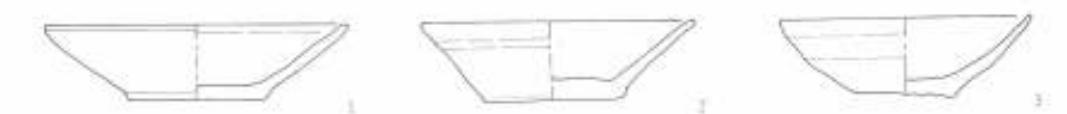
グリッド出土遺物 (第24図、図版41)

1一板石塔婆。残存高31cm、幅18.9cm、厚さ2.6cm。錆泥片岩。銘は「妙心、享十年正月四日、禪尼」と刻まれている。年号は永享十年(1438)と推定される。G-14区出土。

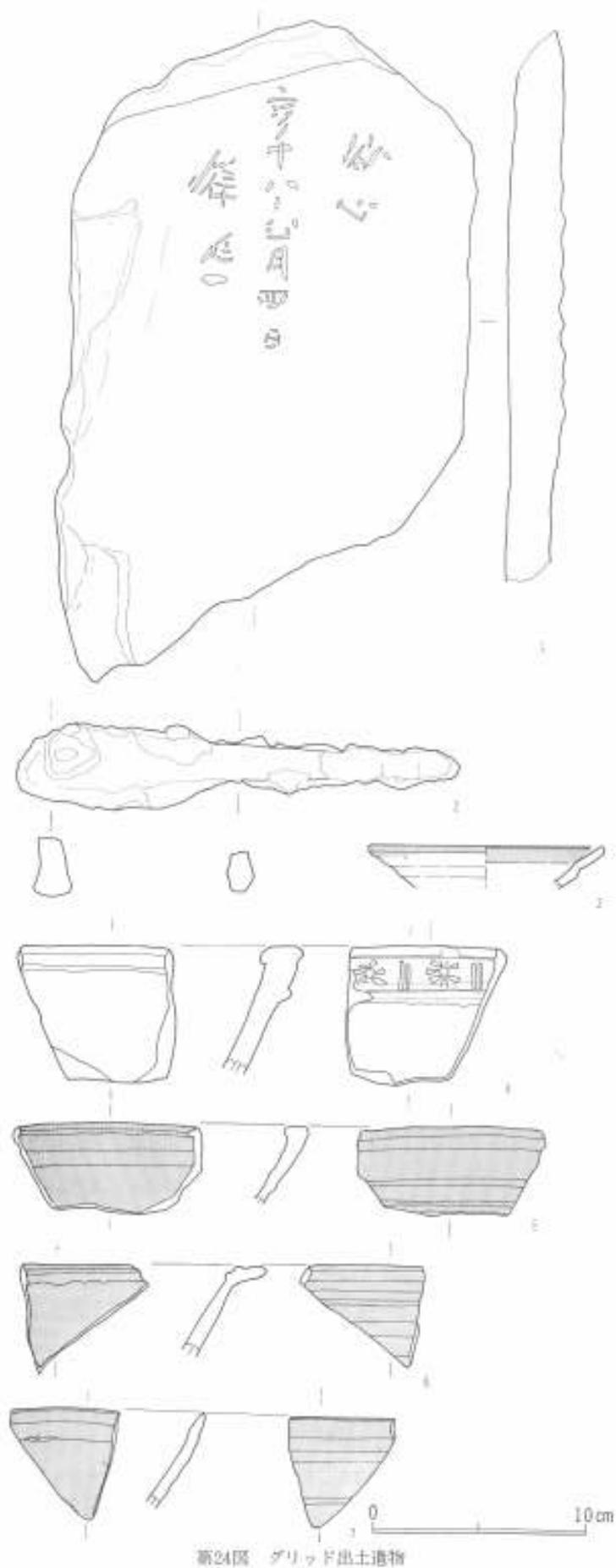
2一鉄器(刀)。残存長21cm、刃幅2.3cm、厚さ0.9cm、茎長12.4cm、茎幅1.5cm。H-1-9区出土。

3一小皿(瀬戸焼)。口径11.1cm、残存高2cm。細粒破含み、地肌は灰白色、釉薬は灰釉。I・J-3・4区出土。

4一火鉢。粗粒砂を含み、黒色を呈す。口縁端部は肥厚しており、外面に菊花文の押印と、



0 10cm



凸帯がみられる。

5—壺鉢（美濃焼）。細粒砂含み、
地肌は淡褐色、釉薬は鬼板釉。
G-12区出土。

6—折縁深皿（瀬戸焼）。細粒砂
含み、地肌は灰白色、釉薬は
灰釉。

7—平碗（瀬戸焼）。細粒砂含み、
地肌は灰白色、釉薬は灰釉。

第24図 グリッド出土遺物

V. 樋ノ上遺跡

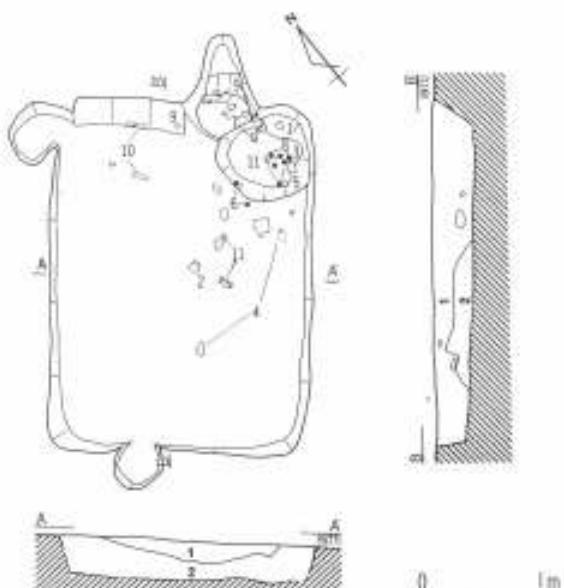
1. 遺跡の概観

樋ノ上遺跡は、荒川左岸にある自然堤防上に立地しており、今回の調査区は、県立熊谷西高校の東側に位置し、標高40.1~40.3mを測る。

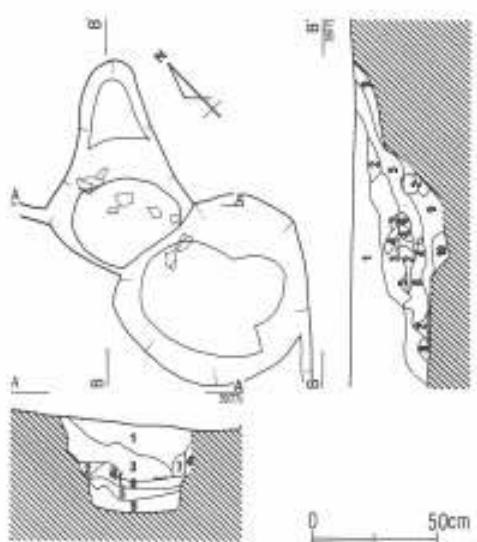
今回の調査によって、奈良~平安時代の竪穴式住居跡5軒、中世~近世の土塙15基、中世の集石造構7基、溝跡5本、近世の火葬墓11基が検出された。

住居跡は、調査区の南側と、北側の水路工事部分から検出され、土塙は、東側と西端に検出された。集石造構と溝跡は、東側に検出され、重複しているもののが多かった。火葬墓は、1基単独で検出されたものと、9基が集中しているものとがあった。

2. 遺構と遺物



第25図 1号住居跡



第26図 1号住居跡カマド

1号住居跡 (第25~27図、図版18・41・42)

位 置 本住居跡は、調査区の南側に位置し、1号集石造構の北側・2号住居跡の西側に検出された。平面形は、長方形を呈し、長軸の方位は、N-41°-Eを示す。ピットは、北角と、西角の近くで、壁と接して検出された。貯蔵穴は、東角にあり、径66×77cmを測る。壁溝は検出されなかった。

土層は、1層がローム粒子を多く含む黒褐色土で、2層がローム粒子を少し含む黒褐色土であった。

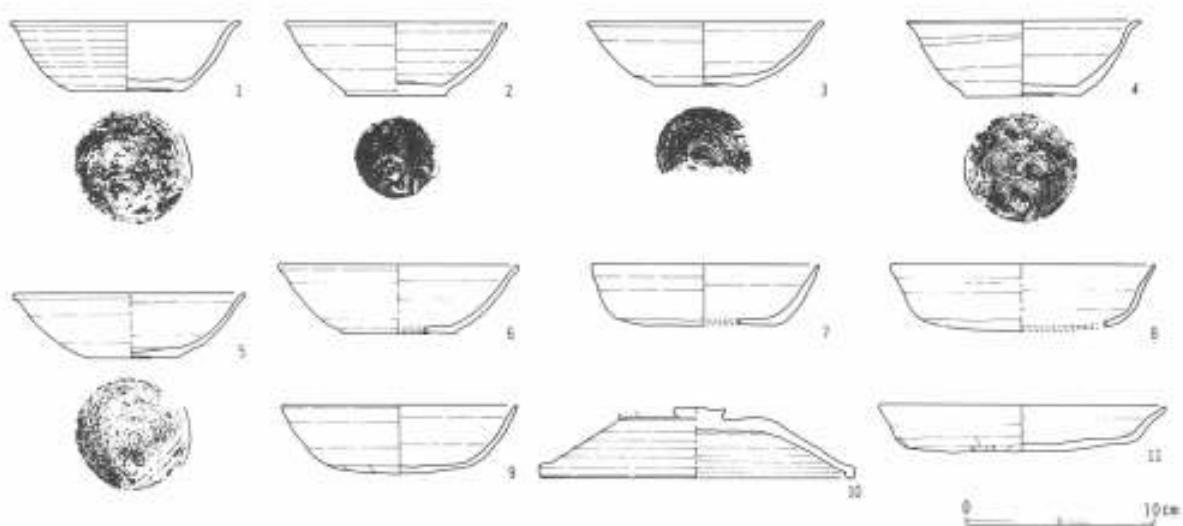
壁は、北壁が125°の角度で立ち上がっていいる他は、ほぼ垂直に立ち上がっていた。壁高は、床面から遺構確認面まで22~32cmを測る。

カマドは、北壁の東角寄りに設置されていた。主軸はN-39°-Eを示し、焚口部の奥行27cm、燃焼部の幅58cm・奥行27cm、煙道部の幅30cm・奥行31cmを測る。土層は、1・5~9層が暗褐色土、2・10層が黄褐色土、3層が黒褐色土、4層が焼土であった。5・7・8層は炭化物と焼土を含み、6・10層は焼土ブロックを含んでいた。

規 模 長軸2.8m、短軸2.06m

遺 物 土器片が44点検出され、カマド・貯蔵穴とその周辺から出土した。

1一抔(須恵器)、口径12.2cm、底径6.1cm、器



第27図 1号住居跡出土遺物

高3.7cm、粗粒砂・細礫含み、灰白色。右の回転糸切り底。土残存し、貯蔵穴出土。
2一环(須恵器)、口径11.9cm、底径5.4cm、器高3.9cm、細粒砂含み、灰褐色。右の回転糸切り底。土残存し、床上10cm出土。

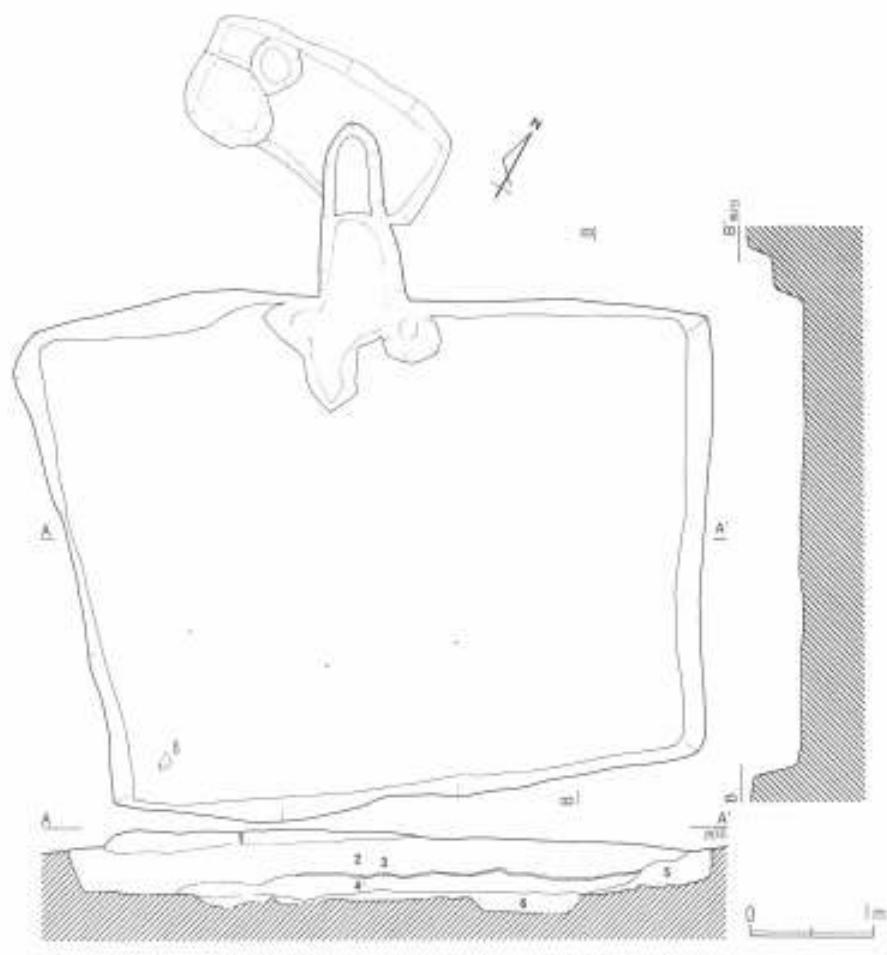
3一环(須恵器)、口径12.6cm、底径5cm、器高3.4cm、粗粒砂・細礫含み、灰褐色。右の回転糸切り底。土残存し、貯蔵穴出土。
4一环(須恵器)、口径12.3cm、底径6cm、器高4cm、粗粒砂・細礫含み、暗灰褐色。右の回転糸切り底。土残存し、床上20cm出土。

5一环(須恵器)、口径12.4cm、底径5cm、器高3.5cm、粗粒砂・細礫含み、灰褐色だが一部茶褐色。右の回転糸切り底。土残存し、貯蔵穴出土。

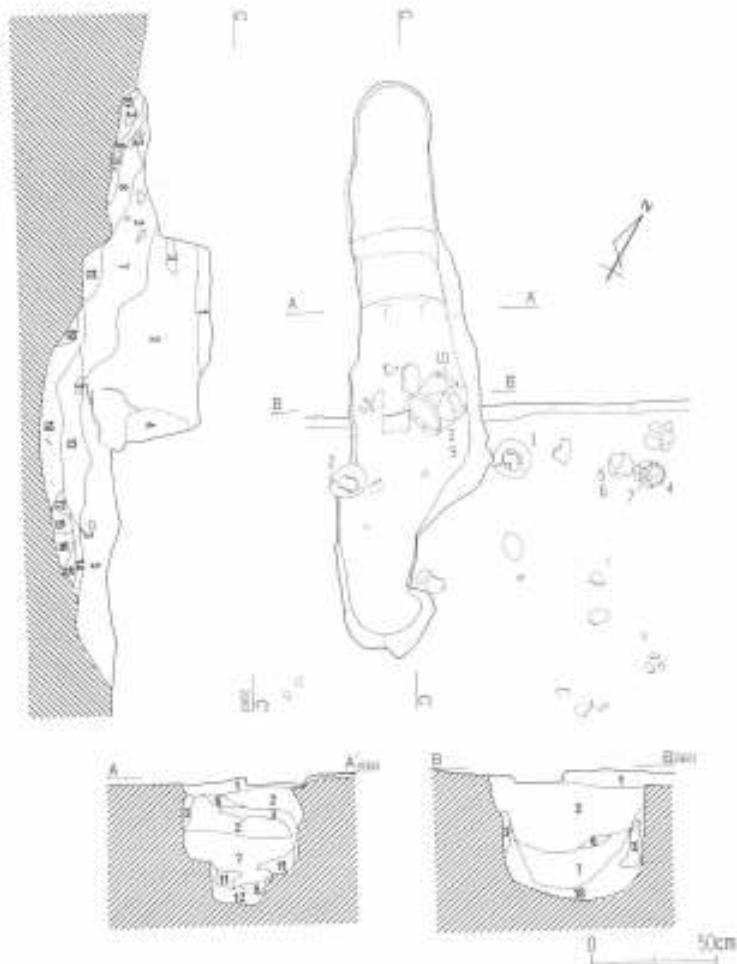
6一环(須恵器)、口径13cm、底径6cm、器高3.7cm、粗粒砂含み、暗灰褐色。右の回転糸切り底。土残存し、貯蔵穴出土。

7一环(土師器)、口径12.2cm、底径8.7cm、器高3.3cm、中粒砂含み、褐色で内外面煤けている。底部窪削り。土残存し、カマド出土。

8一环(土師器)、口径14cm、



第28図 2号住居跡



第29図 2号住居跡カマド

- 底径10.8cm、中粒砂含み、淡褐色。底部削り。土残存し、貯藏穴出土。
- 9-1环（土師器）、口径12.7cm、底径7.8cm、器高3.7cm、中・粗粒破含み、褐色。底部削り。土残存し、カマド出土。
- 10-1环（須恵器）、口径17cm、縦径8.2cm、器高3.8cm、粗粒砂含み、暗灰褐色。天井部外面左・右の回転窓削り。土残存し、床面出土。
- 11-1环（土師器）、口径15.2cm、底径12.1cm、器高2.5cm、中粒砂含み、暗茶褐色で煤けて黒い所ある。底部削り。土残存し、貯藏穴出土。

2号住居跡（第28～30図、図版18・19・42）

位 置 本住居跡は、1号住居跡の東側・4号溝

跡の北側に検出された。平面形は、長方形を呈し、短軸の方位は、N-35°Wを示す。柱穴・貯藏穴・壁溝は検出されなかった。

土層は、1・2・4・5層が暗褐色土、3層が炭化物、6層が酸化鉄・焼土・炭化物を含む褐色土であった。5層はローム粒子を多く含んでいた。

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、床面から遺構確認面まで44cmを測る。

カマドは、北壁のほぼ中央に設置されており、主軸はN-33°Wを示す。焚口部の幅36cm、奥行65cm、燃焼部の幅57cm、奥行80cm、煙道部の幅35cm、奥行85cmを測る。土層は、1・13-15層は黒褐色土で、13・14層には焼土・炭化物が多く含まれていた。2・5・7-9・17・18層は暗褐色土で、7・9・18層には焼土ブロックが、5・8層にはローム粒子・ブロックが多く含まれていた。

3層は焼土であり、4・10・12・16層は暗黄褐色土で、12層には焼土・炭化物が多く含まれていた。6層は黄褐色土・11層は焼土・ローム粒子を多く含む黑色土・19層は焼土粒子を多く含む褐色土であった。

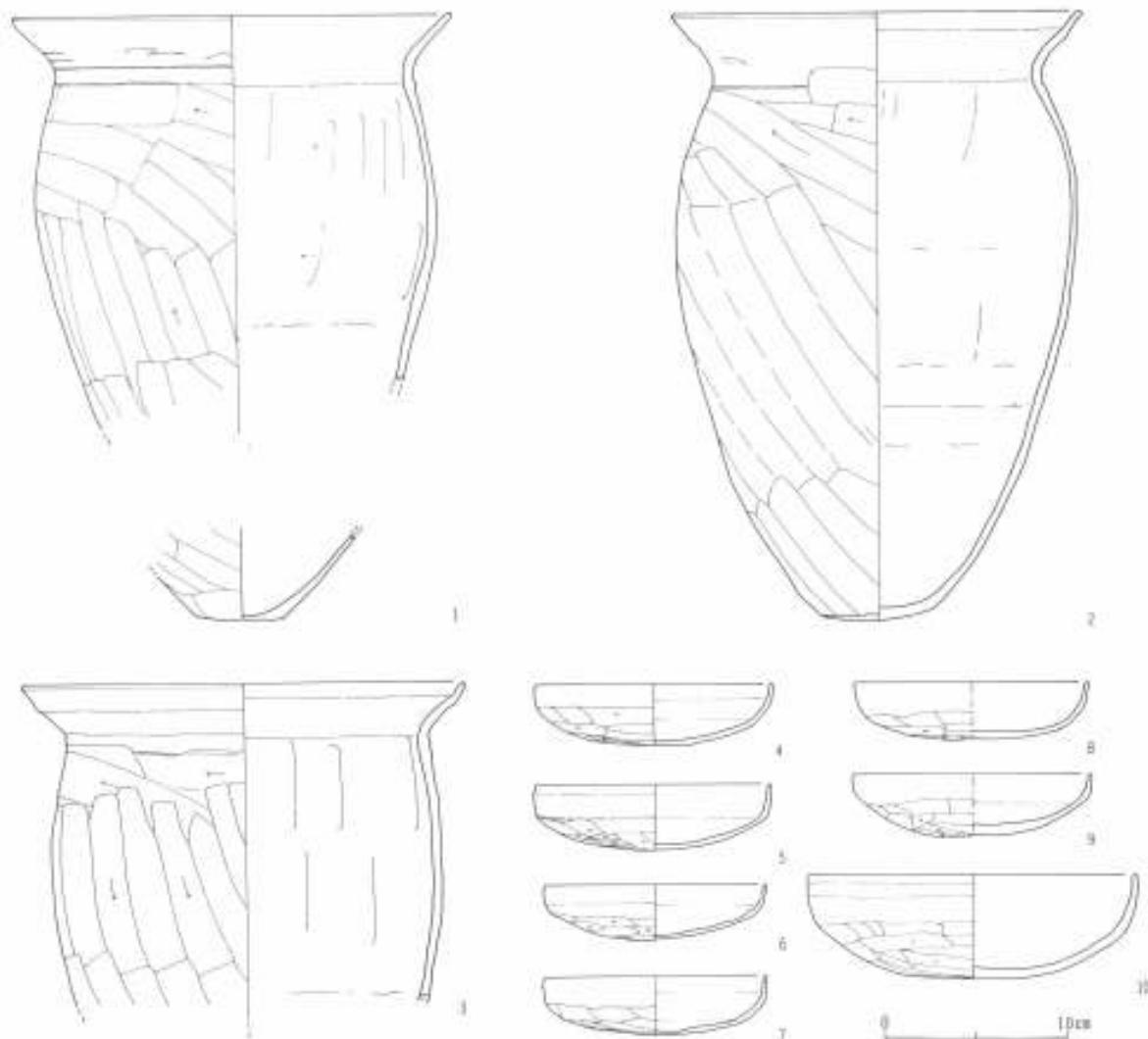
カマドの袖には、土師器の甕（第30図一1・2）が倒立した状態で埋め込まれていた。

規 模 長軸5.18m、短軸4m

遺 物 土器片が35点、川原石が43点検出されたが、土器片はカマド及びその周辺に多く、川原石は覆土中にみられた。

1-甕（土師器）、口径24cm、頸部径19.6cm、底径4.8cm、中・粗粒砂含み、茶褐色。頸部外面窓削り・内面窓ナゲ。肩下部の一部欠損し、カマドの東袖に使用。

2-甕（土師器）、口径22cm、頸部径17.7cm、



第30図 2号住居跡出土遺物

1—壺（土師器）。口径21.8cm、底径6cm、器高33.1cm。

中・粗粒砂含み、暗淡褐色。胴部外面窪削り・内面窓ナデ。完形。カマドの西袖に使用。

3—壺（土師器）。口径24.1cm、頸部径19.9cm、中・粗粒砂含み、茶褐色。胴部外面窪削り・内面窓ナデ。胴下部欠損し、カマド出土。

4—杯（土師器）。口径13cm、器高3.4cm、中粒砂含み、淡褐色、一部茶褐色。体部外面窪削り。完形。床面出土。

5—杯（土師器）。口径12.8cm、器高3.6cm、中粒砂含み、茶褐色。体部外面窪削り。ほぼ完形、床面出土。

6—杯（土師器）。口径12.2cm、器高3cm、中粒砂含み、淡褐色。体部外面窪削り、完形、

床面出土。

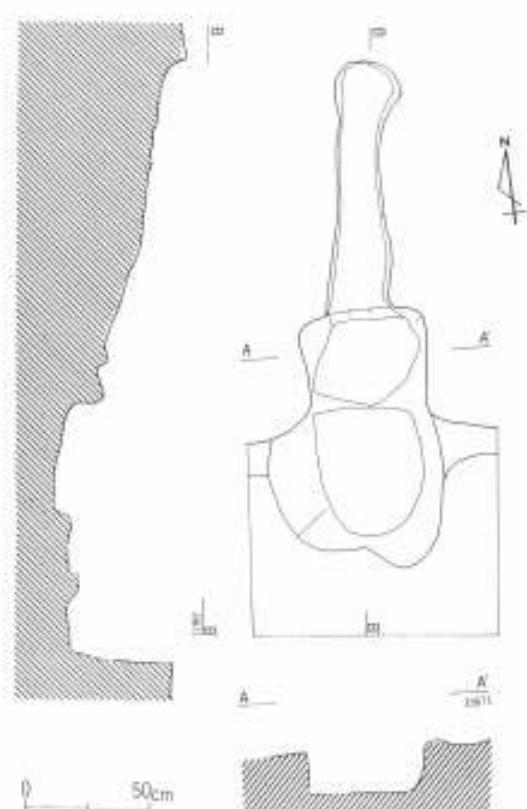
7—杯（土師器）。口径12.1cm、器高3.2cm、中粒砂含み、茶褐色。体部外面窪削り。口部残存し、床面出土。

8—杯（土師器）。口径12.8cm、器高3.1cm、中粒砂含み、淡褐色。体部外面窪削り。口部残存し、床面出土。

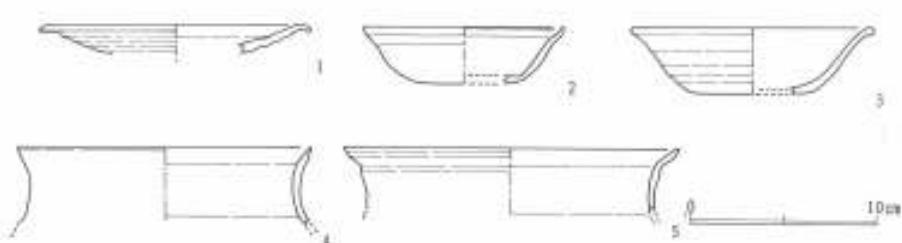
9—杯（土師器）。口径12.9cm、器高3.4cm、中粒砂含み、淡褐色。体部外面窪削り。口部残存し、カマド出土。

10—杯（土師器）。口径18cm、器高5.8cm、中粒砂含み、暗茶褐色。体部外面窪削り。完形、カマド出土。

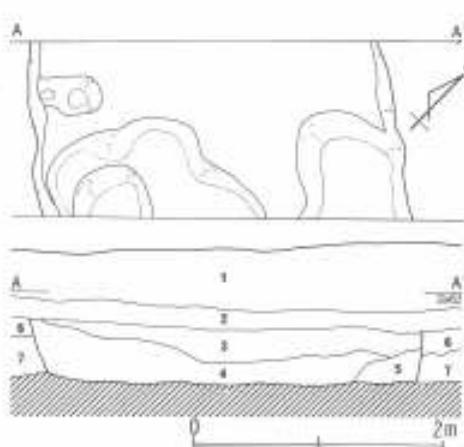
土師器の杯の4・5・6・7は、カマドの東側に集中して検出された。



第31図 3号住居跡カマド



第32図 3号住居跡出土遺物



第33図 4号住居跡

3号住居跡 (第31・32図、図版19)

位 置 本住居跡は、2号溝跡と複合して検出され、カマドの部分のみ調査を実施した。

カマドは、北壁に設置されており、主軸はN-7.5°-Eを示す。焚口部は、半円形を重ねた形に掘られ、燃焼部は、方形に掘り込められていた。煙道部は、壁外に向いて細くなり、煙出し部は、円形に掘られていた。

規 模 焚口部一幅62cm、奥行46cm、深さ6cm、燃焼部一幅48cm、奥行24cm、煙道部一幅17-24cm、奥行76cm、煙出し部一径27cm

遺 物 土器片が、焚口部から検出された。

1-皿 (須恵器)、口径14.5cm、残存高1.5cm、中・粗粒砂含み、灰白色。土残存。

2-壺 (土師器)、口径10.8cm、底径5.2cm、器高3.1cm、中粒砂含み、褐色、内面煤付で黒い。外面荒れていて整形不明瞭。土残存。

3-壺 (須恵器)、口径13.1cm、底径6.5cm、器高3.5cm、中・粗粒砂含み、灰褐色。回転糸切り底。土残存。

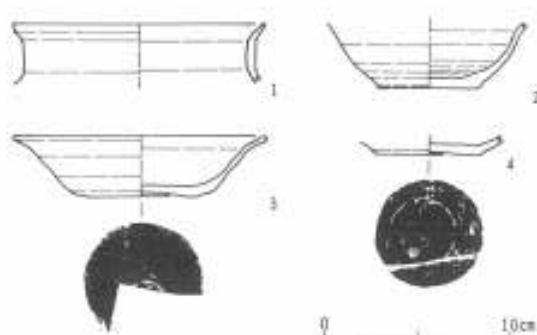
4-壺 (土師器)、口径15.6cm、細粒砂含み、暗褐色。口縁の土残存。

5-壺 (土師器)、口径17.9cm、中・粗粒砂含み、茶褐色。口縁部横ナデ、頸部外面指ナデ。口縁部の土残存。

4号住居跡 (第33・34図、図版43)

位 置 本住居跡は、基準点No.1から北東約40mの所に検出された。床面は、大きなピットが掘られており、貼床となっていた。壁高は54cmを測り。北壁はほぼ垂直だが、南壁は69°で立ち上がっていた。

土層は、1層が表土、2層が灰茶褐色土、3層が暗茶褐色土、4層が暗黄褐色土、5



第34図 4号住居跡出土遺物

層が暗茶褐色土、6層が黒褐色土、7層が黄褐色土であり、3・5層に多くの土器片が含まれていた。

規 模 南北方向—2.92m

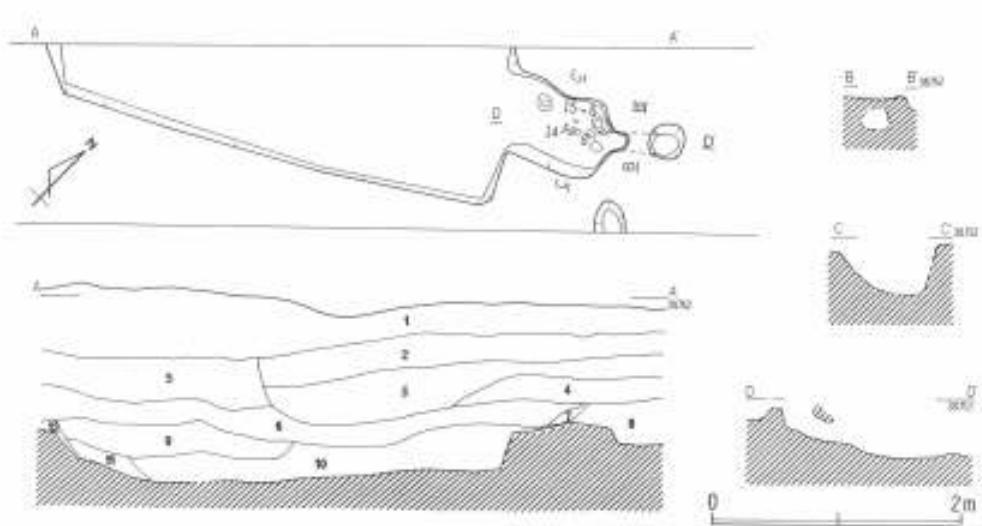
遺 物

1—甕（土器）、口径13.6cm、中粒砂含み、淡褐色。口縁部横ナデ、口縁部の土残存。

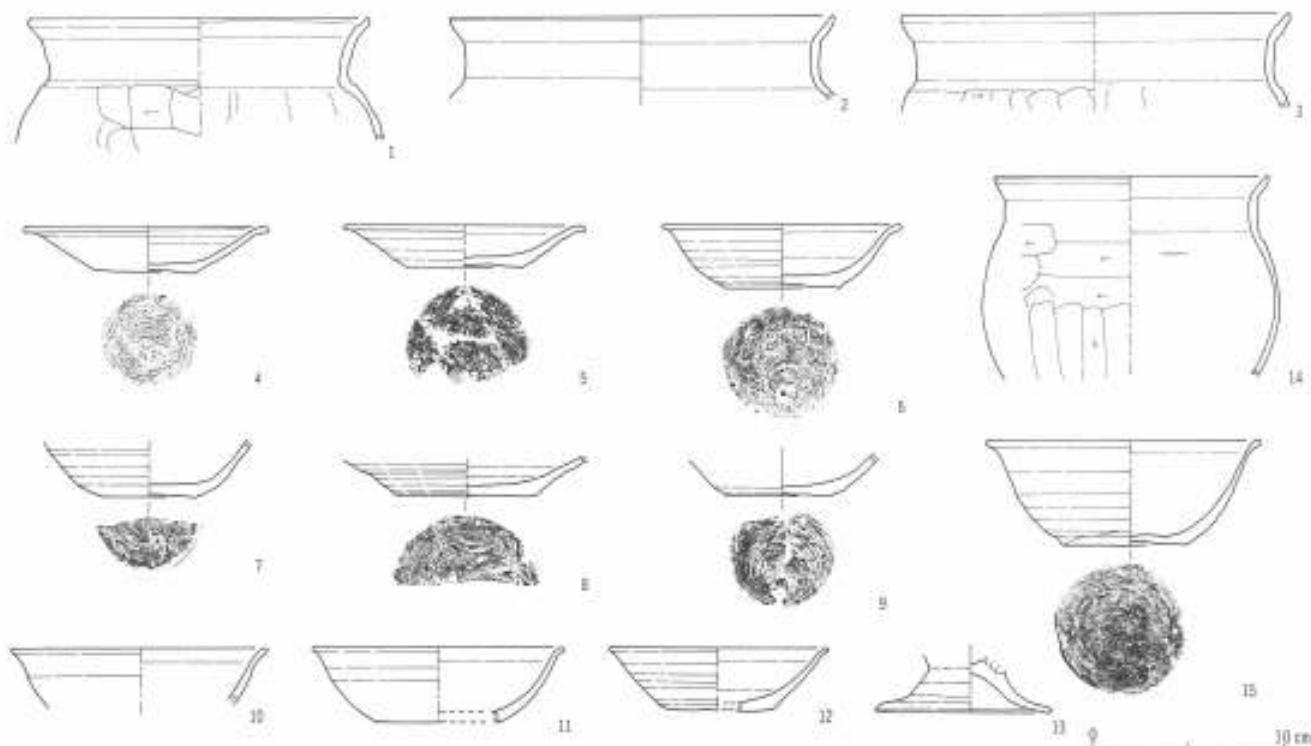
2—甕（須恵器）、底径5.4cm、中粒砂含み、淡黄褐色。右の回転条切り底。土残存。

3—甕（須恵器）、
口径13.8cm、
底径4.9cm、
器高3.3cm、
粗粒砂・細礫
含み、暗灰褐色。
右の回転
条切り底。土
残存。

4—甕（須恵器）、



第35図 5号住居跡



第36図 5号住居跡出土遺物

底径 5.8 cm、粗粒砂、細礫含み、灰褐色。右の回転糸切り底。底部のみ完存。

5号住居跡（第35・36図、図版20・43）

位 置 本住居跡は、4号住居跡の北側に検出さ

概 要 れた。主軸の方位はN-61°-Eを示す。ビ

ット・壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。

土層は、1層が表土、2・6層が黒褐色土、3・4層が茶褐色土、5層が灰茶褐色土、7・8・11層が暗茶褐色土、9・10・12層が暗黄褐色土であった。

壁高は46cmを測り、カマドは東壁に設置

されていた。主軸はN-64°-Eを示す。燃焼部は竪穴外に張出していた。燃焼部幅60cm・奥行90cm、煙道部幅14cm・奥行58cmを測る。

遺 物

1-甕（土師器）、口径18.3cm、頭部径16cm、中粒砂含み、黒褐色・褐色。口縁の土残存。

2-甕（土師器）、口径20.4cm、頭部径18.9cm、中粒砂含み、淡褐色。口縁の土残存。

3-甕（土師器）、口径20.5cm、頭部径18.8cm、中粒砂含み、外面黒褐色・内面淡褐色、口縁の土残存。

4-皿（須恵器）、口径13.2cm、底径5.3cm、器高2.5cm、粗粒砂含み、灰褐色。右の回転糸切り底。土残存。

5-皿（須恵器）、口径12.8cm、底径6.2cm、器高2.2cm、灰褐色・灰白色。右の回転糸切り底。土残存。粗粒砂含む。

6-環（須恵器）、口径12.8cm、底径6.1cm、器高3.4cm、粗粒砂・細礫含み、暗灰褐色。右の回転糸切り底。土残存。カマド出土。

7-環（須恵器）、底径5cm、粗粒砂・細礫含み、部体灰白色・底部灰褐色。右の回転糸切り底。土残存。

8-環（須恵器）、底径7.6cm、粗粒砂・細礫含み、灰黃褐色。右の回転糸切り底。土残存。カマド出土。

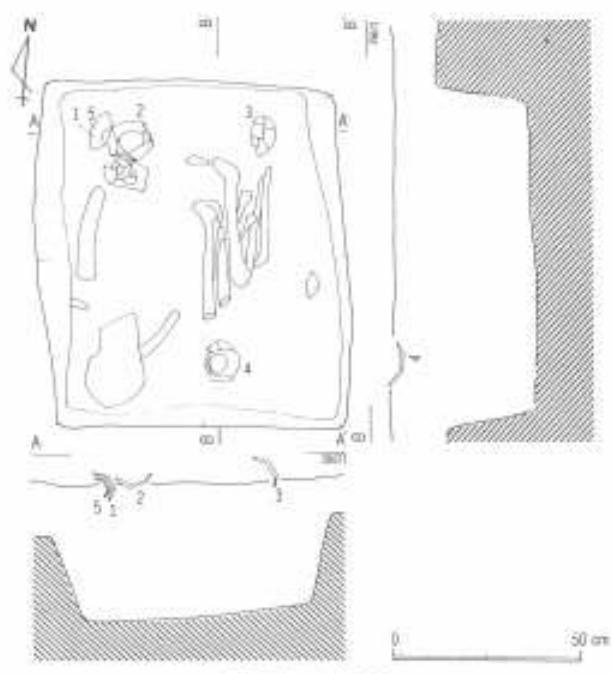
9-環（須恵器）、底径5.6cm、粗粒砂・細礫含み、黒褐色。右の回転糸切り底。土残存。

10-環（須恵器）、口径13.7cm、粗粒砂含み、黒褐色。土残存。

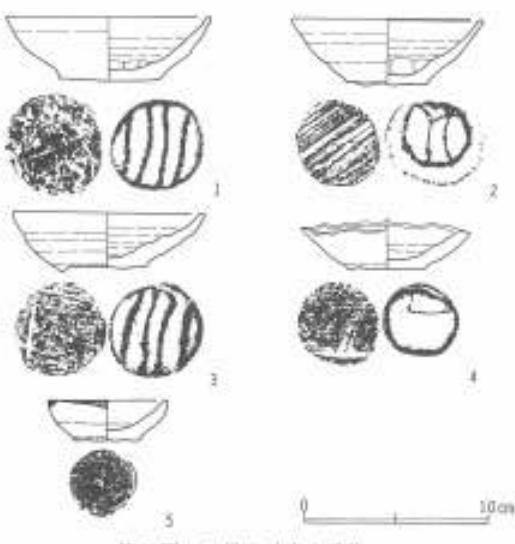
11-環（須恵器）、口径13.5cm、底径6.5cm、器高4cm、粗粒砂・細礫含み、黒褐色・淡褐色。右の回転糸切り底。土残存。

12-環（須恵器）、口径11.8cm、底径6cm、器高3.3cm、中粒砂含み、暗灰褐色。土残存。

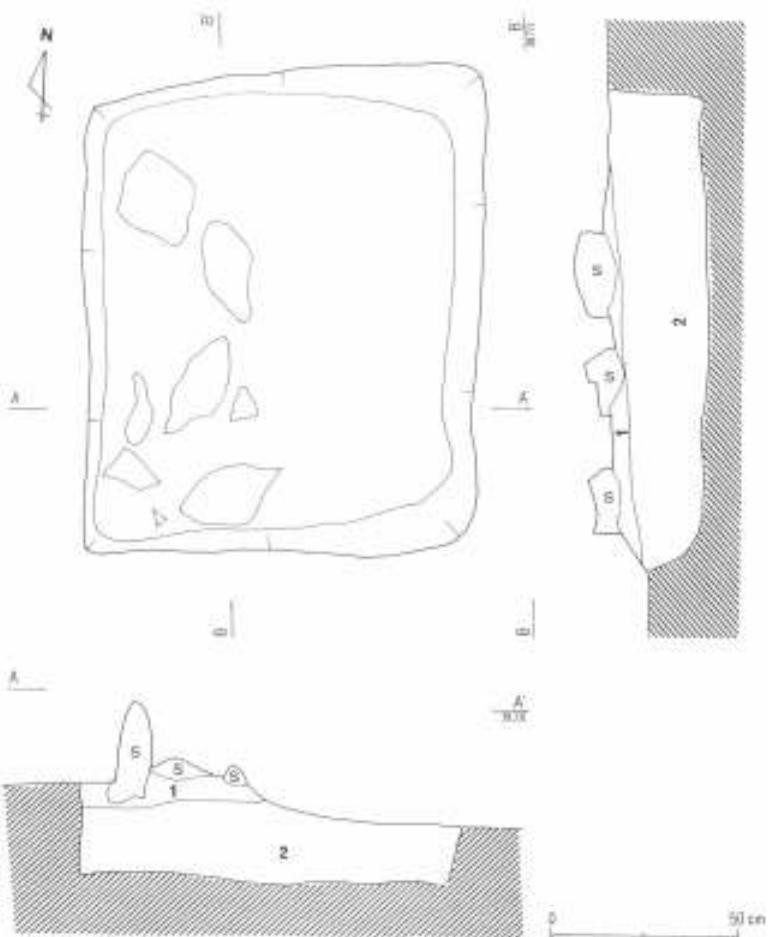
13-台付甕（土師器）、脚端部径9.5cm、中粒砂含み、茶褐色。脚の土残存。



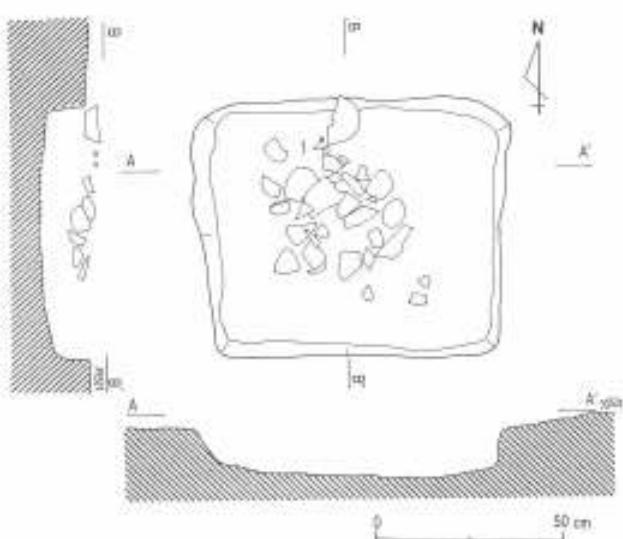
第37図 1号土塁



第38図 1号土塁出土遺物



第39図 2号土塁



第40図 3号土塁

14—壺（土師器）。口径14.5cm、頸部径13.3cm。茶褐色・外面煤けて黒い。胴部外面施削り。胴上部の壺残存。カマド出土。中・粗粒砂含む。

15—壺（須恵器）。口径14.5cm、底径6.5cm。器高5.6cm。粗粒砂含み。灰黄褐色。底部右の回転糸切り底。壺残存。カマド出土。

1号土塁（第37・38図、図版21・43）

位 置 本土塁は、調査区の西側に位置し、2号土塁の北面に位置し、長軸はN-8°-Wを示す。平面形は長方形を呈し、覆土上部にかわらけが5点置かれ、土塁内から人骨が1体検出された。

規 模 長軸91cm、短軸81cm、深さ32~40cm。

遺 物

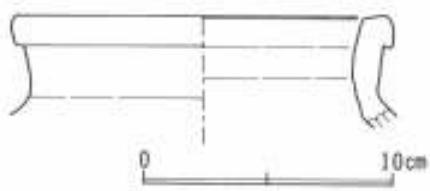
1—かわらけ、口径10.9cm、底径5.4cm、器高3.4cm。中粒砂含み、淡黄褐色。底部一外面回転糸切り→ナデ・内面指ナデ痕。壺残存。

2—かわらけ、口径10.4cm、底径4.4cm、器高3.5cm。中粒砂含み、淡褐色。底部一外面柱目痕・内面指ナデ痕。壺残存。

3—かわらけ、口径10.3cm、底径4.6cm、器高2.9cm。中・粗粒砂含み、淡褐色。底部一外面柱目痕・内面指ナデ痕、壺残存。

4—かわらけ、口縁は打ち欠いてほぼ平らになっている。残存口径9.2cm、底径4.2cm、残存高2.5cm。中粒砂含み、淡黄褐色。底部一外面柱目痕・内面指ナデ痕。口縁のみ欠損。

5—かわらけ、口径6.5cm、底径3.6cm、器高2.2cm。細粒砂含み、淡褐色。底部一



第41図 3号土塚出土遺物

右の回転糸切り痕。口縁部—タール付着。
完形。

2号土塚 (第39図、図版22)

位 置 本土塚は、調査区の西側にあり、1号土
概 要 塚の南東、1号火葬基の南西に位置する。
平面形は長方形を呈し、長軸はN—1.5°—E
を示す。覆土上には、川原石が8点置かれ
ており、1点は立てられていた。覆土は、
1層が黒褐色土、2層が焼土・炭化物を含
む黒褐色土であった。

規 模 長軸1.28m、短軸1.02m、深さ25cm。

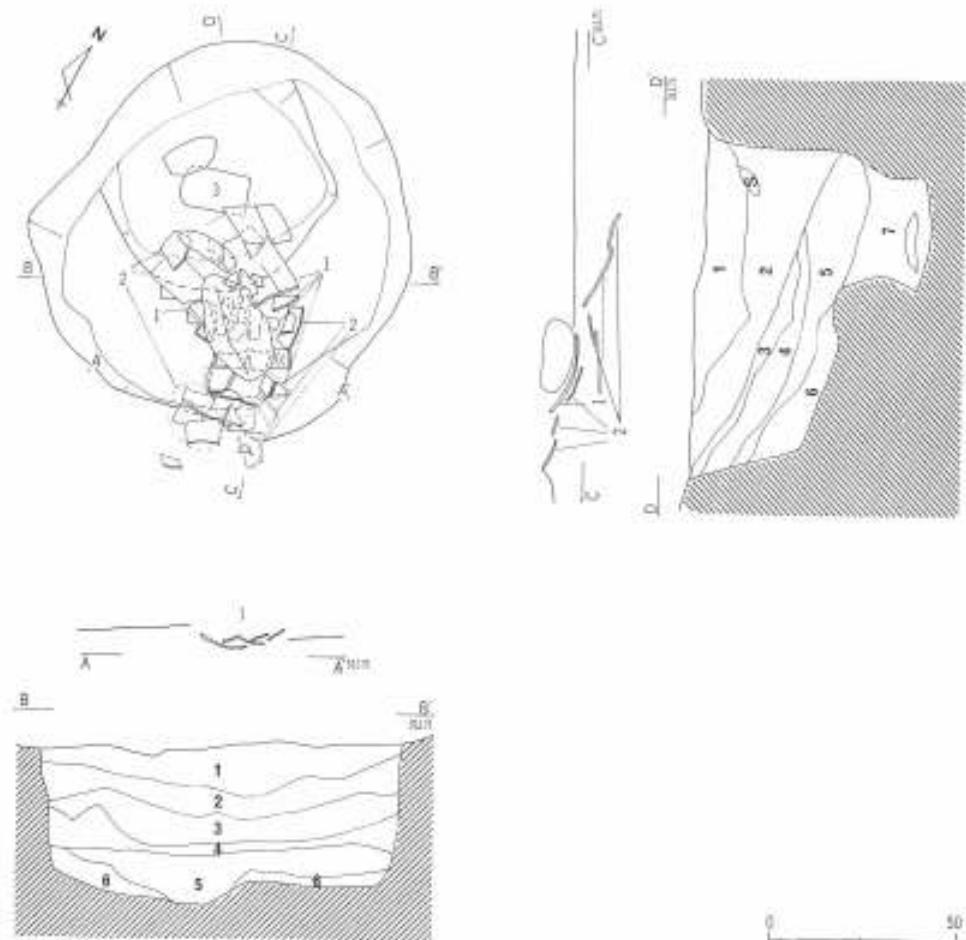
遺 物 川原石8点

3号土塚 (第40・41図、図版23・43)

位 置 本土塚は、2号土塚の北東、4号土塚の
概 要 南西に位置する。平面形は長方形を呈し、
長軸はN—90°—Eを示す。覆土上部には、
川原石28点・板石塔婆6点・土器9点・石
臼1点が置かれていた。覆土は黒褐色土で
あった。

規 模 長軸82cm、短軸68cm、深さ12cm

遺 物 上述したように、覆土上部から出土した。
1—壺、口径14.8cm、頸部径13.9cm、残存高4.5
cm、粗粒砂含み、黒褐色。折り返し口縁。
口縁部の壺残存。



第42図 4号土塚

4号土塙(第42・43

図、図版24・43図)

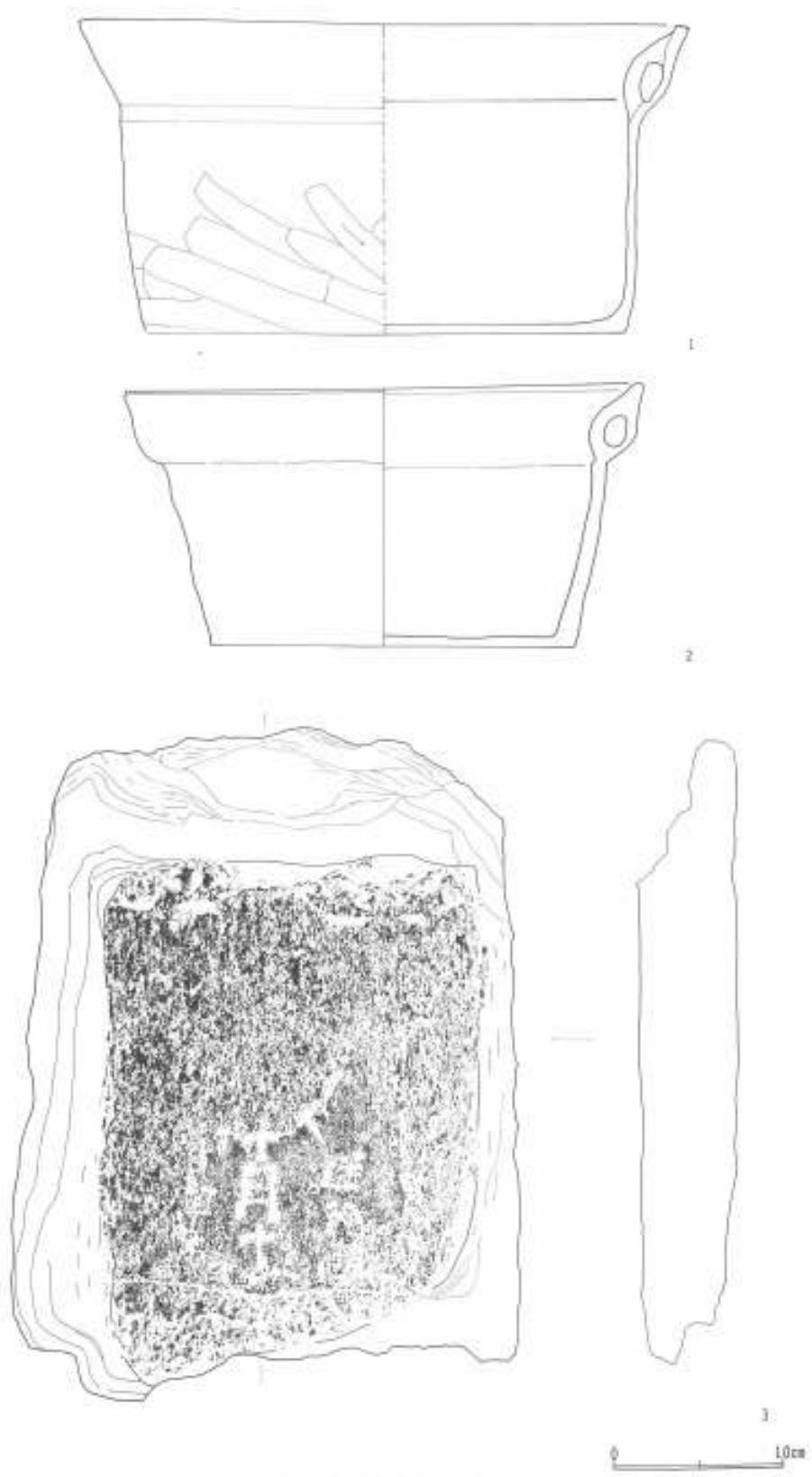
位 置 本土塙は

概 要 調査区の北
西部にあり、
3号土塙の
北東、5号
土塙の北西
に位置する。

平面形は
不整円形を
呈し、北側
は更に梢円
形に深さ25
cm掘り下げ
られていた。

覆土上部
は内耳土器・
川原石が置
かれており、
板石塔婆は
覆土中及び
底面上から
検出された。

土層は、
1～4層が
暗褐色土で、
5～7層は
黒褐色土で
あった。1
層は炭化物・
焼土を含み、
2・6層は
ローム粒子・
ブロックを
多く含む。
3～5層は



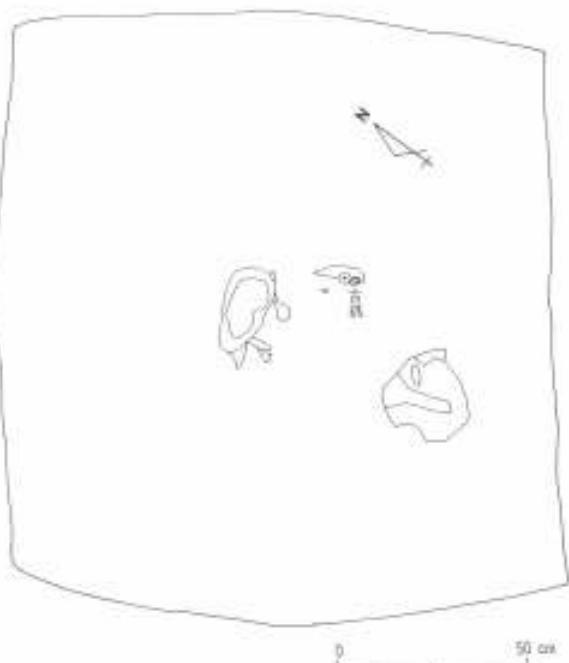
第43図 4号土塙出土遺物

ローム粒子を少し含み、7層はローム粒子を多く含み、炭化物を少し含んでいた。

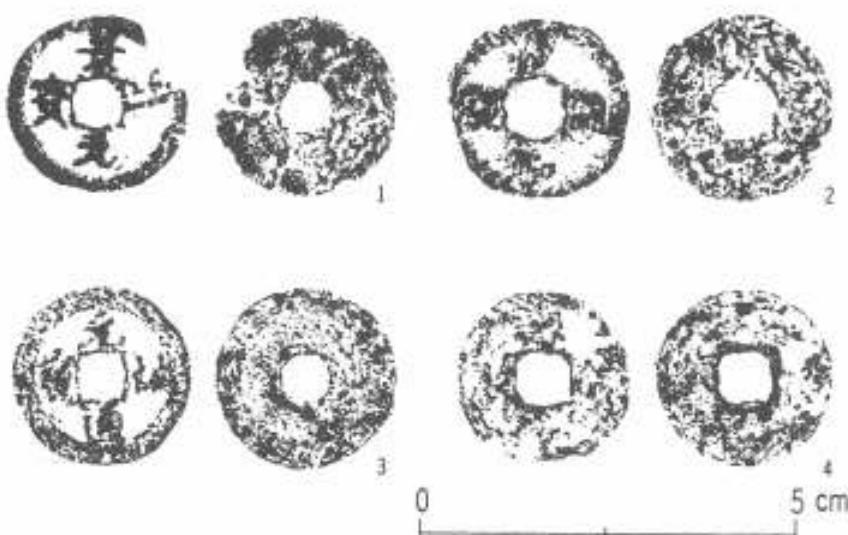
規模 直径1.02m、深さ63cm

遺物 土器片47点、川原石7点、板石塔婆1点。

1—内耳土器、口径35.7cm、頸部径30.5cm、底径28.2cm、器高18.3cm、粗粒砂含み、灰褐色、外面・底部内面焼けて黒い。体部外面は指ナデ→埴ナデ。壺残存。覆土上部出土。



第44図 5号土塚



第45図 5号土塚出土遺物

埴ナデ。壺残存。覆土上部出土。

2—内耳土器、口径30.6cm、頸部径26.3cm、底径21.6cm、器高15.3cm、粗粒砂含み、灰褐色、外面・底部内面焼けて黒い。体部外面は指ナデ→埴ナデ。壺残存。覆土上部出土。

3—板石塔婆、残存幅29.8cm、残存高37.8cm、厚さ5.7cm、点紋綠泥片岩。「延○○、戊子十月十二日、○○○」の銘あり、種子は阿弥陀三尊の可能性あり。底面出土。

5号土塚 (第44・45図、図版25・44)

位置 本土塚は、4号土塚の南東、6号土塚の概要 南西に位置し、掘り方は確認されなかったが、人骨が検出された。

人骨は、北側に頭骨があり、頭骨の南東には腕骨が検出された。腕骨の上には、古錢が置かれていた。腕骨の南にも、骨片が検出されたが、腐食がひどく形態が不明瞭であった。

規模 不明

遺物 人骨の腕部の上に、古錢が4点検出された。

1—景祐元宝、直径2.4cm、真書体、銅錢。

2—嘉祐通宝、直径2.4cm、篆書体、銅錢。

3—元祐通宝、直径2.4cm、真書体、銅錢。

4—不明、直径2.4cm、銅錢。

6号土塚 (第46図、図版26

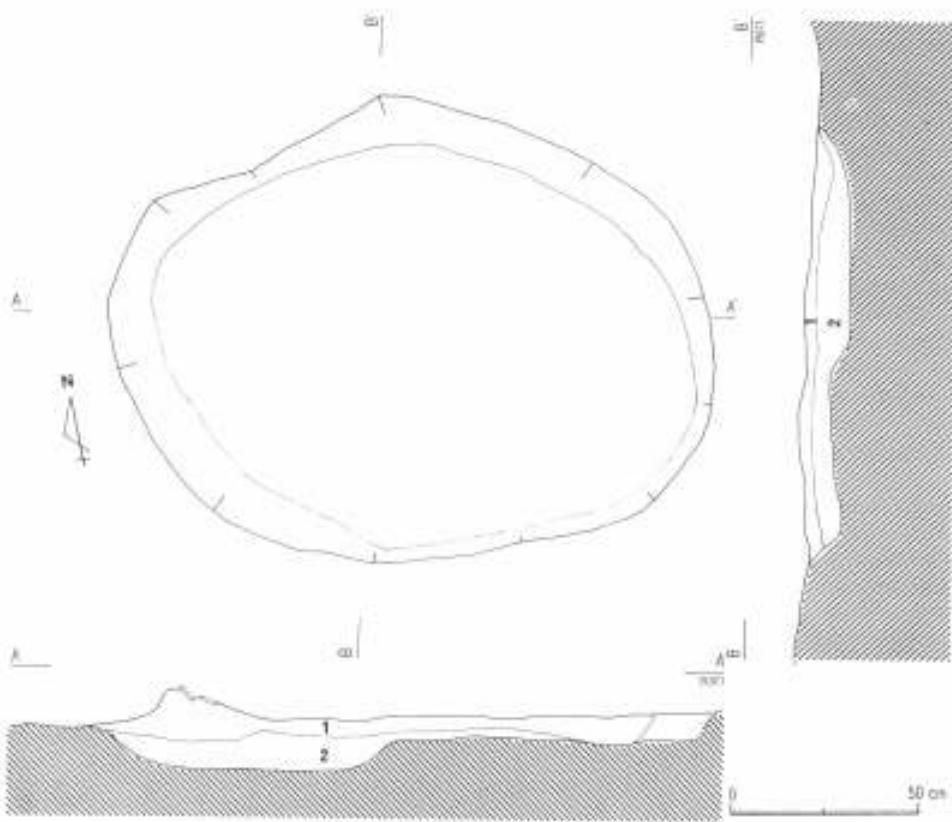
—1)

位置 本土塚は、5号土塚

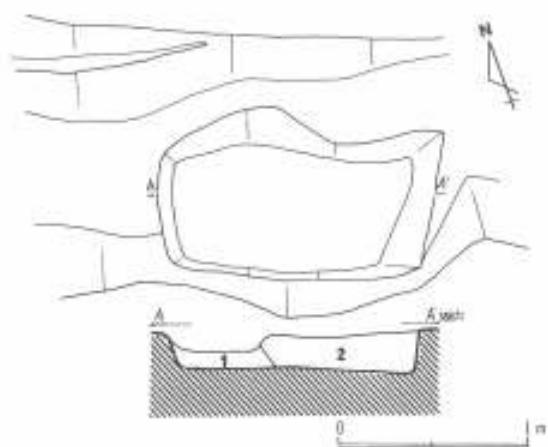
概要 の北東、7号土塚の南西に位置し、長軸はN—79°—Wを示す。平面形は橢円形を呈し、覆土は黒褐色土が堆積していた。

規模 長軸1.64m、短軸1.17m、深さ14cm

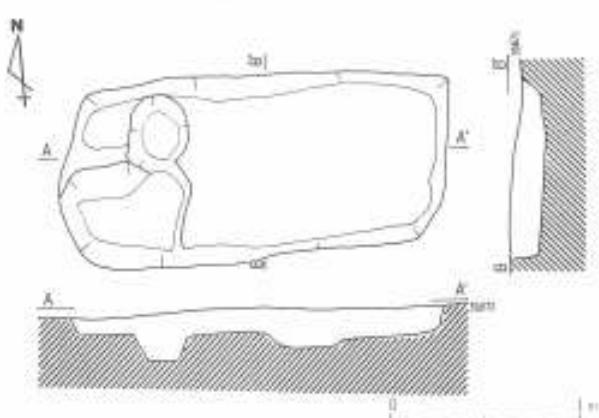
遺物 土器片2点。



第46図 6号土塁



第47図 7号土塁



第48図 8号土塁

7号土塁(第47図、図版35-1)

位 置 本土塁は、調査区の北西部から南東部へ概要 走る1号溝跡の底面を掘り下げて作られていた。1号溝跡の北西部に位置し、長軸はN-72°-Wを示す。平面形は長方形を呈し、覆土は、1層がロームブロック・酸化鉄を多く含む暗褐色粘質土、2層が酸化鉄を多く含む暗褐色粘質土であった。

規 模 南辺1.26m、西辺0.62m、東辺0.78m、深さ0.22m

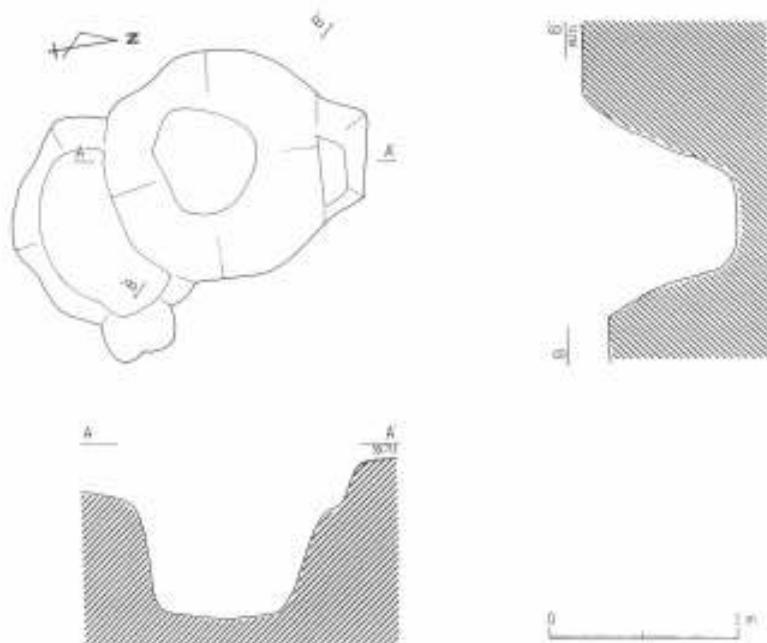
遺 物 なし

9号土塁(第48図)

位 置 本土塁は、2号住居跡の北側にあり、2号住居跡のカマドによって切られていた。概要 平面形は長方形を呈し、主軸はN-87°-Wを示す。東側は、3個のピットが掘られており、覆土は黒褐色土であった。

規 模 長軸2.12m、短軸1.02m、深さ0.16m～0.20m

遺 物 なし



第49図 9号土塁

9号土塁(第49図)

位 置 本土塁は、調査区の概要 ほぼ中央にあり、2号集石造構の西側に位置する。平面形は不整円形を呈する。

規 模 長径1.24m、短径1.16m、深さ0.82m

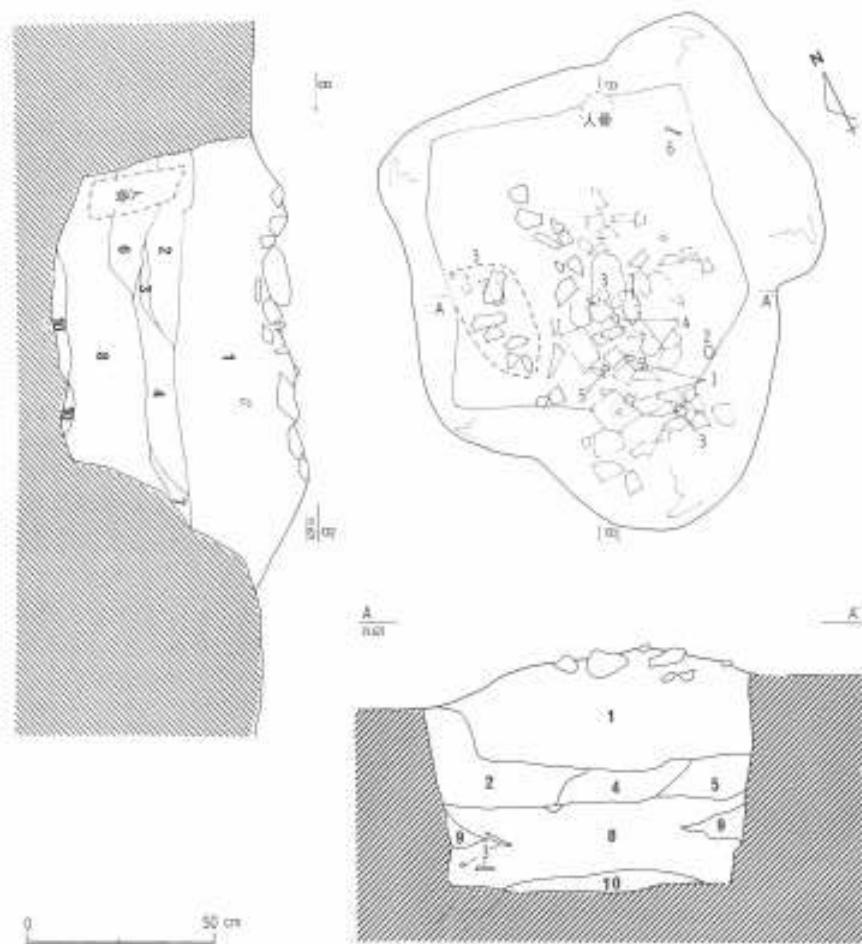
遺 物 なし

10号土塁(第50・51図、図版26・44)

位 置 本土塁は、調査区の

概 要 北西部にあり、7号土塁の北東に位置する。

平面形は角の丸い五角



第50図 10号土塁

形を呈し、長軸はほぼ北を示す。

覆土上部に川原石・板石塔婆・土器が検出され、北側には人骨が残存していた。

覆土は、1～5層が褐色土、6・8・9層が暗褐色土、7層が黄褐色土、10層が灰褐色土であった。1・2層には炭化物・焼土が含まれ、4・10層には酸化鉄が多く含まれていた。5・6・8層はロームブロックが多く含まれていた。

規 模 長軸1.22m、短軸0.87m、深さ0.57m

遺 物 土器片48点、川原石86点、鉄製品1点、板碑4点、石臼2点。

1—内耳土器、口径37.2cm、頸部径33cm、残存高14.6cm、中・粗粒砂含み、淡黄褐色・黒色。体部外面は指ナデ→泡ナデ。口部・底部に指痕・擦痕・剥離等の特徴的変形を示す。

1層出土。

2—内耳土器、口径31.5cm、中粒砂含み、淡黄褐色。口縁の半分が破損している。5層出土。

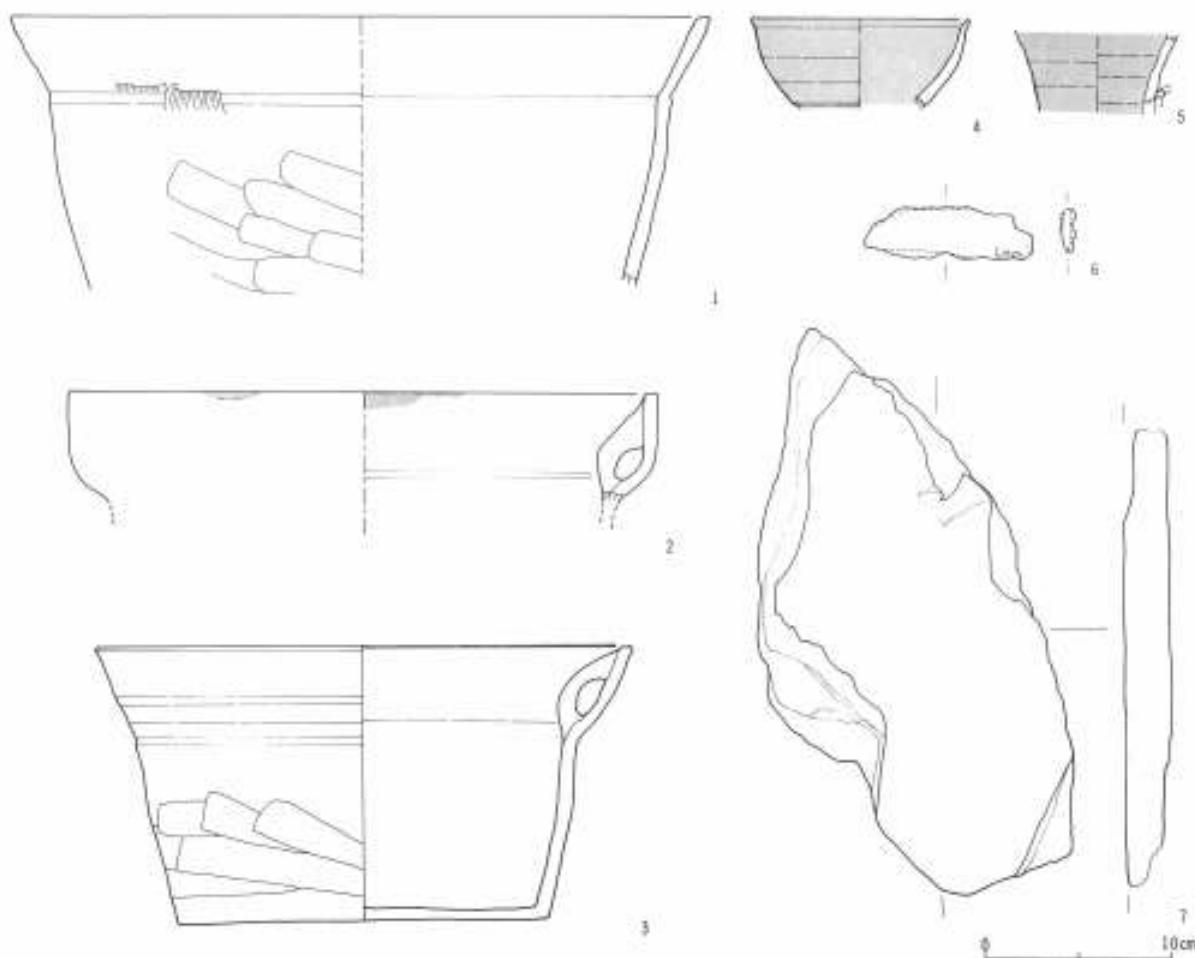
3—内耳土器、口径28.7cm、頸部径24cm、底径19.7cm、器高14.7cm、中粒砂含み、灰褐色・外面煤けて黒い。体部外面は指ナデ→泡ナデ。口部・底部に指痕・擦痕・剥離等の特徴的変形を示す。8層出土。

4—天目茶碗、口径11.2cm、頸部径10.8cm、残存高4.7cm、鉄釉。口部・底部に指痕・擦痕・剥離等の特徴的変形を示す。1層出土。

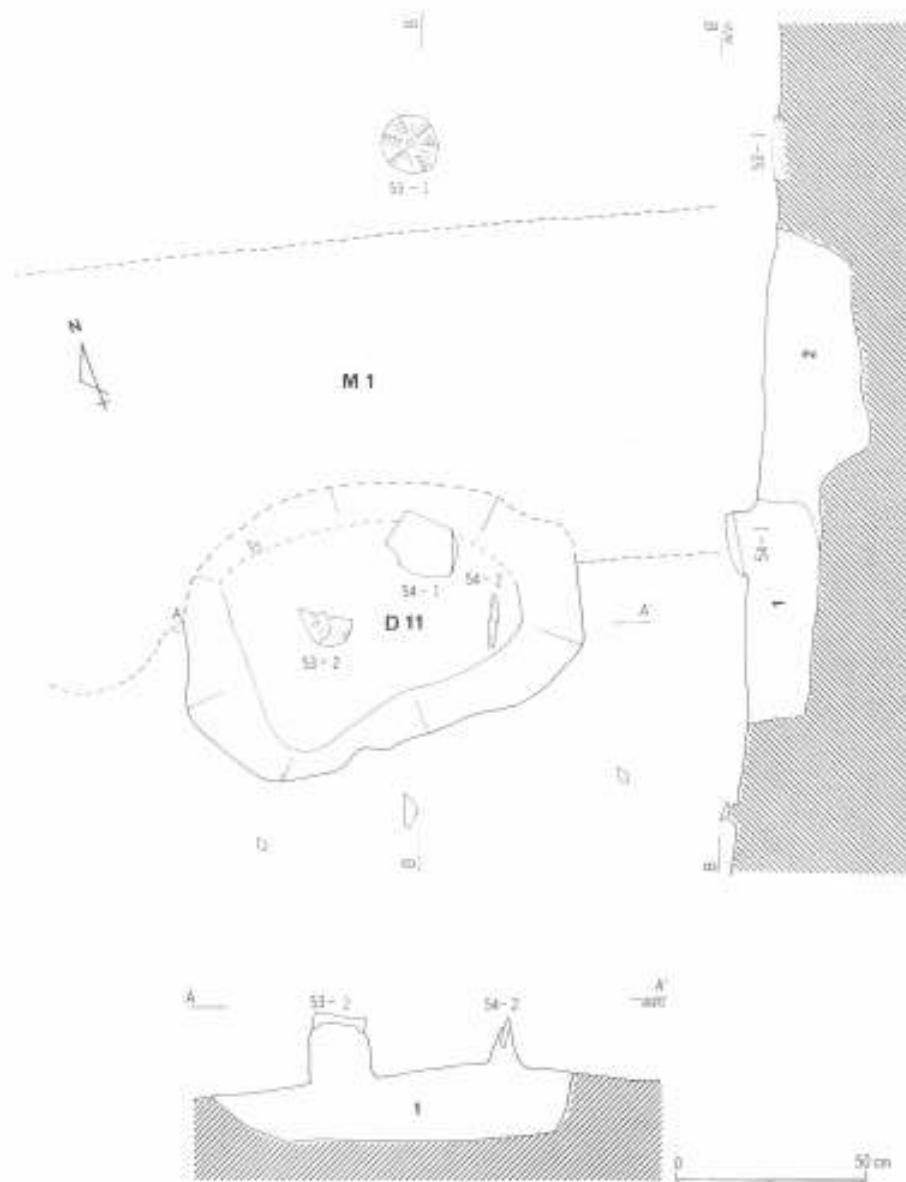
5—白磁。水注の1/2の破片。1層出土。

6—槍鉤。現存長9cm、刃幅2.3cm。基部には木質がみられる。鉄製。8層上部出土。

7—板石塔婆、残存高30.4cm、残存幅17.1cm、厚さ2.5cm、点紋緑泥片岩。基部に指痕・擦痕・剥離等の特徴的変形を示す。石臼も、1層から2点出土。



第51図 10号土塚出土遺物



第52図 11号土城

11号土城 (第52~54図、図版27・44・45)

位 置 本土城は、9号土城の北東にあり、1号概要 溝跡と複合していた。平面形は不整格円形を呈し、長軸はN-89°-Wを示す。覆土上部には石臼、板石塔婆が置かれていた。

覆土は、炭化物・焼土を含む暗褐色土であった。

規 模 長軸1.09m、短軸0.7m、深さ0.18m、
遺 物 板石塔婆2点、石臼1点、土器片1点。

53-1-石臼。直径33.4cm、最大厚7.5cm、芯棒穴最小径3.1cm。両端石安山岩。上白で、目

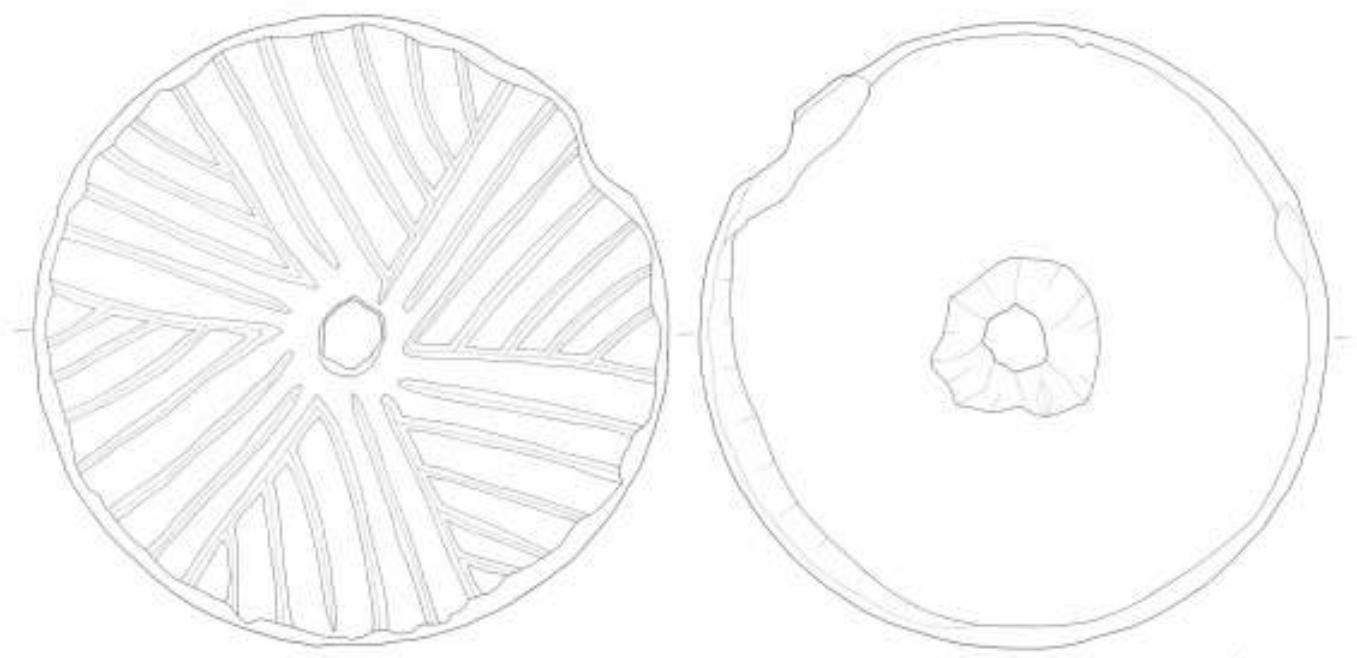
は6分画で、断面形は丸溝。ほぼ完存。

本土城の北80cmの所から検出された。

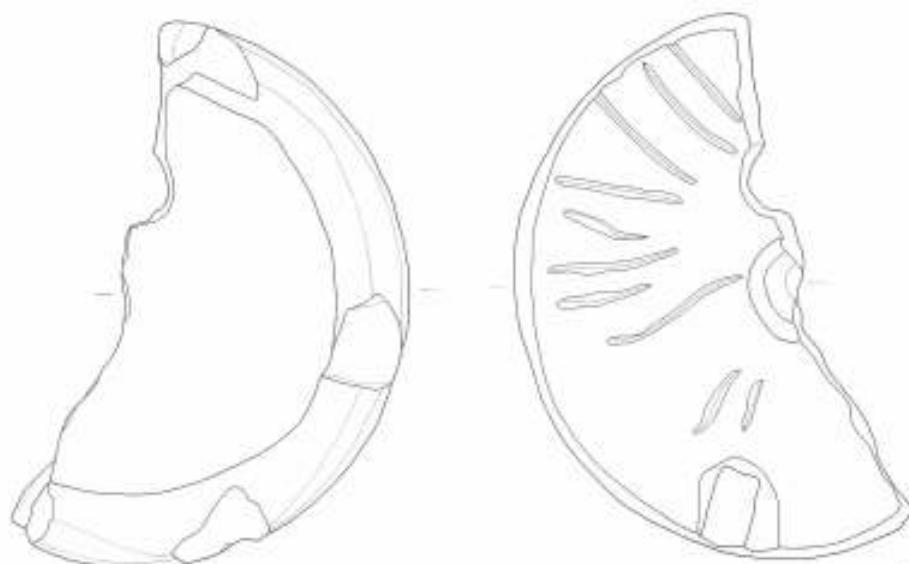
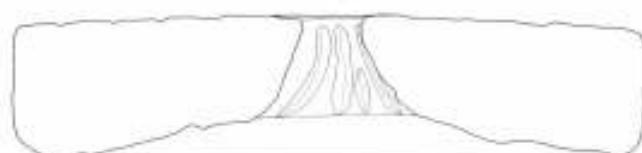
53-2-石臼。直径29.4cm、最大厚6.7cm。下白で、目は磨耗して不明瞭だが、断面形は丸溝。少残存。覆土上部出土。安山岩(A)。

54-1-板石塔婆。残存高38.4cm、幅30cm、厚さ4.5cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来で、銘は「文永六年」。覆土上部出土。

54-2-板石塔婆。残存高29cm、残存幅15.8cm、厚さ3.2cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。覆土上部出土。



1

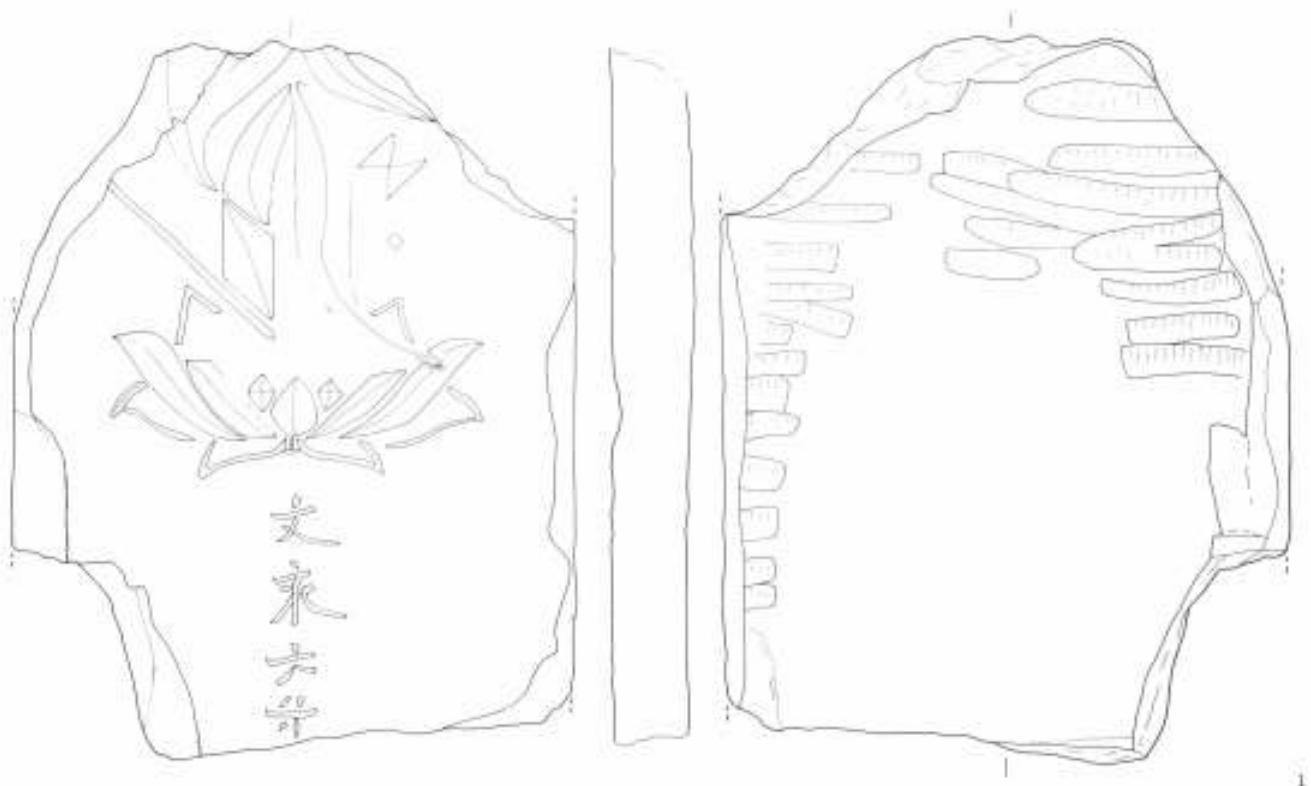


2

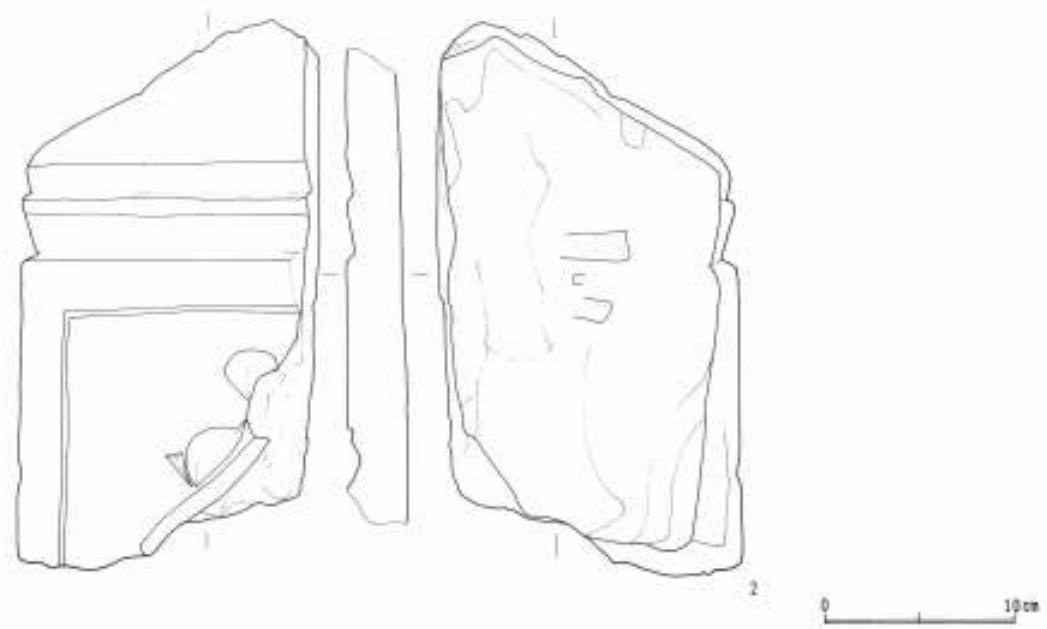


0 10cm

第53図 11号土坑出土遺物(1)

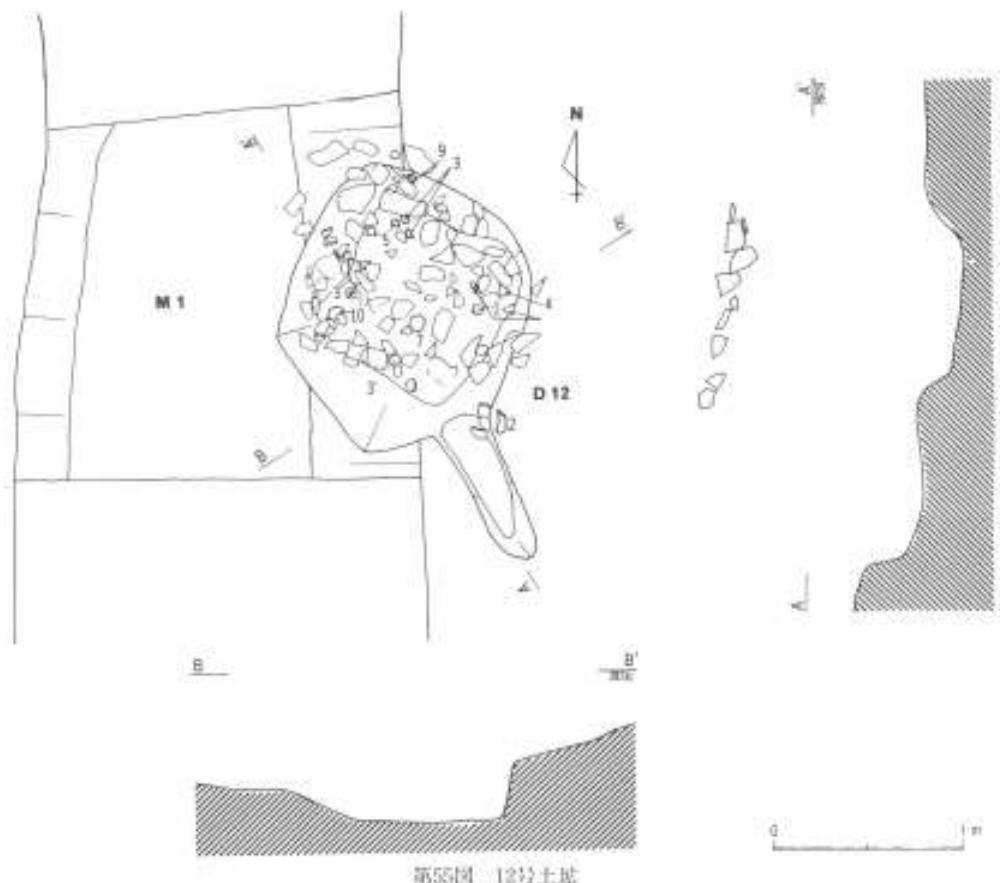


1



0 10 cm

第54圖 11号土塚出土遺物(2)



第55図 12号土塚

12号土塚（第55・56図、図版28・45）

位 置 本土塚は、11号火葬墓の南東、5号集石壇より遠く離れた北西に検出され、1号溝跡と複合していた。平面形は、5角形を呈し、南東部には幅約20cm、長さ84cmの張出し部が見られた。主軸は、N—25°—Wを示す。

覆土上部には、川原石、板石塔婆、土器、石臼が置かれていた。

規 模 主軸2.25m、北西辺1.08m、南西辺0.76m、深さ0.30m。

遺 物 川原石53点、土器78点、板石塔婆10点、石臼2点。

1—内耳土器。口径28.4cm、頸部径24cm、残存高8.4cm。粗粒砂含み、灰褐色、口縁端部は灰黄褐色。体部外面削り。口縁の土残存。覆土上部出土。

2—内耳土器。口径29.1cm、頸部径25cm、底径

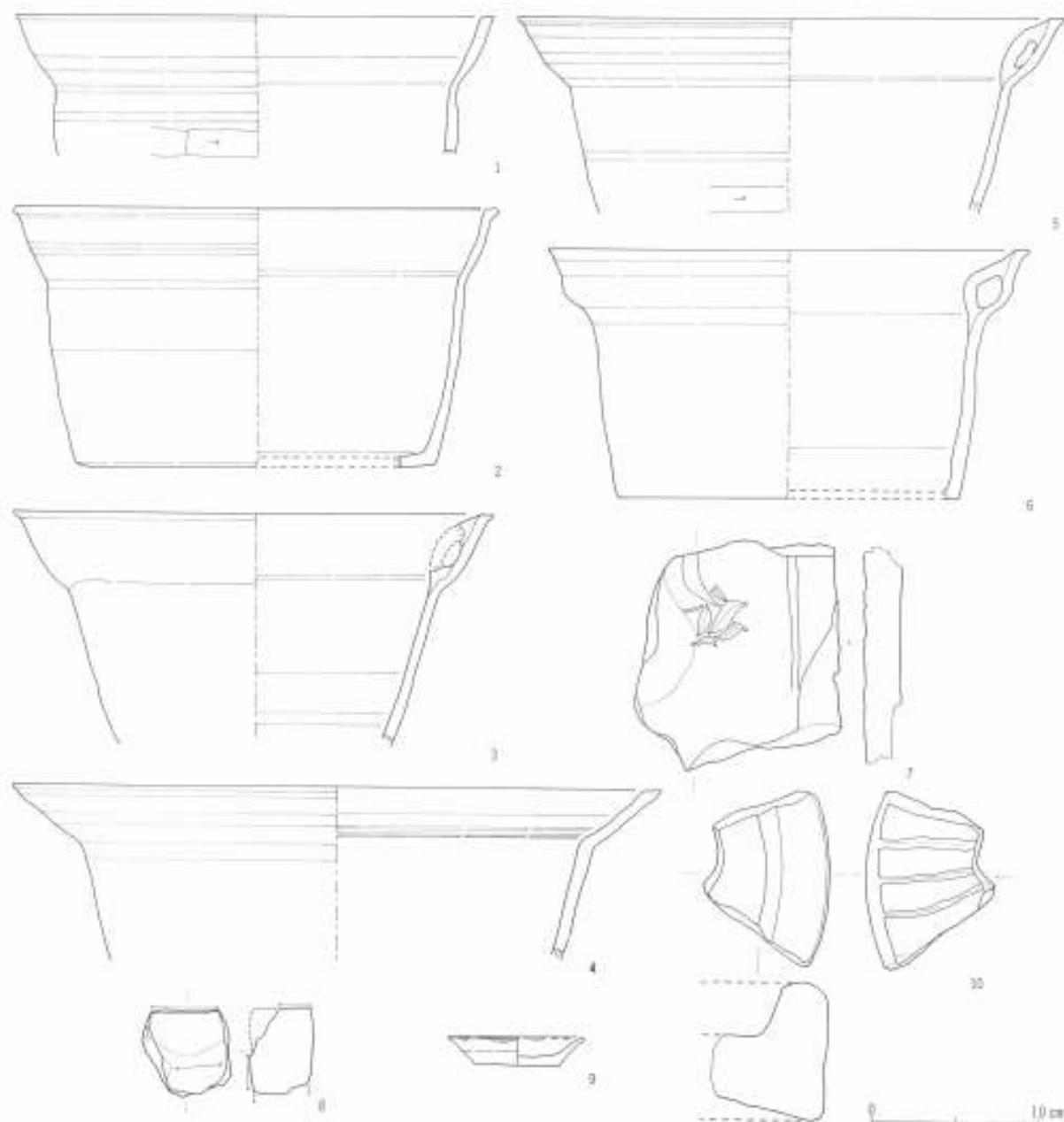
21.6cm、器高15.6cm。粗粒砂含み、外面黒褐色・内面淡褐色。体部外面の下半部削り。土残存。覆土上部出土。

3—内耳土器。口径28.8cm、頸部径22.4cm、残存高13.9cm。粗粒砂を含み、灰黄褐色。体部下半の内外面とも荒れている。土残存。覆土上部出土。

4—内耳土器。口径39.0cm、頸部径30.4cm、残存高10.7cm。中・粗粒砂を含み、暗褐色。口縁、体部上半の土。覆土上部出土。

5—内耳土器。口径32.6cm、頸部径26.4cm、残存高11.7cm。中粒砂含み、外面暗褐色だが焼けた所あり、内面淡褐色。口縁・体部上半の土残存。覆土上部出土。

6—内耳土器。口径28.9cm、頸部径23.6cm、底径20.5cm、器高15cm、中粒砂含み、外面焼けた所あり、内面黒褐色。口縁は土・体部は



第56図 12号土塚出土遺物

†残存。覆土上部出土。

7—板石塔婆。残存高13.9cm、残存幅12.5cm、

厚さ2.1cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来
と考えられる。表面は、焼けており、黒く
変色している。覆土上部出土。

8—砥石。残存長は横5.2cm・縦5.1cm、厚さ

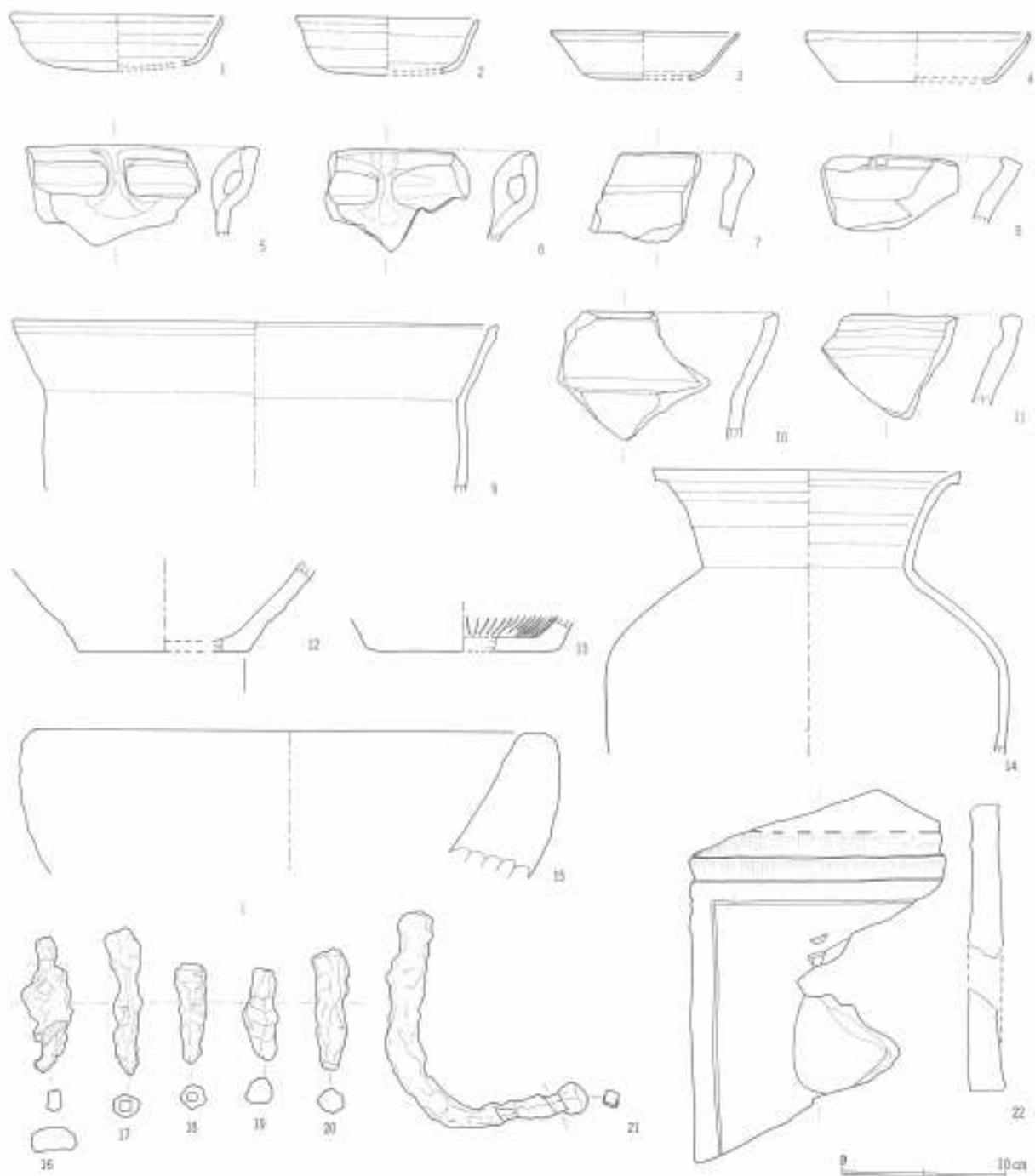
3.7cm。ひん岩。表面は、焼けて黒い所があ
る。

9—かわらけ。口径8.2cm、底径5.1cm、器高

1.7cm。中粒砂含み、外面褐色、内面黒褐色。
口唇部はタールが付着している。回転系
切り底。†残存。覆土上部出土。

10—石臼。直径26.1cm、最大厚8.3cm。安山岩

(B)。上臼で、目は断面形が丸溝。†残
存。覆土上部出土。



第57図 13号土塚出土遺物

13号土塚（第57・58図、図版29・45・49）

位 置 本土塚は、調査区中央の南端に検出され、

概 要 1号溝跡と複合していた。平面形は不整梢円形を呈す。

土層は、1層が耕作土、2層が礫層、3

層が焼土、4層が炭化物層、5層が黒褐色土（焼土・炭化物を少し含む）、6層が黒褐色土（焼土・炭化物を多く含む）。2層

からは、土器・板石塔婆、鉄器、石鉢など

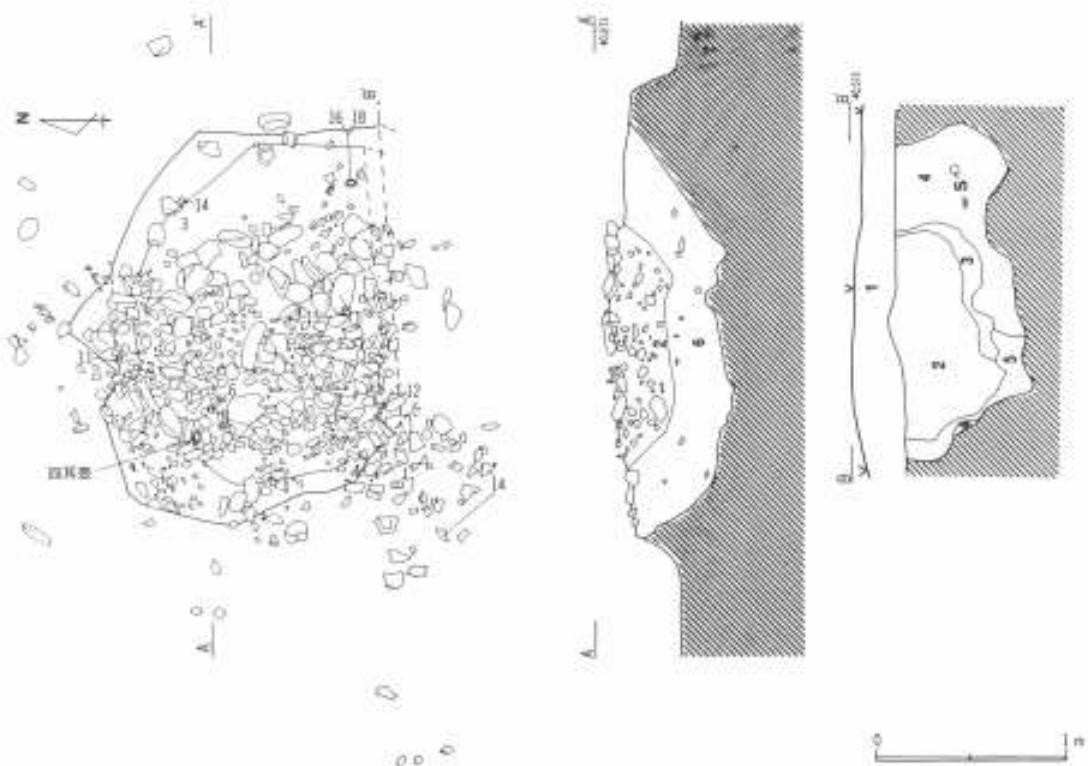
混在し、瀬戸灰釉四耳壺の破片も出土した。

規 模 東西2.22m、深さ0.71m

遺 物 土器250点、板石塔婆46点、鉄製品6点、

焼土塊6点。（瀬戸灰釉四耳壺の破片1点）

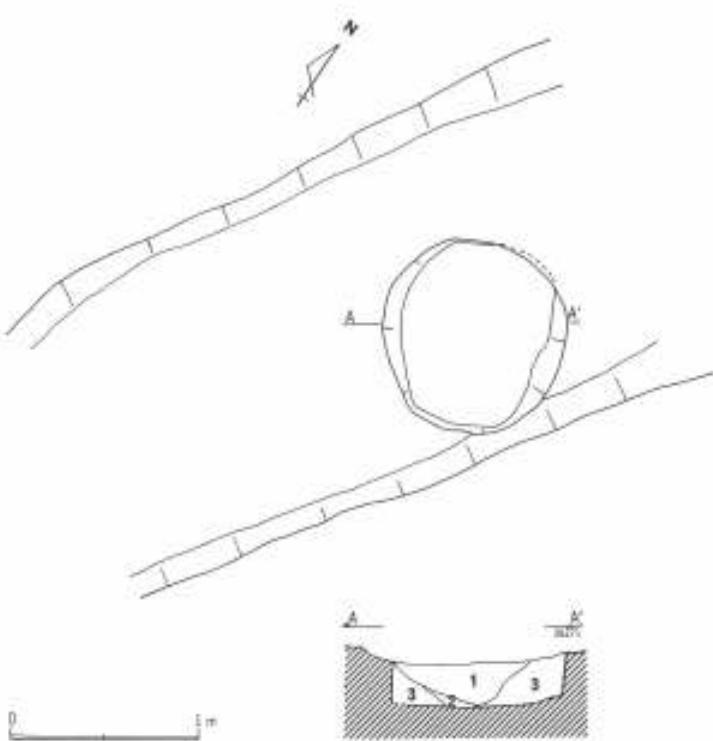
1-环（土師器）。口径13cm、底径10cm、残存高3.2cm。中粒砂含み、褐色・黒褐色、内面タール付着。少残存。土層断面A-A'のべ



第58図 13号土城

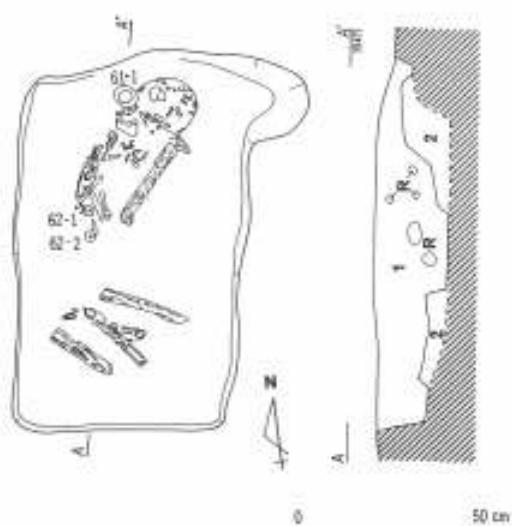
ルト内出土。

- 2—环（土師器）。口径11.3cm、底径8.7cm、残存高3.4cm。中粒砂含み、淡褐色だが内外面煤けて黒い所あり。寸残存。土層断面A—A'ベルト内出土。
- 3—环（土師器）。口径11.7cm、底径7.5cm、器高2.9cm。中粒砂含み、茶褐色、黒色。寸残存。6層上部出土。
- 4—环（土師器）。口径13.8cm、底径9.8cm、器高3.1cm。中粒砂含み、黒色、底部は茶褐色。体部外面指ナデ。寸残存。6層出土。
- 5—内耳土器。中粒砂含み、灰褐色。6層出土。
- 6—内耳土器。粗粒砂含み、黒褐色。2層出土。
- 7—擂鉢。粗粒砂含み、外面灰褐色、内面淡黄褐色。土層断面A—A'ベルト内出土。

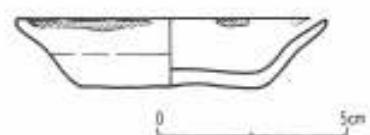


第59図 14号土城

- 8—壺鉢。粗粒砂含み、灰褐色。
- 9—内耳土器。口径30.2cm、頸部径26.3cm。粗粒砂含み、茶褐色・赤褐色。口縁・体部上半の土残存。2層下部出土。
- 10—内耳土器。中粒砂含み、外面暗褐色、内面灰褐色。土層断面A-A'ベルト内出土。
- 11—壺鉢。粗粒砂・細礫含み、灰褐色。6層上部出土。
- 12—壺鉢。底径10.8cm。粗粒砂・細礫含み、外面灰褐色・内面灰褐色。外面指ナデ。底部の土残存。5層下部出土。
- 13—壺鉢。底径12.1cm。中粒砂含み、外面褐色・内面黒褐色。内面は横目が施されている。底部の土残存。
- 14—甕(須恵器)。口径19.4cm、頸部径13.1cm。残存高18.3cm。中・粗粒砂含み、外面灰褐色、内面暗灰褐色だが、外面は黒い部分あり、口縁・胴上半部の土残存。2・6層出土。
- 15—石鉢。口径33.6cm、残存高9.3cm。安山岩(A)。口縁の土残存。2層出土。
- 16—鉄器(釘)。全長8.6cm、上部幅0.7cm・厚さ1.3cm、中部幅2.8cm・厚さ1.4cm。中央部は付着物があり、木質も遺存している。断面形は長方形を呈す。4層出土。
- 17—鉄器(釘)。全長9.4cm、中部幅0.65cm・厚さ0.65cm。断面形は方形を呈す。5層出土。
- 18—鉄器(釘)。全長6.3cm、中部幅0.6cm・厚さ0.5cm。断面形は方形を呈す。4層出土。
- 19—鉄器(釘)。全長5.8cm。全面さび付いており、断面形不明。5層出土。
- 20—鉄器(釘)。全長7.6cm。全面さび付いており、断面形不明。5層出土。
- 21—鉄器。全長約23cm、下部幅0.8cm、厚さ0.8cm。断面形は方形を呈し、上部が太く、下部の方が細い。ほぼ中央部で、曲がりておる。4層下部出土。
- 22—板石塔婆。残存高23.4cm、残存幅15.9cm、厚さ2.3cm。点紋絵泥片岩。二重線の部分は、縦位の沈縞が何本も刻まれている。柱子は欠損していて不明瞭。外面は、焼けて黒くなっている。2層出土。



第60図 15号土塚



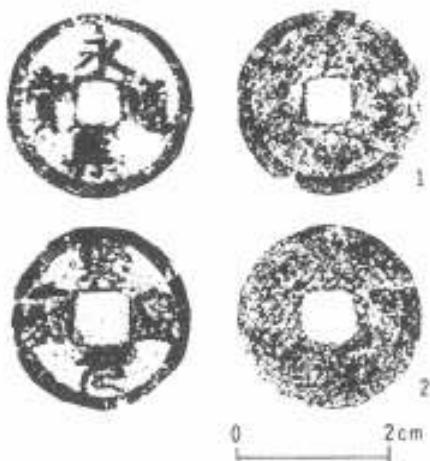
第61図 15号土塚出土遺物(1)

位置 本土塚は、調査区の北東部にあり、7分
概要 集石遺構の南西、5号集石遺構の北東に検出され、5号溝跡・6号集石遺構と複合していた。平面形は円形を呈し、土層は、1層が暗灰茶褐色土、2層が灰茶褐色土、3層が黄褐色土であった。

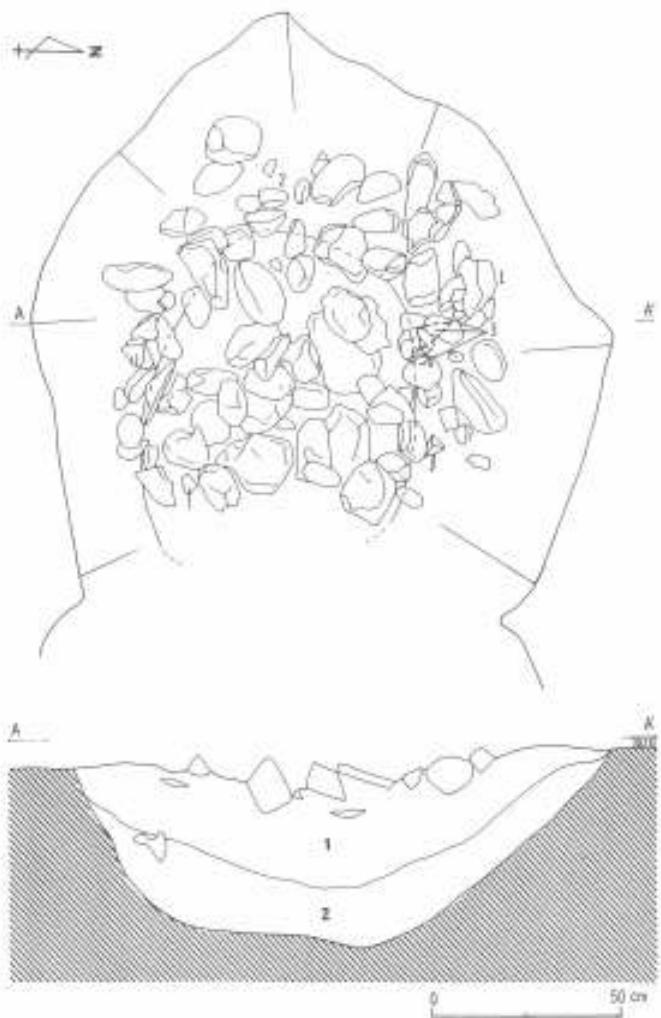
規模 長軸1m、短軸0.96m、深さ0.26m。
遺物 なし。

15号土塚(第60~62図、図版30・46)

位置 本土塚は、調査区の西端に検出された。
概要 平面形は長方形を呈し、北東角は半円形の張出しがみられた。主軸はN-12°-Eを示



第62図 15号土地出土遺物(2)



第63図 1号集石遺構

す。

土層は、1層が暗褐色土（ロームブロックを含む）、2層が暗褐色土（人骨が遺存する）であった。

規 模 西辺0.95m、南辺0.57m、深さ0.2m。

遺 物 人骨が検出され、頭部にかわらけ、腰部に古銭・鉄器が出土した。

61-1-かわらけ。口径8.3cm、底径4.9cm、器高1.8cm。中粒砂を含み、淡褐色だが、褐色・黒色の所がある。口唇部はタールが付着している。完存。人骨の頭部直上出土。

62-1-古銭。永樂通宝。口径2.5cm。真書体。銅銭。

62-2-古銭。熙寧元宝。口径2.4cm。篆書体。銅銭。

1号集石遺構(第63・64図、図版36・46)

位 置 本遺構は、調査区の南端にあり。

概 要 1号住居跡の南、2号住居跡の南西に検出され、4号溝跡と複合していた。

集石の平面形は方形に近い。

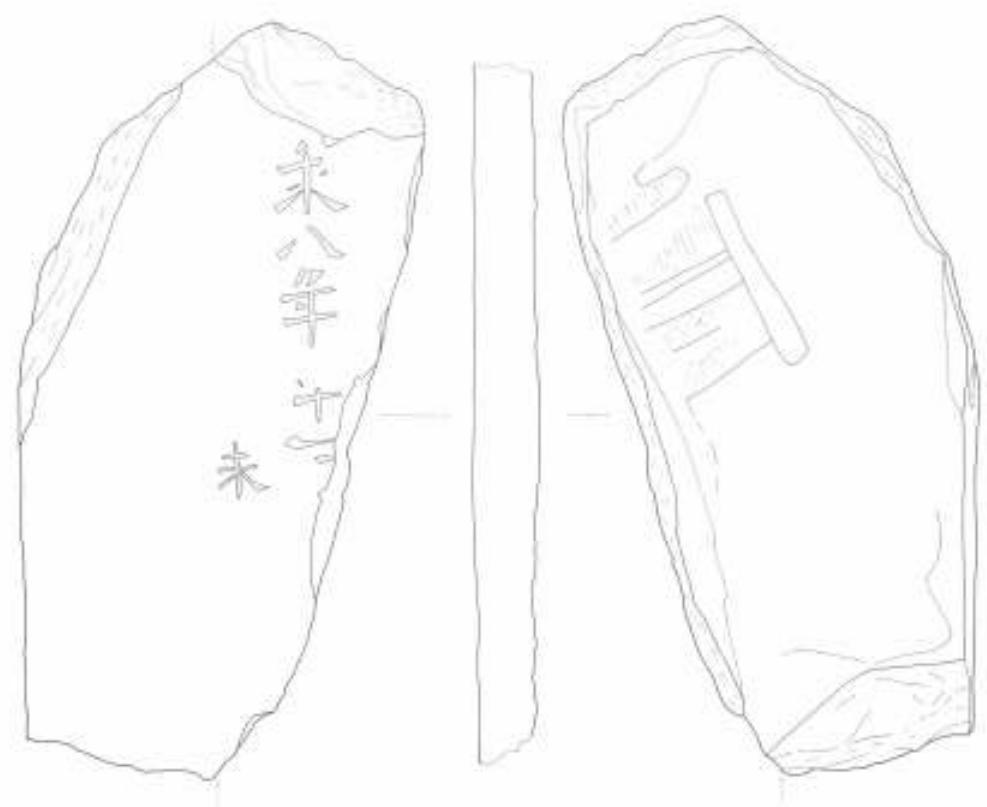
土堆は不整円形を呈し、土層は1層が暗褐色土（ローム粒子・炭化物を少し含む）、2層が暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含み、炭化物を少し含む）であった。

規 模 集石—南北方向1.05m、東西南向1.05m。

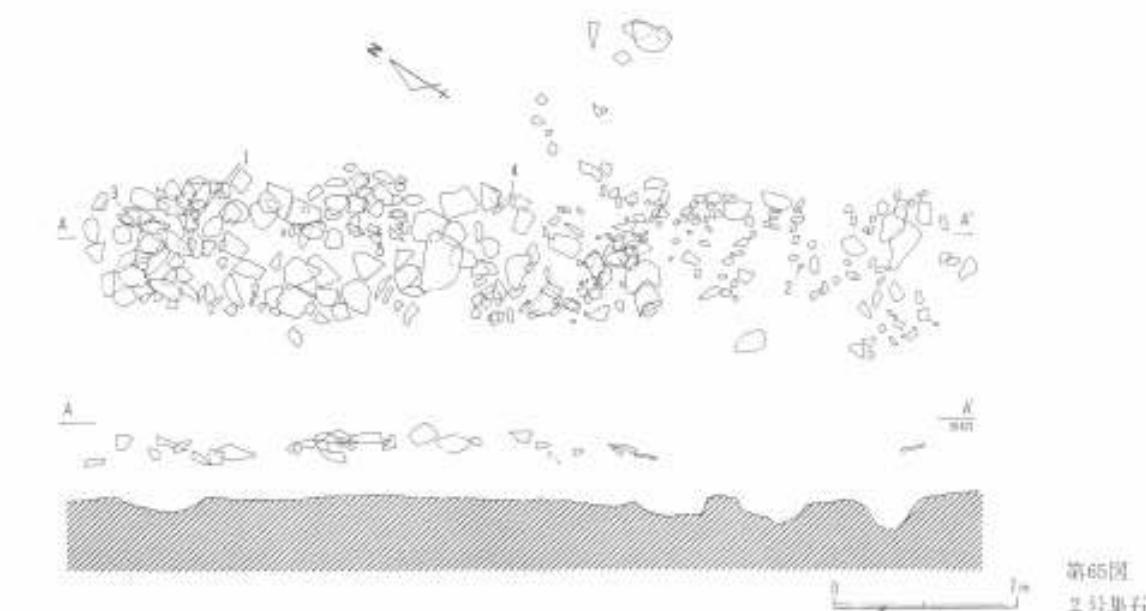
土堆—南北方向1.55m、深さ53cm。

遺 物 土器9点、板石塔婆9点、鐵滓1点。

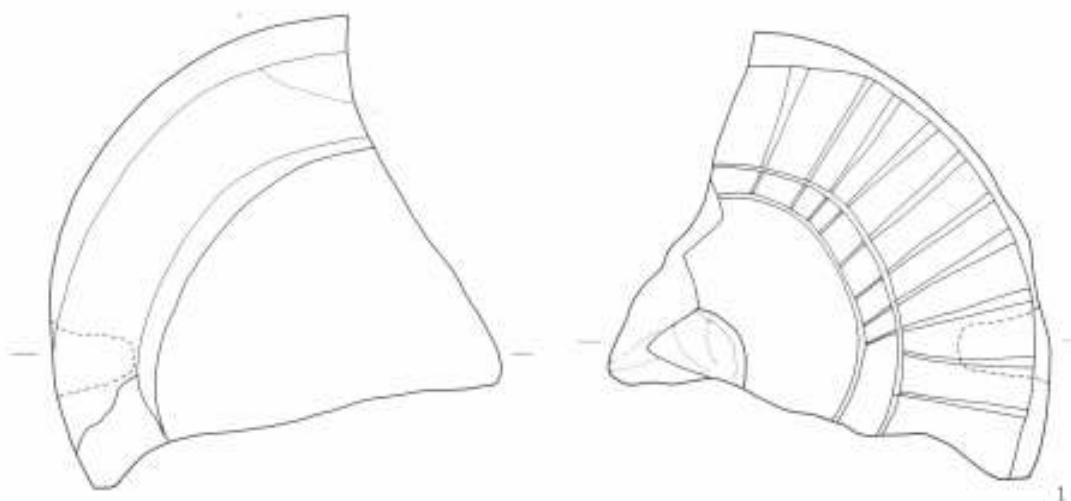
1-板石塔婆。残存高40.5cm、残存幅中央で17.5cm、厚さ3.5cm。点紋綠泥片岩。銘は「永八年〇未十一月」である。年号は、文永八年辛未（1271年）と推定される。遺構



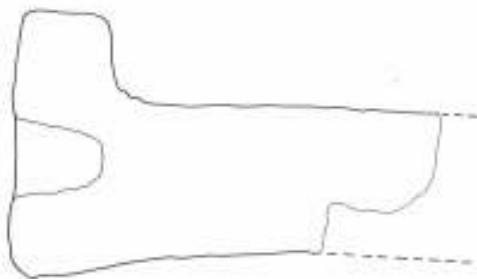
第64圖 1号石堆出土遺物



第65圖
2号石堆構造



1



2



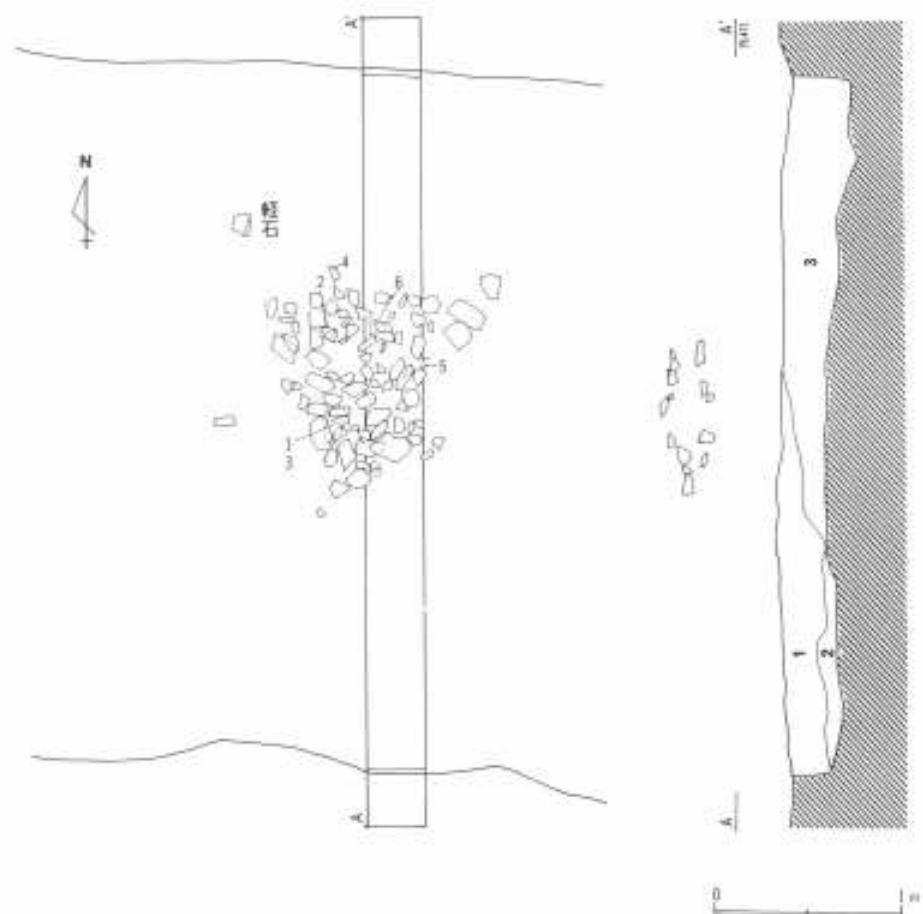
3



4

0 10cm

第66図 2号墓石造構出土遺物



第67図 3号集石遺構

の北側から出土。

2—捕鉢。底径15.3cm、残存高6.2cm。粗粒砂・細礫含み、外面褐色・茶褐色、内面淡褐色・黒色。内面は6本/2.9cmの櫛目が施されている。底部 \pm 残存。遺構の西側から出土。
3—内耳土器。口径36cm、底径28.7cm、高さ6.4cm。中粒砂含み、外面一部黒褐色・底部暗茶褐色、内面一部淡黒褐色・底部淡褐色。体部外面指ナデ痕残る。 \pm 残存。1の南東に出土。

2号集石遺構（第65・66図、図版30—2・31—1・46）

位 置 本遺構は、調査区のほぼ中央にあり、9号土塚の南東、2~10号火葬墓の北西に検出された。平面形は、細長い長方形を呈し主軸はN-33°-Wを示す。

規 模 長軸4.82m、短軸0.84m。

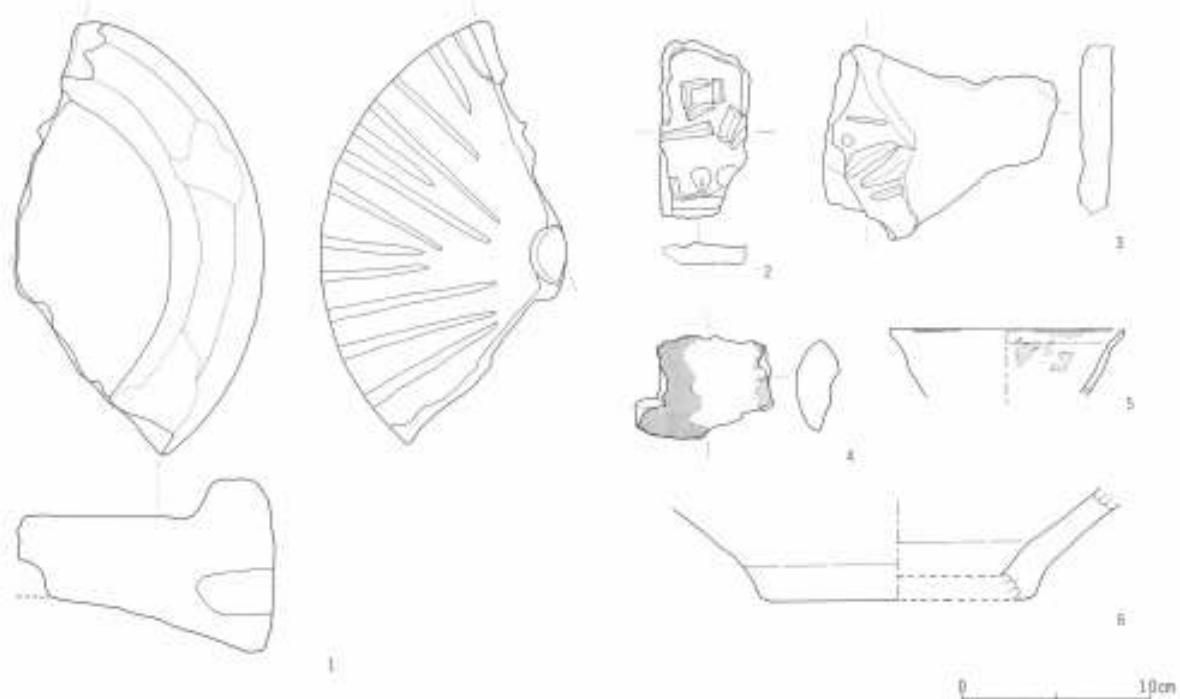
遺 物 川原石336点、土器42点、板石塔婆41点、骨片1点、石臼1点。

1—石臼。直径24.5cm、最大厚10.7cm、最小厚5.9cm、ひきぎ穴一（幅）3.2cm、（高さ）3.3cm・（奥行）3.6cm。斜長石多い安山岩。上臼で、臼は放射型だが、同心円状に2本の溝も刻まれており。断面形は丸溝である。 \pm 残存。本遺構の北側から出土。

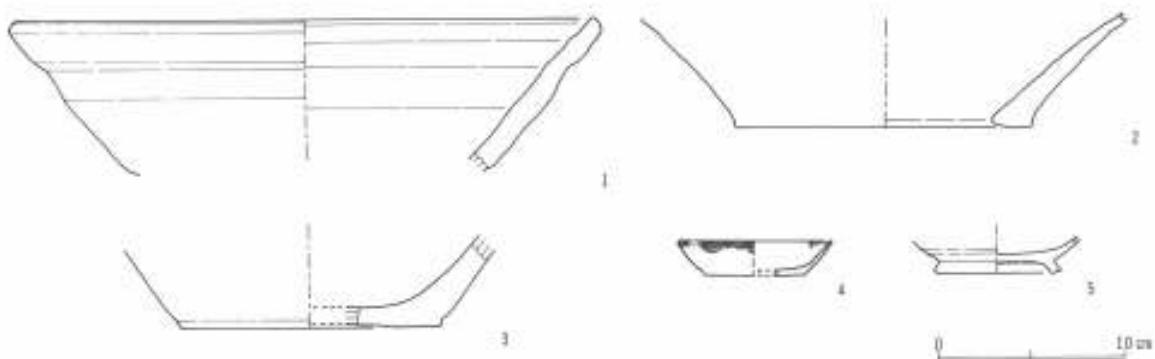
2—かわらけ。口径6cm、底径3.6cm、高さ2.2cm。中・粗粒砂含み、淡褐色。口唇部にタール付着し、底部に回転糸切り痕を残す。 \pm 残存。本遺構の南側から出土。

3—板石塔婆。残存高14.8cm、残存幅18.5cm、厚さ2.4cm。緑泥片岩。種子は不明だが、銘は「年十一月日」と刻まれている。1の

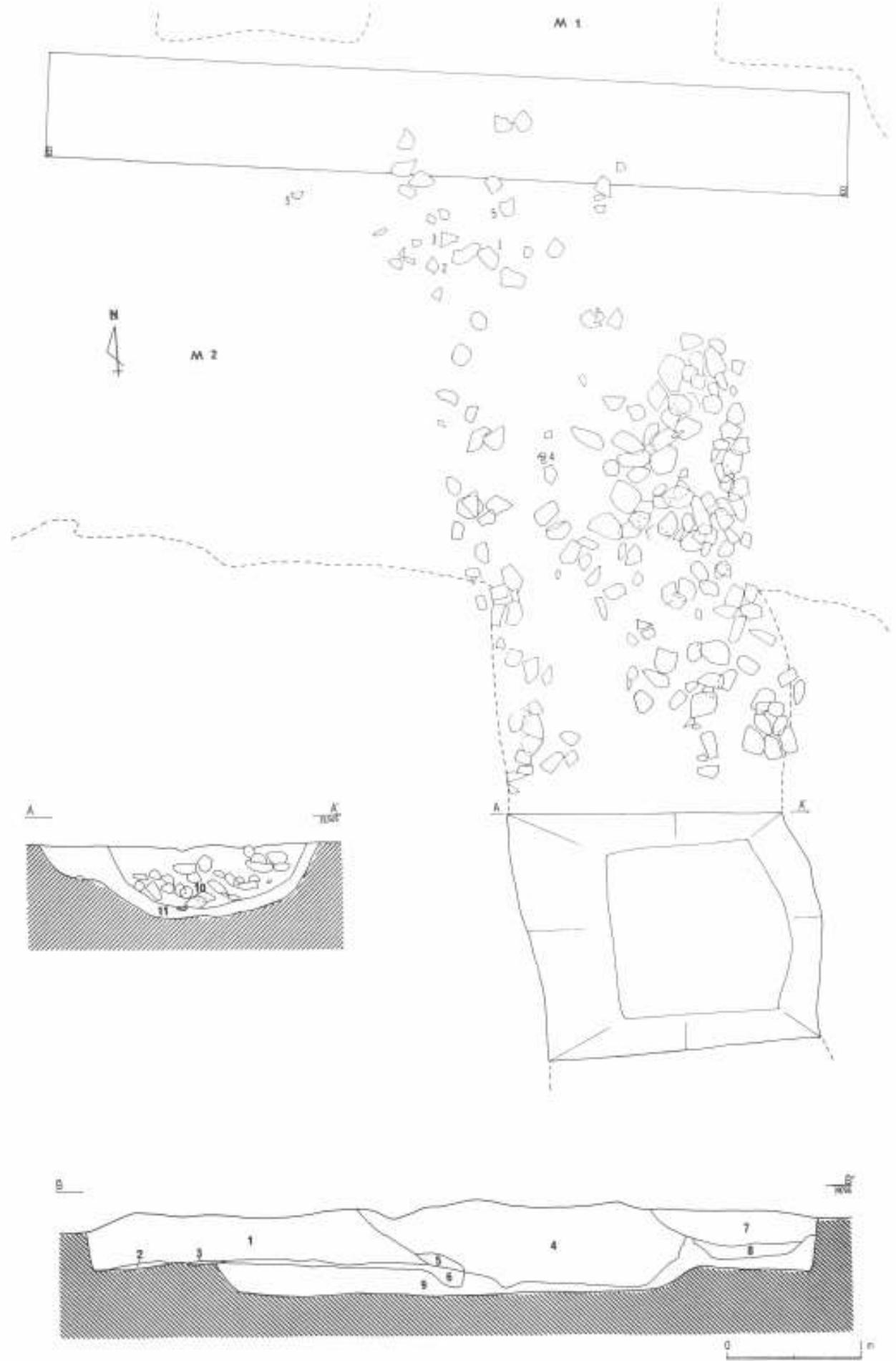
- 北西に隣接して出土。
- 4—板石塔婆。残存高10.1cm、残存幅16.6cm、厚さ2.8cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来と考えられる。本遺構のほぼ中央から出土。
- 3号集石遺構（第67・68図、図版31—2・46）
- 位 設 本遺構は、調査区の中央にあり、2~10
- 概 要 3号火葬墓の南側、3号住居跡の西側に検出され、2号溝跡と複合していた。
- 平面形は三角形に近い。
- 規 模 北辺1.26m、南東辺1.50m、南西辺1.12m、厚さ0.3m。
- 遺 物 土器30点、板石塔婆22点、石臼2点、軽石1点、焼土塊1点、川原石85点。
- 1—石臼。直径27cm、最大厚9.2cm、最小厚4.3cm、ひきぎ穴の奥行3.3cm。安山岩（A）。
- 上臼で目は6分画と考えられ、断面形は丸溝である。土残存。遺構の南側から出土。
- 2—板石塔婆。残存高9.6cm、残存幅4.6cm、厚さ1.1cm。緑泥片岩。蓮台の部分と考えられる。遺構の北西部から出土。
- 3—板石塔婆。残存高（断面図の位置）9.1cm、残存幅11.8cm、厚さ1.7cm。緑泥片岩（B）



第68図 3号集石遺構出土遺物



第69図 4号集石遺構出土遺物



第70圖 4號集石遺構

鉄鉢を含む）。蓮台の部分と考えられる。

1の石臼の上から出土。

4—輪口。残存長7.4cm、残存幅5.5cm、厚さ1.8cm。粗粒砂・細礫含み、外面灰褐色、内面淡褐色。外面は、酸化され、茶褐色の部分と黒色の部分がある。本遺構の北端から出土。

5—かわらけ。口径12.6cm、頭部径11.5cm、残存高3.6cm。細粒砂含み、褐色・淡褐色。内面はタルが付着している。土残存。

6—甕（當滑焼）。底径14.8cm、残存高5.6cm。粗粒砂含み、暗茶褐色。底部の土残存。本遺構の北側から出土。

○軽石は、本遺構の北約30cmの位置から出土した。外面が焼けており、大きさは、幅9.9cm、長さ9cm、厚さ7.3cmであった。

4号集石遺構（第69・70図、図版32・46）

位 置 本遺構は、調査区の南東部にあり、3号

概 要 集石遺構の東側に検出され、1号溝跡、2号溝跡と複合していた。主軸はほぼ北を示し、南北方向に細長い形態で検出された。



第71図 5号集石遺構

規 模 南北長5.1m、東西長2.3m、深さ48cm。

遺 物 土器17点、板石塔婆5点、川原石185点。

1—擂鉢。口径31.8cm、残存高8.2cm。中粒砂含み、外面淡褐色・内面暗淡褐色。外面は器面が荒れている。土残存。本遺構の北側から出土。

2—擂鉢。底径15.6cm、残存高5.8cm。粗粒砂含み、外面淡褐色・内面褐色。外面は指圧されており、内面は擦れています。底部の土残存。1の西側から出土。

3—擂鉢。底径14cm、残存高4.9cm。粗粒砂含み、灰褐色だが内外面に黒褐色の部分あり。底部は回転糸切り後、外縁部回転削り。底部の土残存。2の北側から出土。

4—かわらけ。口径8.2cm、底径5.2cm、器高1.8cm。中粒砂含み、黒褐色。口唇部はタル付着し、底部は回転糸切り痕あり。土残存。本遺構のほぼ中央から出土。

5—壺（須恵器）。高台径6.8cm、高台高0.6cm。中・粗粒砂含み、灰褐色。底部は回転糸切り放し。高台は貼付である。底部の土残存。本遺構の北西端から出土。

5号集石遺構（第71・72図、図版32・46）

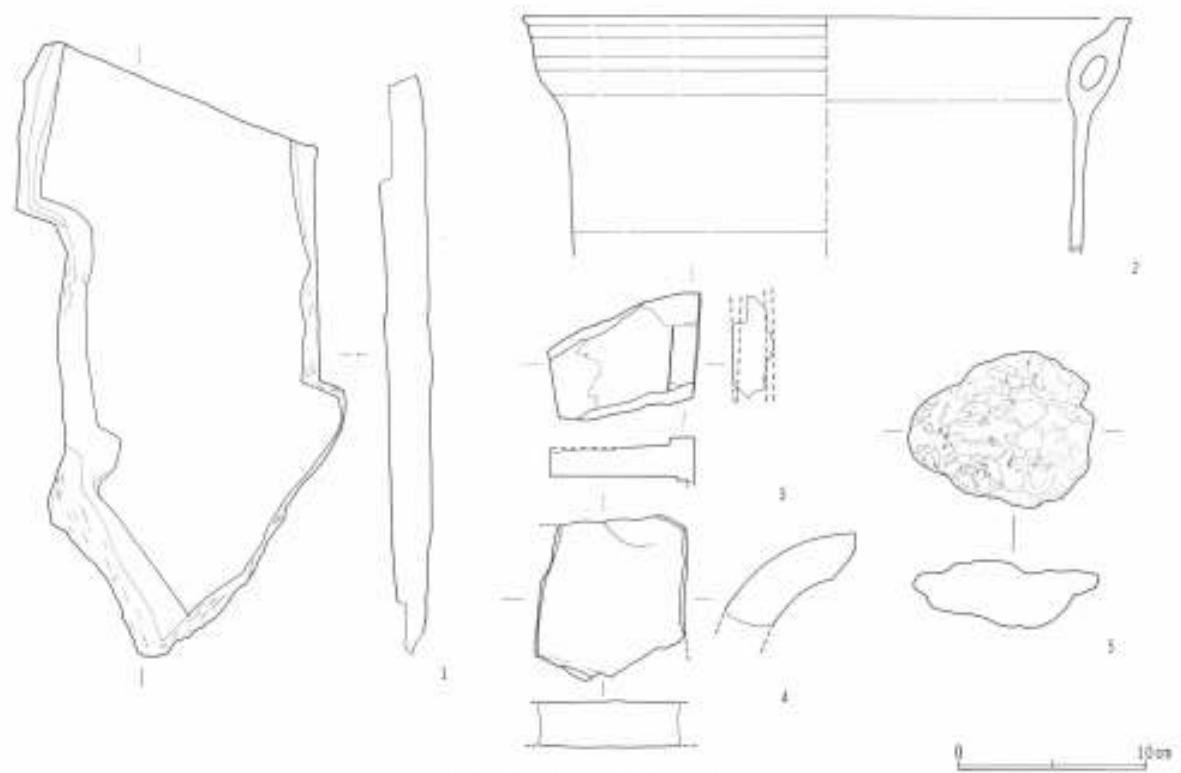
位 置 本遺構は、12号土塙

概 要 の東側、6号集石遺構の南西に検出され、5号溝跡と複合していた。主軸はN-49°-Eを示し、北東から南西方に向に細長い形態を呈す。

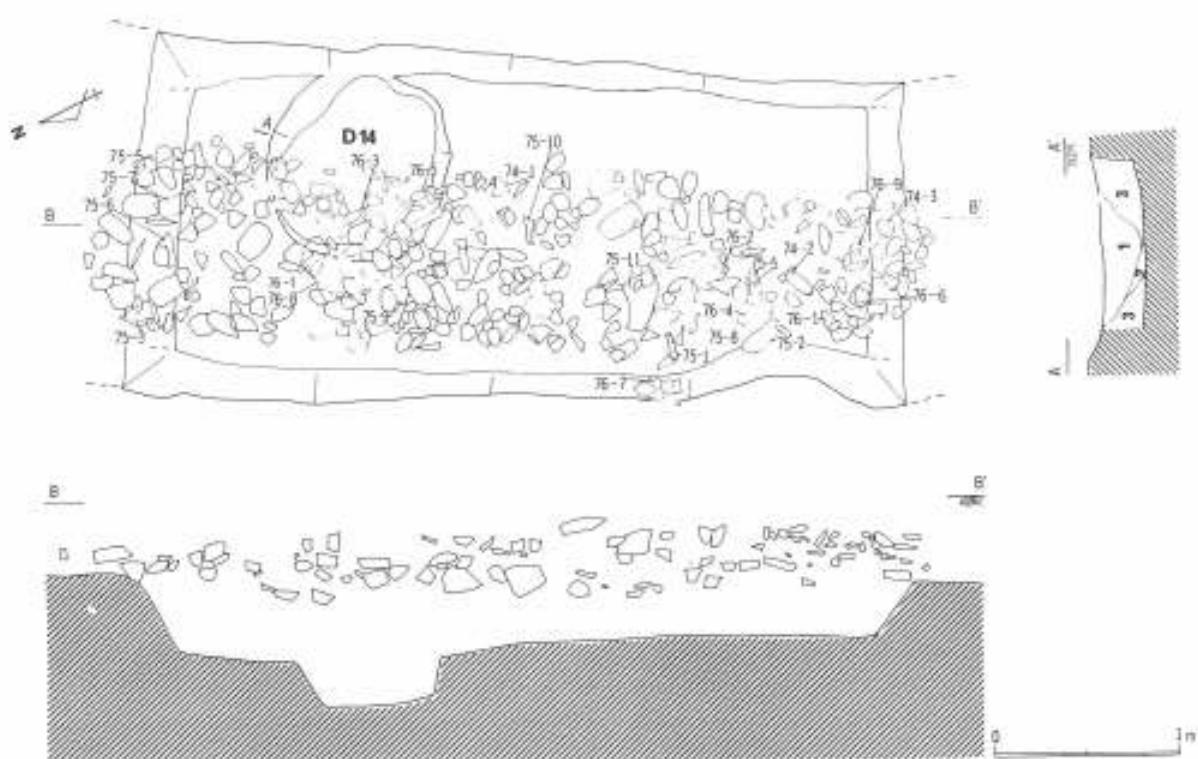
規 模 主軸長2.22m、最大幅1.16m。

遺 物 土器39点、板石塔婆13点、鐵滓1点、川原石101点。

1—板石塔婆。残存高32.5



第72図 5号集石遺構出土遺物



第73図 6号集石遺構



第74図 6号集石造構出土遺物1)

cm、中央部幅13.3cm、厚さ2.4cm。石墨組合母片岩。基部と考えられるが、台石の可能性もある。本造構の中東部西側から出土。

2—内耳土器。口径32.4cm、頸部径28.3cm、残存高12.7cm。中粒砂含み、外面黒褐色・内面灰褐色。口部を残存。本造構の南端から出土。

3—鏡。残存長5.6cm、残存幅7.8cm。頁岩。台形を呈すると考えられる。2の西側に隣接して出土。

4—瓦。推定径16cm、厚さ2.3~2.5cm。粗粒砂含み、灰白色。凸面は丁寧にナデられ、凹面もナデされている。男瓦。

5—鉄滓。長さ10cm、最大幅8.3cm、最大厚3.4cm、重さ286g。黒褐色。完存。本造構の北東約1mの所から出土。

6号集石造構（第73~76図、図版33・46・47）

位 置 本造構は、調査区の北東部にあり、5号概要 集石造構の北東に検出され、5号溝跡・14号土塙と複合していた。

北東から南西方向に細長い形態で検出され、主軸はN-29°-Eを示す。

規 模 主軸長4.56m、最大幅1.08m

遺 物 土器148点、板石塔婆119点、石臼6点、鉄滓1点、石鏡1点、骨片2点、川原石423点。

74-1-石鍋。つば部径23.2cm、つばの高さ1.1cm。滑石。つばは台形を呈し、内外面は煤

けて黒い。本造構の中央部東端から出土。

74-2-石臼。残存部最大径23.7cm、残存高4.7cm。安山岩A。茶臼の下臼の受鉢の破片。本造構の南側から出土。

74-3-鉄滓。長さ4.6cm、最大幅5.4cm、最大厚2cm、重さ79.8g。黒褐色だが赤褐色の所がある。完存。本造構の南端から出土。

75-1-製（常滑焼）。口径38.8cm、口縁部幅2.4cm、残存高4.4cm。中粒砂含み、暗茶褐色だが、暗黄灰色自然釉あり。口縁の土を残存。本造構の南側の西端から出土。

75-2-壺。口径14.4cm、頸部径14.5cm、残存高4.9cm。中粒砂含み、外面黒色・内面灰褐色・淡褐色。口縁・肩部の土を残存。74-2石臼の西側から出土。藏骨器。

75-3-加鉢（常滑焼）。底径15.2cm、残存高8cm。中粒砂含み、外面灰茶褐色・内面灰褐色。内面は擦れており、底部は回転条切り放し。外側は指ナテ痕あり。底部の土を残存。本造構の北端から出土。

75-4-擂鉢。口径49.7cm、底径39.4cm、器高10cm。中粒砂含み、灰褐色・淡褐色。土を残存。本造構の南側から出土。

75-5-板石塔婆。残存高17.1cm、残存幅12cm、厚さ3.4cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。本造構の北端と南側の板碑が接合。

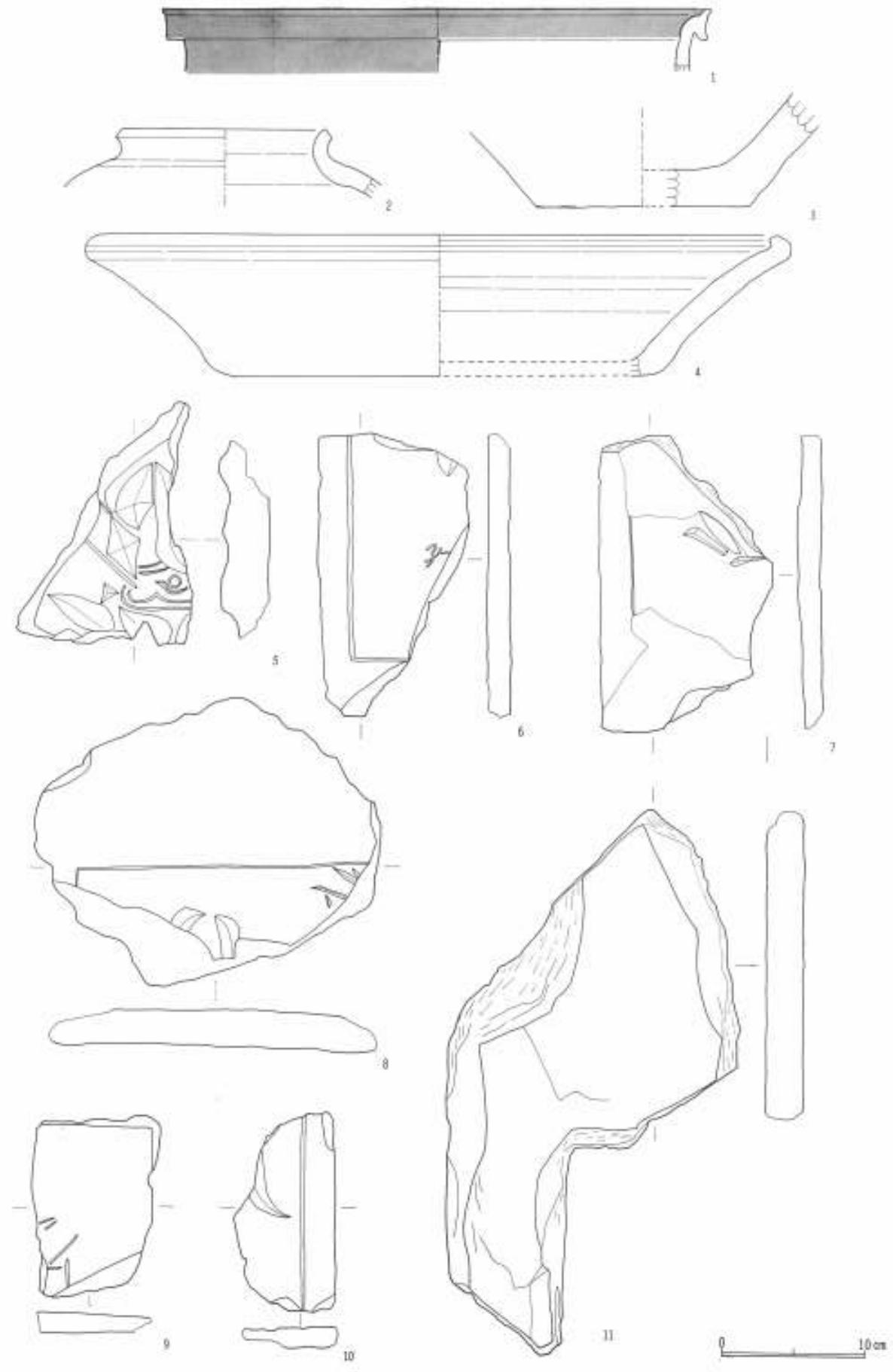
75-6-板石塔婆。残存高19.9cm、残存幅10.5cm、厚さ1.7cm。緑泥片岩。本造構の北端で、75-5の西、75-3の東から出土。

75-7-板石塔婆。残存高20.8cm、残存幅12.3cm、厚さ1.8cm。緑泥片岩（磁鐵鉱含む）。蓮台の部分である。75-6の東、75-5の西に出土。

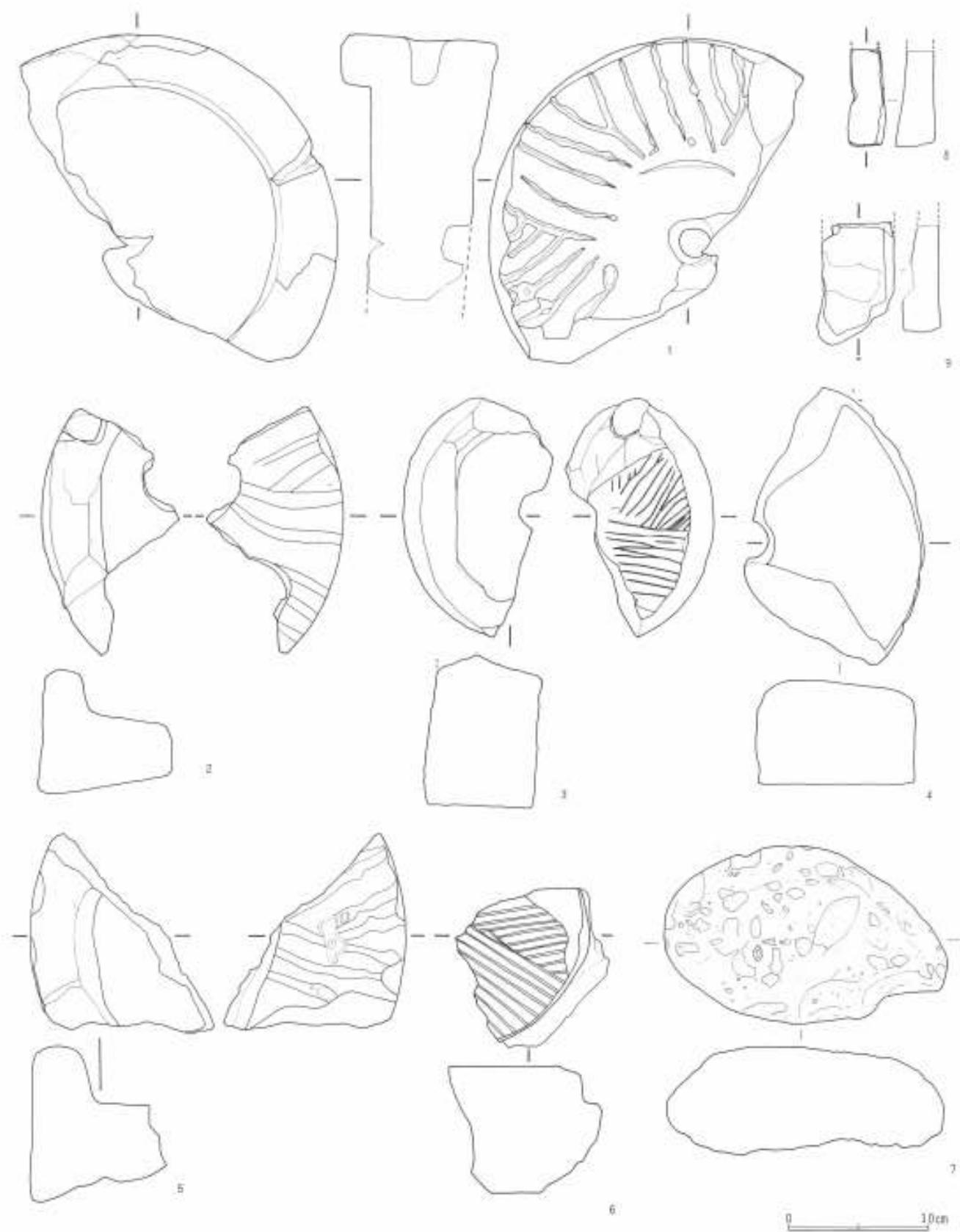
75-8-板石塔婆。残存高20.4cm、残存幅24.4cm、厚さ2.5cm。緑泥片岩（磁鐵鉱含む）。頭部の破片。75-5（南側）の西から出土。

75-9-板石塔婆。残存高12.9cm、残存幅8.7cm、厚さ1.5cm。緑泥片岩。蓮台の部分と思われる。

- れる。14号土壙の東側から出土。
- 75-10-板石塔婆。残存高14.1cm、残存幅7.3cm、厚さ1.5cm。緑泥片岩。本遺構の中央で、74-1の西側から出土。
- 75-11-板石塔婆。残存高38.4cm、残存幅20.5cm、厚さ2.7cm。緑泥片岩。本遺構の南側で、76-1の北側から出土。
- 76-1-石臼。直径29cm、最大厚11.5cm。安山岩(B)。目は6分画と推定され、同心円状に1本の溝も刻まれており、断面形は丸溝である。上臼で、北側と南側の破片が接合。
- 76-2-石臼。直径27.5cm、最大厚9.1cm。安山岩(A)。目の断面形は丸溝で、幅が広い。上臼で、75-5の北側から出土。
- 76-3-石臼。直径19.2cm、最大厚11cm。安山岩(B)。目は細く、6分画と推定され、断面形はV字型である。茶臼の上臼で、76-1の南側から出土。
- 76-4-石臼。直径26.8cm、最大厚7.5cm。安山岩(B)。下臼だが、目は不明瞭。76-2の西、75-5の北から出土。
- 76-5-石臼。直径33.1cm、最大厚11.4cm。安山岩(A)。目の断面形は丸溝で、幅は広い。上臼で、14号土壙の南側から出土。
- 76-6-石臼。直径17.4cm、最大厚9.2cm。安山岩(A)。目は細く、76-3と同様に6分画と推定され、断面形はV字型である。茶臼の下臼で、本遺構の南端から出土し、76-1の南側である。
- 76-7-軽石。長径20.3cm、短径12.9cm、厚さ7.7cm。角閃石安山岩質軽石。本遺構の南側で75-11の西側から出土。
- 76-8-砥石。残存長7.1cm、残存幅2cm、最大厚2.9cm。ひん岩。14号土壙の西側で、76-1の西から出土。
- 76-9-砥石。残存長8.9cm、幅5.3cm、最大厚2.7cm。ひん岩。本遺構の南端で、74-3の北側から出土。
- 7号集石遺構 (第77~79図、図版34・48・49)
- 位 置 本遺構は、調査区の北東部にあり、6号概要 集石遺構の北東に検出され、5号溝跡と複合していた。6号集石遺構と同様に北東から南西に細長い形態で検出され、主軸はN-34.5°Eを示す。
- 第77図の土層は、1層が耕作土、2層が暗褐色土(火山灰を多く含む)、3層が暗褐色土(酸化鉄・灰褐色粘土を含む)、4層が暗褐色土(川原石を多く含む)、5層が暗褐色土(酸化鉄・灰褐色粘土を多く含む)である。
- 規 模 主軸長7.4m、最大幅1.56m。
- 遺 物 土器67点、板石塔婆26点、石臼6点、川原石218点。
- 78-1-内耳土器。口径26.2cm、頸部径21cm、残存高8.2cm。中粒砂含み、外面灰黒褐色、内面灰黄褐色。口縁・胴上部の土残存。本遺構の北側で、78-3の西から出土。
- 78-2-内耳土器。口径31.4cm、頸部径26.1cm、残存高10cm。中粒砂含み、外面灰黒褐色、内面灰褐色。口縁・胴上部の土残存。本遺構の北端から出土。
- 78-3-内耳土器。口径38.1cm、頸部径32.6cm、残存高8.8cm。中粒砂・少しの細繊維含み、外面褐色、内面茶褐色。口縁・胴上部の土残存。本遺構の北側にあり、78-1の東・78-6の南から出土。
- 78-4-天目茶碗。口径12.9cm、頸部径12.7cm、残存高5.9cm。細粒砂含み、黒褐色・黒色。土残存。本遺構の北端、78-2の南から出土。
- 78-5-壺(常滑焼)。口径26.2cm、頸部径25.1cm、残存高9cm、口縁端部幅2.8cm。粗粒砂含み、外面灰褐色、内面黒褐色。口縁・肩部の土残存。外面は自然釉がかかっていたが、剥離している。本遺構の中央の北側から出土。
- 78-6-石臼。茶臼の受鉢の部分であり、受鉢部



第75圖 6号集石造構出土遺物2)

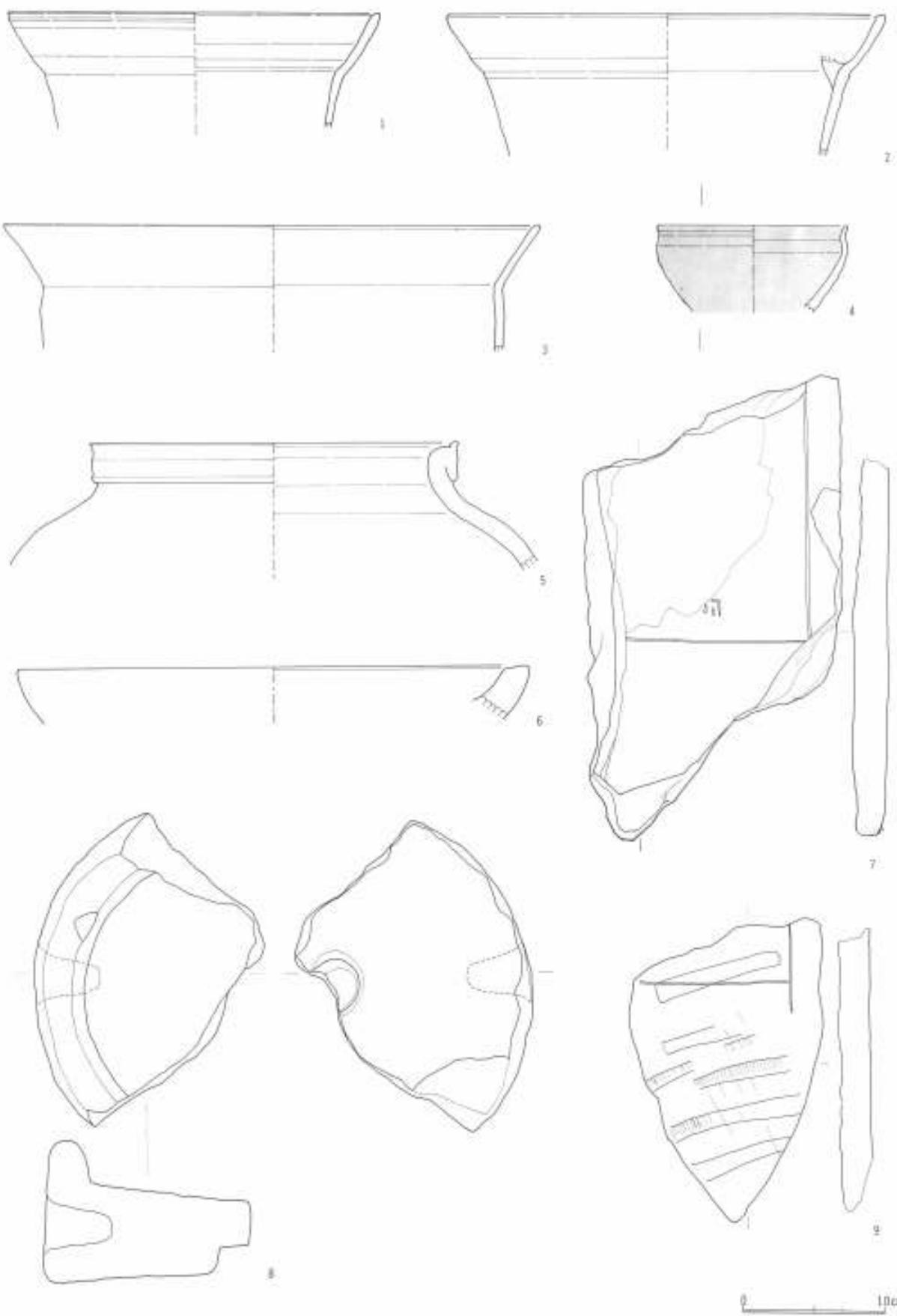


第76图 6号墓石器出土遗物3

- 径36.2cm、残存高3.8cm。安山岩（B）。受鉢の口縁部の半残存。本造構の北側にあり、78-3の北側、78-4の南西から出土した。
- 78-7—板石塔婆。残存高33.3cm、残存幅18.4cm、厚さ2.5cm。緑泥片岩。外面は焼けて黒くなっている所がある。塔身部の下部と基部の破片。本造構の南端から出土した。
- 78-8—石臼。直徑28.1cm、最大厚10.1cm。ひき穴六一（幅）4.4cm、（高さ）4.2cm、（奥行）4.9cm。芯棒受け部径3.5cm。安山岩（A）。上白で、目は不明瞭。半残存。78-7の北側から出土。
- 78-9—板石塔婆。残存高21.6cm、残存幅13.7cm、厚さ2.3cm。点紋緑泥片岩。基部の破片であり、のみの痕を残す。本造構の南側で、79-1の西側、79-3の東側から出土した。
- 79-1—板石塔婆。残存高29.4cm、残存幅20.6cm、厚さ2.9cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。本造構の南側で、78-8の北東から出土。
- 79-2—板石塔婆。残存高37.7cm、残存幅23.3cm、厚さ3.1cm。緑泥片岩。種子は阿弥陀如来。本造構の南側で、78-9・79-4・79-7に囲まれた状態で出土した。
- 79-3—板石塔婆。残存高28cm、残存幅12cm、厚さ2.7cm。緑泥片岩。種子は、阿弥陀三尊で、勢至菩薩の部分の破片。銘は「六、四」が刻まれている。
- 本造構の南側で、79-4の北側から出土した。
- 79-4—板石塔婆。残存高22.9cm、残存幅13.9cm、厚さ2.9cm。緑泥片岩。種子は、阿弥陀三尊で、観音菩薩の部分の破片。
- 本造構の南側で、79-3の南、79-2の西から出土した。
- 79-5—板石塔婆。残存高24.8cm、残存幅16cm、厚さ1.5cm。緑泥片岩。表面は、焼けて黒く変色している。種子は、阿弥陀三尊で、観音菩薩の部分の破片。銘は「貞和」
- と刻まれており、黒沢館跡の第1虎口跡から出土した阿弥陀三尊種子の板石塔婆と同じ年号である。
- 本造構の南側から出土した。
- 79-6—板石塔婆。残存高18.5cm、残存幅14.1cm、厚さ1.4cm。緑泥片岩。種子は、飴迦如来。
- 79-7—板石塔婆。残存高23.3cm、残存幅21cm、厚さ3.4cm。緑泥片岩。表面は、焼けて黒く変色している。基部。
- 本造構の南側で、79-2の北に隣接して出土した。
- 79-8—板石塔婆。残存高21.9cm、残存幅14.5cm、厚さ2.4cm。石墨粗面母片岩。基部。
- 本造構の北側から出土し、78-5の北側に検出された。
- 上述した遺物以外にも瀬戸灰釉わろし皿、瀬戸灰釉丸碗も出土した。



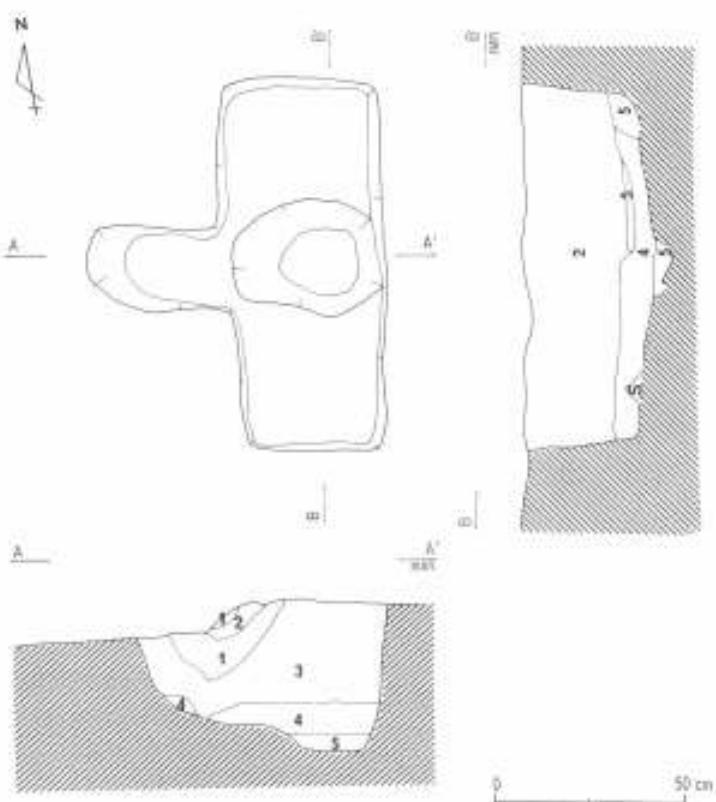
第77圖 7号集石遺構



第78图：7号采集石造構出土遺物(1)



第79图 7号集石造構出土遺物2



第80図 1号火葬墓

1号火葬墓 (第80図、図版37)

位 置 本火葬墓は、調査区の南西部にあり、2号火葬墓の北東に検出された。平面形は長方形を呈し、煙道部が西側に掘られていた。煙道部の上部はN-83°-Wを示す。土層は1・3・4層は暗褐色土で、2層が焼土、5層が炭化物層であった。3層は炭化物・骨・焼土、4層は多量の炭化物が含まれていた。

規 模 北辺40cm、東辺96cm、深さ39cm、煙道部幅20cm、奥行36cm

遺 物 人骨

2号火葬墓 (第83図、図版38)

位 置 本火葬墓は、3~10号火葬墓とともに調査区のほぼ中央で検出された。平面形は長方形を呈し、北側に浅い掘り込みが見られた。長軸はN-70°-Eを示す。

土層は1層が骨片・炭化物層、2層が茶褐色粘土 (炭化物粒含む)、3層が茶褐色

粘土 (焼土ブロック・炭化物・骨片含む)、4層が炭化物層、5層が骨片を大量に含む層であった。

規 模 長軸75cm、短軸25cm、深さ25cm。

遺 物 人骨

3号火葬墓 (第83図、図版38)

位 置 本火葬墓は、2号火葬墓の北西に検出され、4号火葬墓と複合し、南東側は削平されていた。平面形は長方形と書かれて、長軸はN-50°-Wを示す。

土層は1層が焼土・骨片含む層、2層が基盤の茶褐色粘土 (焼土粒含む)、3層が茶褐色粘土 (焼土・炭化物・骨片含む)、4層が炭化物層であった。

規 模 短軸35cm、深さ15cm。

遺 物 人骨

4号火葬墓 (第83図、図版37・38)

位 置 本火葬墓は、3・5号火葬墓と複合して検出された。土層は、1・3・5・6層が茶褐色粘土で、1・3・5層は焼土・炭化物を含み、6層はわずかに焼土・炭化物を含む。2層は炭化物層 (焼土・灰・骨片を含む)で、4層は焼土ブロックと炭化物の混在層。7層が黄褐色粘土 (少しの炭化物含む)であり、1~4層は骨片を含む。

規 模 深さ16cm。

遺 物 人骨

5号火葬墓 (第83図、図版37・38)

位 置 本火葬墓は、4号火葬墓と複合していた。

概 要 土層は、1・3層が茶褐色粘土 (焼土・炭化物・骨含む)、2層が焼土ブロック、3層が焼土壁、5層が吸炭層、6層が焼土ブ

ロック・骨片を主体とし炭化物含む層、7層が炭化物層（焼土ブロック・骨片含む）、8層が黄褐色土（炭化物・焼土粒を含む）であった。長軸はN—8°—Wを示す。

規模 北辺30cm、深さ17cm。

遺物 人骨

6号火葬墓（第83図、図版38）

位置 本火葬墓は、7号火葬墓と複合していた。
概要 土層は、1・4層が茶褐色粘土で、1層が焼土・炭化物含み、4層は焼土・炭化物・骨片を含む。2層が焼土ブロック層、3層が焼土壁、5層が吸炭層、6層が炭化物層で、全層から骨片が出土。平面形は長方形で長軸はN—7°—Wを示す。

規模 長軸88cm、短軸35cm、深さ18cm。

遺物 人骨

7号火葬墓（第83図、図版38）

位置 本火葬墓は、6号火葬墓の西に検出され、
概要 平面形は長方形で、長軸はN—86°—Wを示す。土層は1層が焼土ブロック層、2・3層が炭化物層で、3層は焼土ブロックを含む。4層は黄褐色粘土で炭化物を含む。全層から骨片出土。

規模 長軸64cm、西辺13cm、東辺23cm、深さ12cm。

遺物 人骨。

8号火葬墓（第83図、図版38）

位置 本火葬墓は、7号火葬墓の西に位置し、不整円形を呈す。土層は骨片を含む炭化物層だが、1・3層には焼土ブロックが大量に含まれる。

規模 長径30cm、短径23cm、深さ9cm。

遺物 人骨

9号火葬墓（第83図、図版38）

位置 本火葬墓は、8号火葬墓の西に位置し、平面形は円形を2つ重ねた形態である。土層は1層が炭化物層（焼土・骨片多く含む）、2層が茶褐色粘土層

（焼土ブロック含む）。3層が茶褐色粘土層（焼土・炭化物含む）であり、全層骨片を含む。

規模 長軸60cm、深さ9cm。

遺物 人骨。

10号火葬墓（第83図、図版38）

位置 本火葬墓は、火葬墓群の西端に位置し、
概要 平面形は長方形を呈し、主軸はN—71°—Wを示す。土層は1層が炭化物層、2・3層が茶褐色粘土、4層が黄褐色粘土（炭化物含む）であり、全層から骨片が出土。

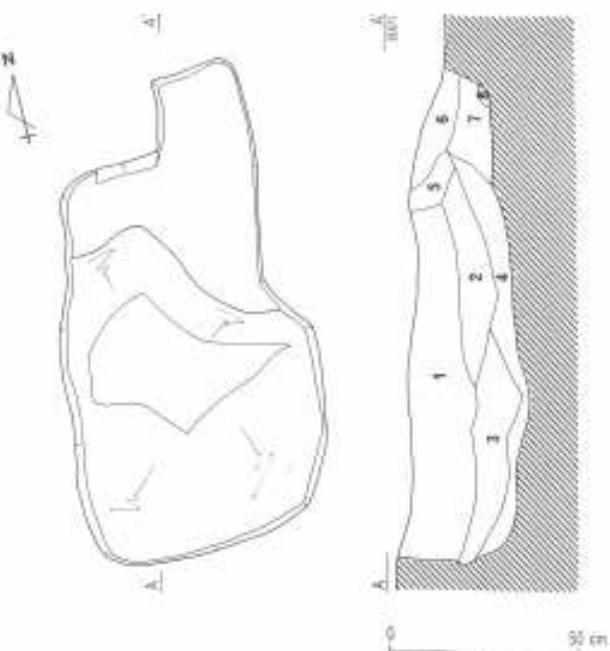
規模 長軸90cm、東辺19cm、西辺14cm、深さ12cm。

遺物 人骨

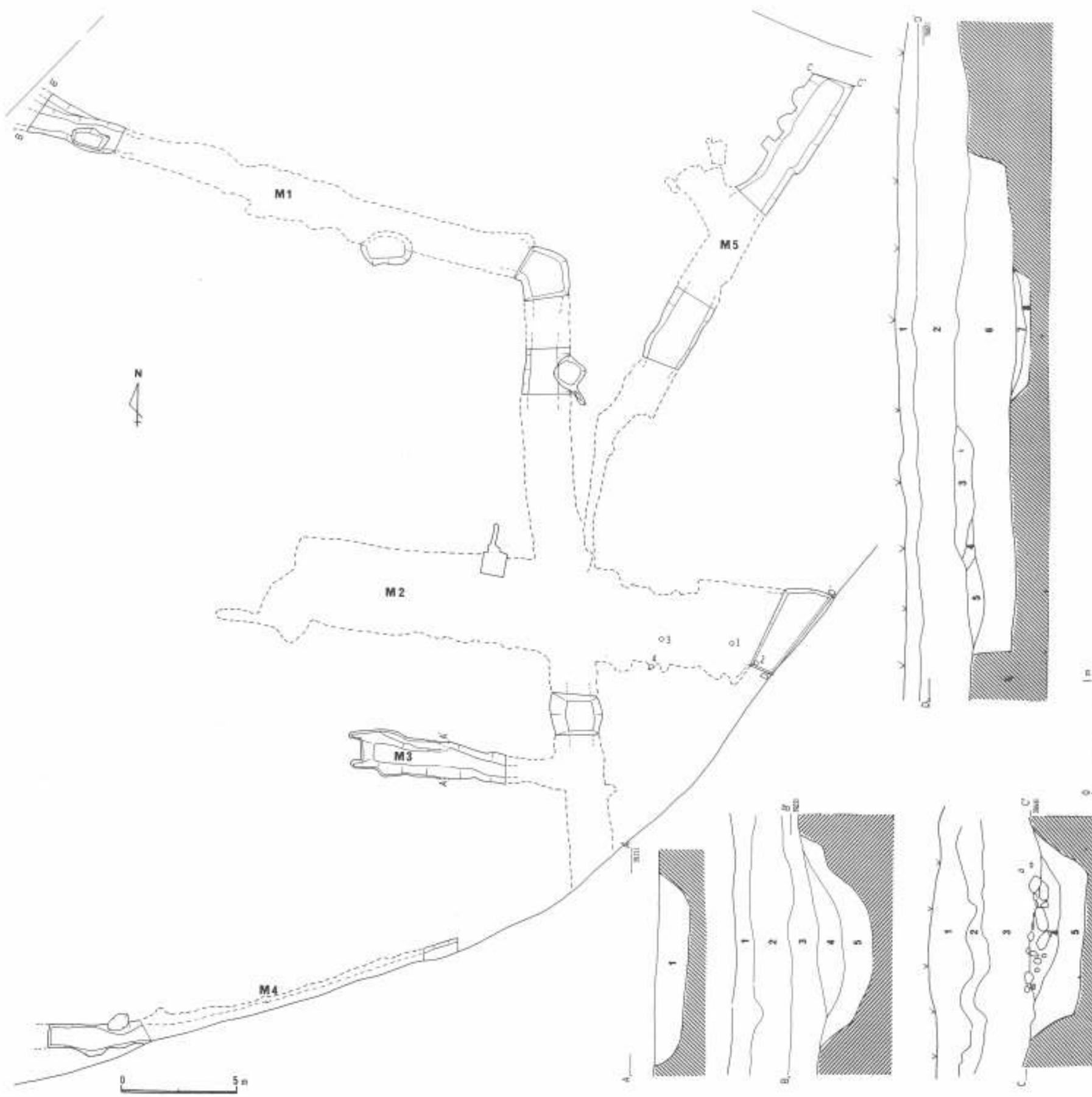
11号火葬墓（第81図）

位置 本火葬墓は、11号土塙の東、12号土塙の北に検出され、1分溝跡と複合していた。

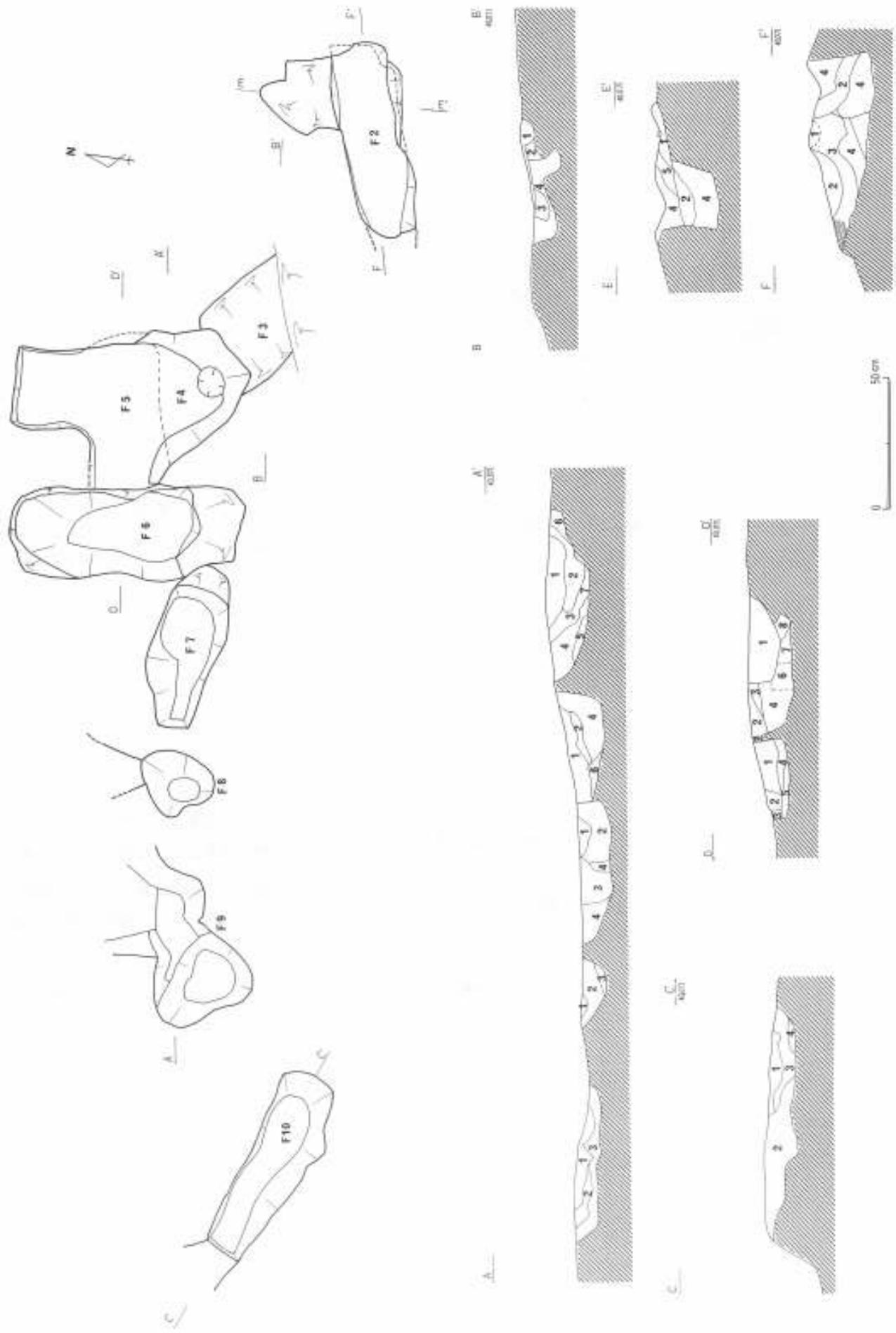
概要 平面形は長方形を呈し、北東部に方形の張出し部がみられる。主軸はN—3°—Eを示す。土層は1層が茶褐色土、2層が暗褐色土（焼土・炭化物含む）、3層が暗褐色土、4層が炭化物層（人骨・焼土・粘土含む）。



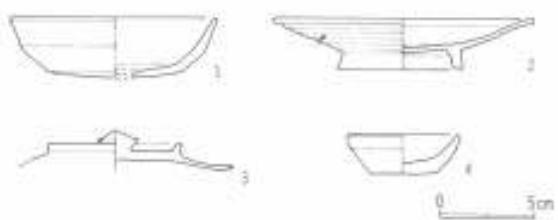
第81図 11号火葬墓



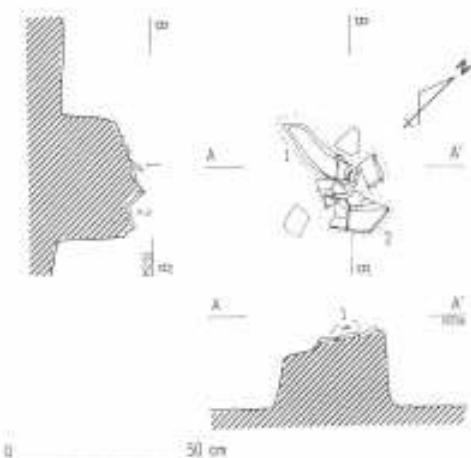
第82図 1～6号溝跡



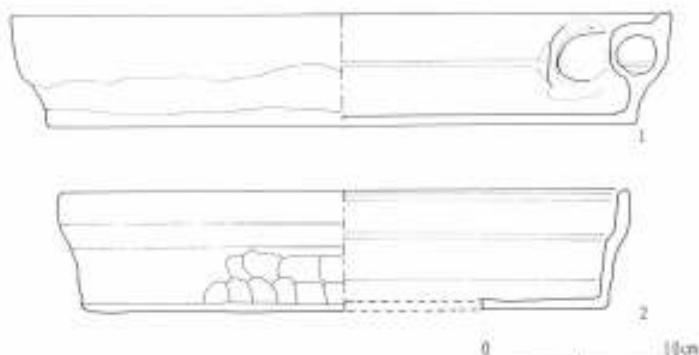
第83圖 2~10号人標本



第84図 2号溝出土遺物



第85図 P-11区遺物出土状態



第86図 P-11区出土遺物

む）。5層が暗褐色土（人骨・炭化物含む）、6層が暗褐色土（焼土少し含む）、7層が黄褐色土（焼土少し含む）、8層がローム層である。

規 模 長軸124cm、南辺55cm

遺 物 人骨

1号溝跡（第82図、図版35）

位 置 本溝跡は、調査区の北西部で主軸はN—

概 要 $74^{\circ}-W$ で、L-9区で約 110° 曲がり主軸はN— $5^{\circ}-W$ を示す。7・11・12号土塙、4号集石造構、11号火葬墓、2・5号溝跡と複

合し、本溝跡によって切られていた遺構は2号溝跡であった。土層は、1層表土、2層暗褐色土、3層暗褐色土、4層ロームブロックを多く含む暗褐色土、5層ロームブロックを少し含む暗褐色土であった。

規 模 上幅1.85～2m、下幅0.6～1m、深さ60cm。

遺 物 なし。

2号溝跡（第82・84図、図版35・49）

位 置 本溝跡は、調査区のほぼ中央を主軸N—概要 $85^{\circ}-W$ の角度で走っており、3号住居跡、3・4号集石造構、1・5号溝跡と複合し、それらの遺構によって切られていた。土層は、1層表土、2・3・5～7層暗褐色土、4層灰褐色土、8層黒褐色土であった。2～5層にはローム粒子、火山灰、炭化物が含まれていた。

規 模 上幅4.45m、下幅4.3m、深さ40～58cm。

遺 物 覆土上部から土器・陶器・板石・塔婆等が多量に出土。

1—壺（土師器）。口径11cm、底径7.1cm、器高3.2cm。中粒砂含み、褐色。内面焼付着。覆土上部出土。

2—皿（須恵器）。口径14cm、高台径6.7cm、器高2.8cm。中・粗粒砂含み、灰白色・灰褐色。覆土上部出土。

3—蓋（須恵器）。擬宝珠様つまみと、輪状のつまみをもつ。輪状つまみ径7cm。白色針状物質、中・粗粒砂含み、灰褐色・内面には暗灰褐色の所あり。覆土上部出土。

4—かわらけ。口径6.1cm、底径3.2cm、器高2.1cm。中粒砂含み、淡黄褐色。覆土上部出土。

3号溝跡（第82図）

位 置 本溝跡は、2号溝跡の南に位置し、主軸概要はN— $84^{\circ}-W$ を示す。1号溝跡と複合して

いた。土層は、ローム粒子を含む暗褐色土であった。

規 模 上幅1.60~1.97m、下幅0.5~1.04m、深さ36cm。

遺 物 土器19点、川原石17点。

4号溝跡（第82図、図版36）

位 置 本溝跡は、調査区の南端に検出され、主概要 約はN-105°-Wを示す。1号集石遺構と複合しており、1号集石によって切られたいた。土層は、1層暗褐色土（ローム粒子・炭化物を少し含む）、2層暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多く含み、炭化物を少し含む）であった。

規 模 上幅1.04~1.36m、下幅1.1~0.6m、深さ51cm。

遺 物 板石塔婆1点、石臼1点、川原石20点。

5号溝跡（第82図、図版36）

位 置 本溝跡は、調査区の東側に検出され、北概要 側の主軸はN-30°-Eを示し、M-8区から南は幅も狭くなり、主軸はN-9°-Eを示す。5~7号集石遺構、1~2号溝跡と複合しており、5~7号集石に切られ、1~2号溝を切っていた。

土層は、1層耕作土、2層暗黄褐色土、3~5層暗褐色土で、4層は多くのロームブロック、5層は少量のロームブロックを含んでいた。

規 模 上幅1.3~1.96m、下幅0.8~1.2m、深さ48cm。

遺 物 なし。

P-11区出土遺物（第85~86図、図版39~49）

位 置 調査区の北東端のP-11区から、遺構が検概要 出されなかったが、2点の内耳土器が重なり合って検出された。

1-内耳土器。口径35.5cm、底径31.5cm、器高6cm。中粒砂含み、外面黒褐色・内面淡褐色。整形は横位の指ナデ。壺残存。内耳が4個貼付される。

2-内耳土器。口径30.2cm、底径28.3cm、器高6.5cm。中粒砂含み、外面黒褐色・内面暗褐色。底部淡褐色。壺残存。

グリッド出土遺物（第87~88図、図版38~49+50）

87-11号（土師器）。口径11.4cm、器高3.3cm。粗粒砂含み、外面褐色・内面茶褐色。口縁横ナデ。体部削り。壺残存。M-7区出土。体部に黒斑あり。

87-21号（須恵器）。口径13.5cm、高台径6.9cm、器高5.4cm。粗粒砂含み、暗灰褐色。底部右回転糸切り後、高台を貼付。壺残存。I-8区出土。

87-3かわらけ。口径6.2cm、底径3.6cm、器高1.6~2.3cm。中粒砂含み、淡褐色。口縁部タール付着。底部回転糸切り放し。完存。M-5区出土。

87-4かわらけ。口径11cm、底径4.7cm、器高2.6cm。中粒砂含み、淡褐色。壺残存。K-7区出土。

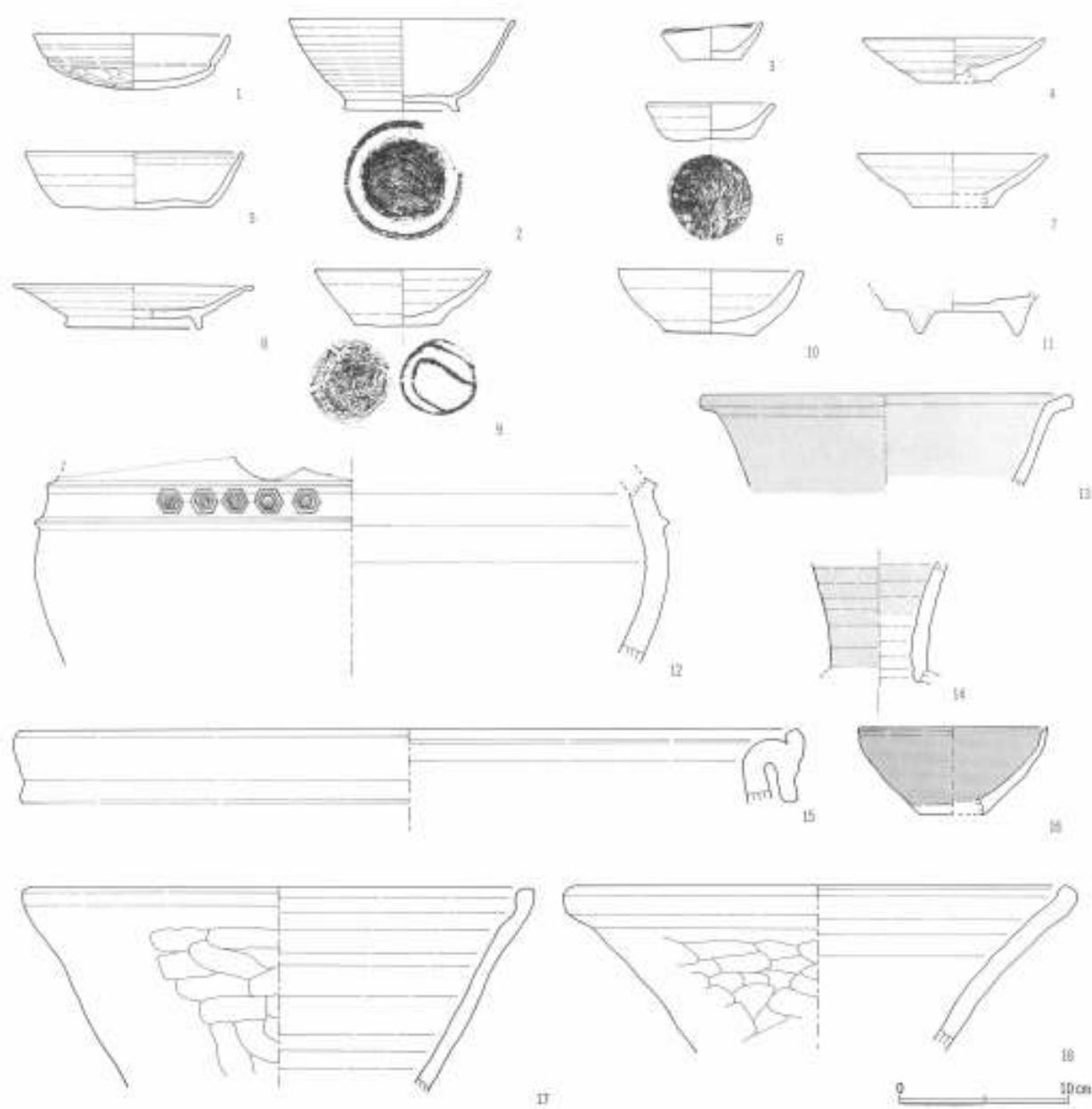
87-5号（土師器）。口径12.7cm、底径9.2cm、器高3.3cm。中粒砂含み、口縁淡褐色・体部・底部黒色。口縁横ナデ・底部手持ち削り。壺残存。K-3区出土。

87-6かわらけ。口径7.8cm、底径5.2cm、器高2.1cm。中・粗粒砂含み、黒色・外側の一部は淡褐色。底部はナデされている。壺残存。I-5区出土。

87-7かわらけ。口径11.4cm、底径5cm、器高3.2cm。中粒砂含み、淡褐色・外側の一部淡黃褐色。底部回転糸切り放し。壺残存。K-7区出土。

87-8皿（須恵器）。口径14.2cm、高台径8.2cm、器高2.6cm。粗粒砂含み、灰白色。底部回転糸切り後、高台貼付。壺残存。J-3区出土。

87-9かわらけ。口径10.4cm、底径4.9cm、器高3.4cm。中粒砂含み、淡褐色。底部内面指ナデ。壺残存。D-6区出土。



第87図 プリヤド出土遺物(1)

87-10-かわらけ。口径11.2cm、底径5.6cm、器高3.8cm。中粒砂含み、外面淡褐色、内面淡黄褐色。底部内面指ナデ。墨残存。Q—10区出土。

87-11脚付土器。底径17cm。脚部高1.4cm。中粒砂含み、茶褐色。底部の土残存。C—6区出土。

87-12鉢形土器。胴部最大径37.8cm。胴部に2本の凸帯を貼付し、凸帯間には亀甲文に菊花文を配した押印が施文されている。凸帯の上部には透しが見られる。中粒砂含み、淡

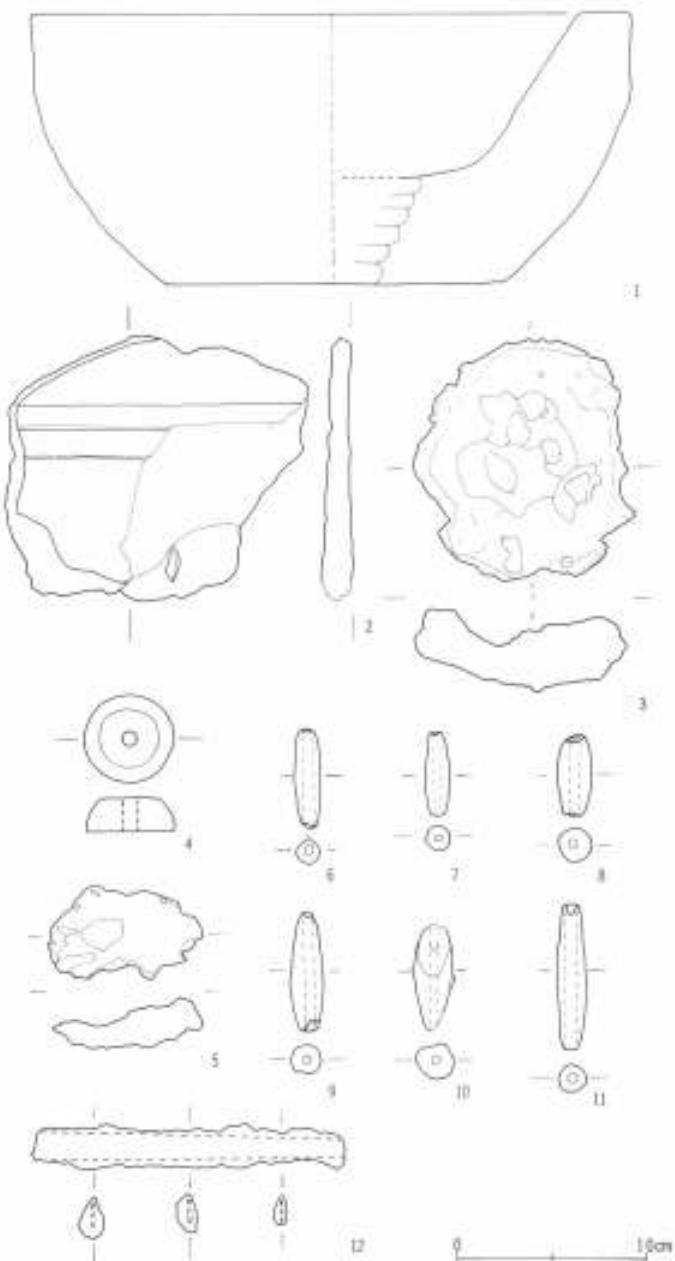
褐色だが内面は黒い所がある。胴部の土残存。N—7区出土。

87-13折縁深皿(瀬戸焼)。口径22cm。細粒砂含み、灰緑色。灰釉。口縁の土残存。D—6区出土。

87-14花瓶(瀬戸焼)。頭部径5.8cm。細粒砂含み、灰緑色。灰釉。口縁の土残存。D—6区出土。

87-15甕(常滑焼)。口径47.6cm。粗粒砂含み、茶褐色。口縁の土残存。B—4区出土。

87-16天目茶碗。口径11.2cm、底径3.7cm、器高



第88図 グリード出土遺物(2)

- 88-2 板石塔婆。残存高14.3cm、残存幅16cm、厚さ1.7cm。頭部破片。L-12区出土。
- 88-3 鉄洋。長さ13cm、幅11.5cm、厚さ3.2cm。L-11区出土。重さ110g。
- 88-4 紡錘車。上部径3.1cm、下部径4.7cm、厚さ1.8cm。滑石。完存。Q-10区出土。
- 88-5 鉄洋。長さ5cm、幅8.2cm、厚さ2.1cm。G-8区出土。重さ10g。
- 88-6 土鍤。長さ5.4cm、最大径1.4cm。細粒砂含み、茶褐色・暗褐色。端部少し欠損。重さ10g。
- 88-7 土鍤。長さ4.5cm、最大径1.2cm。中粒砂含み、淡褐色。端部少し欠損。重さ6g。
- 88-8 土鍤。長さ4.3cm、最大径1.9cm。細粒砂含み、淡褐色・黒斑あり。完存。G-3区出土。重さ15g。
- 88-9 土鍤。長さ6.4cm、最大径1.8cm。中粒砂含み、淡褐色・灰褐色。端部少し欠損。G-3区出土。重さ17g。
- 88-10 土鍤。残存長5.7cm、最大径2.1cm。粗粒砂含み、淡褐色。子残存。重さ19g。
- 88-11 土鍤。長さ7.8cm、最大幅1.5cm。淡褐色。端部少し欠損。重さ15g。
- 88-12 鉄器。長さ16.5cm、幅1.6cm、厚さ5mm。M-5区出土。

5.2cm。細粒砂含み、黒色。地肌は灰褐色。
子残存。N-7区出土。

88-17 橋鉢。口径30.8cm、残存高12.2cm。粗粒砂含み、外面黒褐色、内面灰褐色。子残存。
A-4区出土。

87-18 橋鉢。口径30.8cm、残存高10cm。中粒砂含み、灰褐色。外面指ナデ、内面擦れています。
子残存。L-5区出土。

88-1 石鉢。口径32.2cm、底径18.2cm、器高14.5cm。安山岩(A)。子残存。L-12区出土。

IV. 黒沢館跡及び樋ノ上遺跡出土の埋葬・火葬の人骨について

金子 浩昌

黒沢館跡及び樋ノ上遺跡からは15~16·19世紀の古墓が発掘され、埋葬人骨、火葬人骨が出土している。人骨の保存は良くなかったが、こうした墓の例を通して、この時代の葬制を知り得たことは貴重な収穫であった。人骨についても断片的ながら今後の研究に参考となるものであろう。

1. 黒沢館跡2号土塚出土人骨（第16図、図版14）

この人骨は約36cmの深さに暗褐色土を掘り込んだ土壌中に発見されている。

頭位：体軸といっしょに見た場合、南に向けてたものとみてよいであろう。

姿勢：上腕は肘のところで曲げて胸元にわかれていたものの如く、後肢は両脚をそろえ、大腿は強く曲げられ膝関節も曲げられて足首をそろえるようにわかれている。古銭6枚が腹部上位の位置に置かれていたと推定される。仰むけ姿勢屈葬ということになる。

遺体：遺体は頭部、四肢の位置とほぼ確認できたものの、その損傷は著しく、骨各部位の大きさなどを詳かにできなかった。しかし、僅かにのこされた上腕骨、大腿骨及び胫骨より成人であることは推定され、さらに歯の一部からかなり年をとった人であることも推定された。

歯は臼歯の一節をみたが、上顎後臼歯には著しい咬耗がみられ、その第1後臼歯歯冠部が失なわれて、象牙質が全面に露呈し、第2後臼歯も近心部分の歯冠が失われ、象牙質が露呈していた。

なお、歯の大きさからみて男性ではないかと推定される。

2. 樋ノ上遺跡1号土塚出土人骨（第37図、図版21）

この人骨は約80×90cmの短い長方形、深さ約40cmに暗褐色土を掘りくぼめた土壌より出土した。

頭位：体軸は南西から北東に斜めにのび、頭は殆んど真南を向き、顔は少しく東に向くような状態であったろう。

姿勢：墓壙内に斜めにいっぽいにはいる。上腕は下方にのぼし、肘から曲げて胸元で合せるような形であったようだ。両脚の大脚はかなり強く曲げられ、膝関節も強く曲げられ、足首がそろえられている。おそらく当初は東側を斜めに向くような体付きで納められたのである。

遺体：全体に保存は極めて悪い。骨質の殆んどは土にかわったようである。僅かな骨のこりから、主要四肢骨が認められただけである。歯は上下噛み合された状態でみることができ、前臼歯部分でみると限り、咬耗は弱い。歯はやや小さく、女性であるかも知れない。成人の埋葬遺体である。

3. 樋ノ上遺跡15号土塚出土人骨（第60図、図版30）

この人骨は約95×60cmの長方形、深さ20cm程黄褐色土を掘りくぼめた土壌中より出土したものである。

頭位：体軸は北北東を向くが、おそらく北側に向けるように意図したのである。顔は西方を向く。

姿勢：上半身の骨の保存が悪く頭部から脊柱への伸びがはっきりしない。おそらく、顔を西に向け、脊柱はほぼ南にのび、上腕は肘のところから曲げ、胸元で合せたのである。ちょうど手の合せられた下あたりに古銭があったことになる。下肢は腰から約90°の角度で曲げられており、左右は若干ずれるが、ほぼそろえて膝関節を強く曲げ、足首をそろえる。側面を向いた屈葬姿勢である。

遺体：保存は著しく悪い。骨はかろうじて大腿、胫骨においてその全体を見たが、既に計測などに耐えるものではなかった。しかし、全体の大きさから成年のものとみてよい（性不明）。

黒沢館2号土塚、桶の上1、15号土塚出土人骨のいずれもが成人のもので、黒沢館のものがかなり年とった年令であった。そして埋葬法は手、足を曲げた、からだを屈めた姿勢で埋葬されていたのはこの時代にしばしばとられた方法であったようだ。頭位は南2例と北1例に分かれたが、このいずれかをとるのが普通であったのであろう。

4. 桶ノ上遺跡火葬墓出土骨 (第80・81・83、図版37・38)

2号火葬墓

数個の頭蓋片、顎骨片、歯の他は肋骨、肢骨片である。顎骨片には歯が残り、成育した個体を推定させる歯槽歯根の状態である。肢骨片の骨は大部分2~3mm程度のうすいものである。上腕、大腸、胫骨などの骨はほとんど集められていないことになる。

3号火葬墓

小骨片のみで、頭蓋、歯などはみつからなかった。多分成人骨。

4号火葬墓

頭蓋骨片数個、他は肋骨、肢骨の小骨片。それに粉状になった骨が固化していた。おそらくこれも成人骨であろう。

5号火葬墓

僅かな骨片である。頭蓋片を含む。成人骨とみられる。

7号火葬墓

四肢骨片のみである。肋骨の裂けたような骨片も多い。

8号火葬墓

僅かな骨片である。うすい骨のものが大部分である。肋骨など限られたものだけなのであろう。

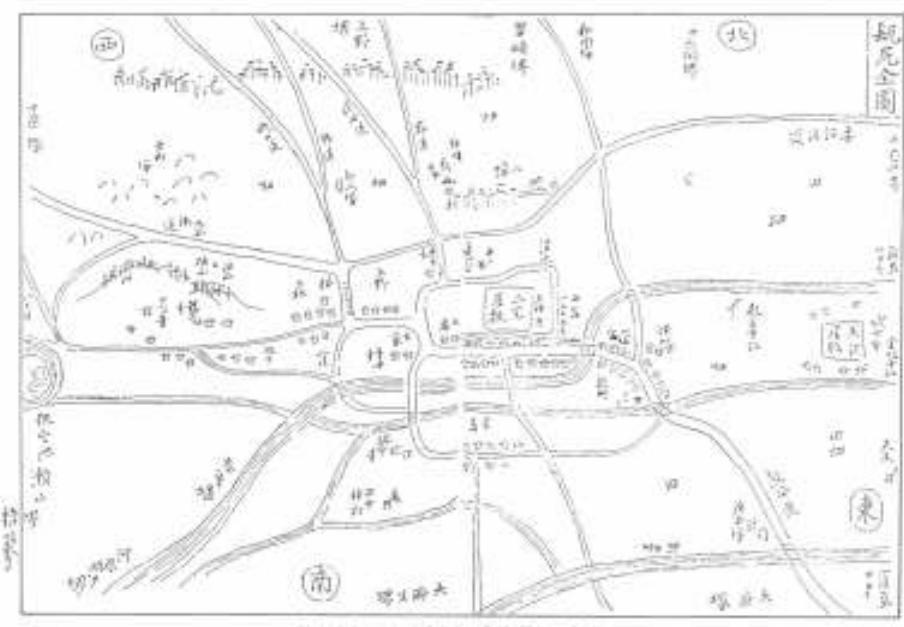
9号火葬墓

5~6片の骨である。3.5mm程の骨があり成人骨であろう。

10号火葬墓

10片程の骨である。

以上の火葬墓から出土した骨は、当然強く火を受けた火葬骨であって、細片化していた。ただ、墓によってのこされた骨の量はまちまちで、その量的な差が大きかった。また骨は細片化していたが、骨質の厚い骨は少なかつた。収納する骨には当初から大形の骨は除外されていたのであろうか。



第89図 黒沢全図（「訪居録」所収）



第90図 黒沢屋敷（「訪居録」所収）

い。遺物は虎口跡から貞和4年（1348）、西堀から康永3年（1344）、G-14区から永享10年（1438）の板石塔婆が出土しており、グリッド出土遺物として、15~16世紀の瀬戸焼、美濃焼が出土した。文献資料に、渡辺舉山の記した「訪居録（ほうへいろく）」に黒沢屋敷として「越尻天王縁起に北條相模守入道高時の一族久留澤武藏守平貞時と云るもの、居城の地なり」とある。

樋ノ上遺跡は、奈良~平安時代の住居跡、15~16世紀の土塙・集石遺構、19世紀の火葬墓が検出された。

土塙・集石遺構は、中世の民衆の墓地の在り方を知るのによい資料となる。土塙の上部に、川原石・石臼片・板石塔婆片を置いてあるもの。かわらけだけを置くものの2種類がある。石臼は又は土に割ったもの、板碑も故意に割られた状態で検出され、どちらも焼けて黒くなっているもの多かった。

火葬墓は、長方形を呈し煙道部をもつが、単独で存在するものと、10基近くの墓がまとまって検出されるものがあった。

VII. まとめ

今回の調査によって、黒沢館跡と、樋ノ上遺跡の2遺跡が発掘された。

黒沢館跡は、台形を呈し、南辺に折をもち、西角に出隅をもつものであった。大きさは、堀の内側で、北辺55m、東辺57m、南辺の折より東側の長さ30m、折の長さ6m、折より西側の長さ24m、西辺39mを測る。

主軸は、N-60°-Wを示し、西側へ傾いている。

館跡の東側には、「ふるぼり」といわれる水路が南から北へ流れているが、館跡のところで東へ大きく迂回して、館跡の東角と平行に約90°曲がっている部分もある。この「ふるぼり」は、59年度の試掘調査により天明期以前ということが確認できており、館跡の外堀として使われた可能性が高い。

三尻遺跡群・黒沢館跡 樋ノ上遺跡

写 真 図 版

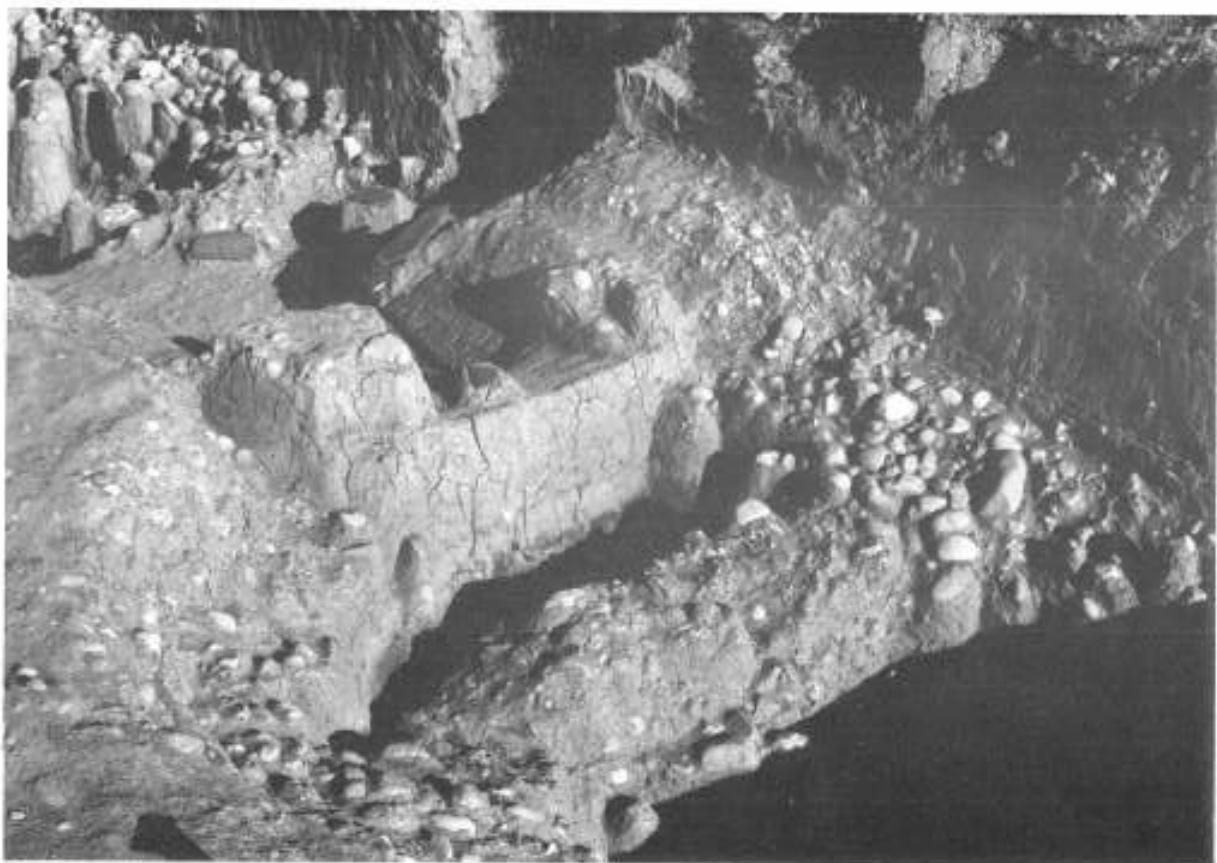


黒沢ダム建設航空写真

図版2



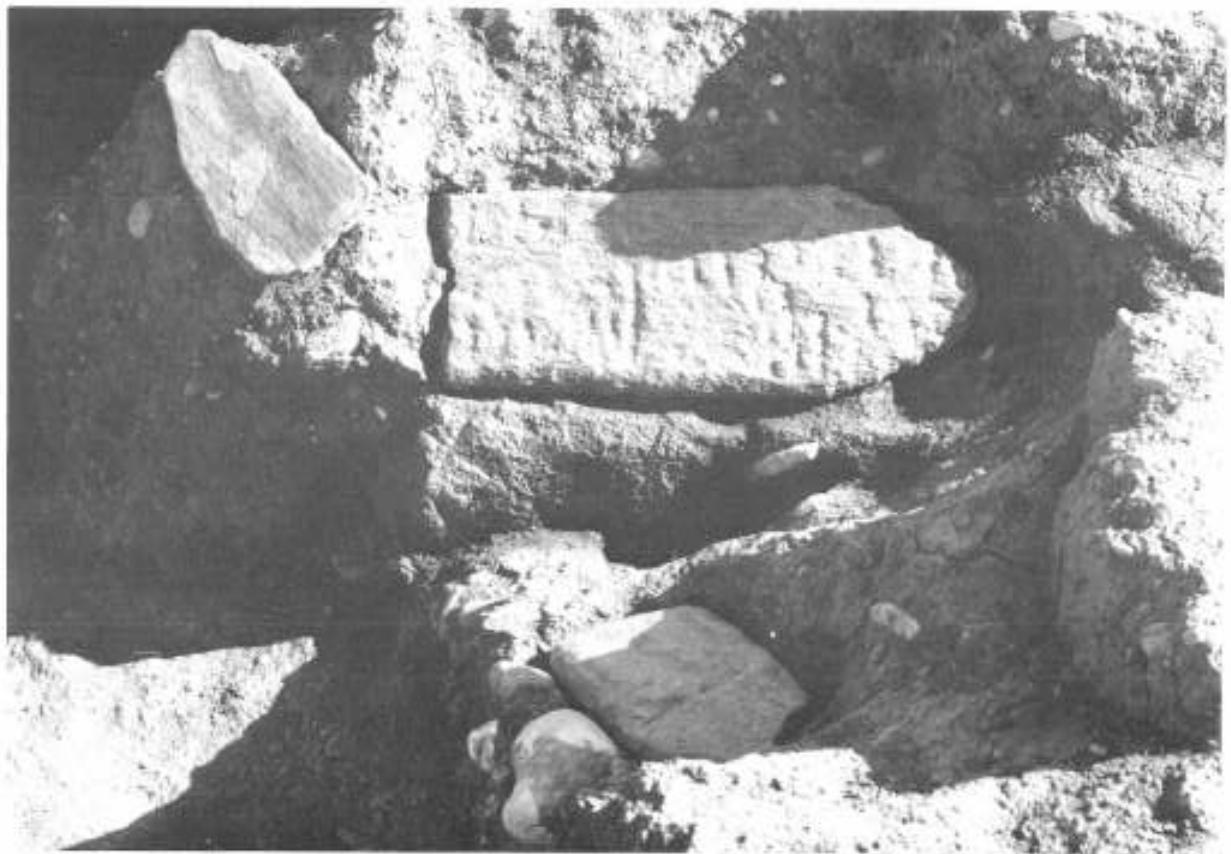
1. 第1虎口跡



2. 第1虎口跡

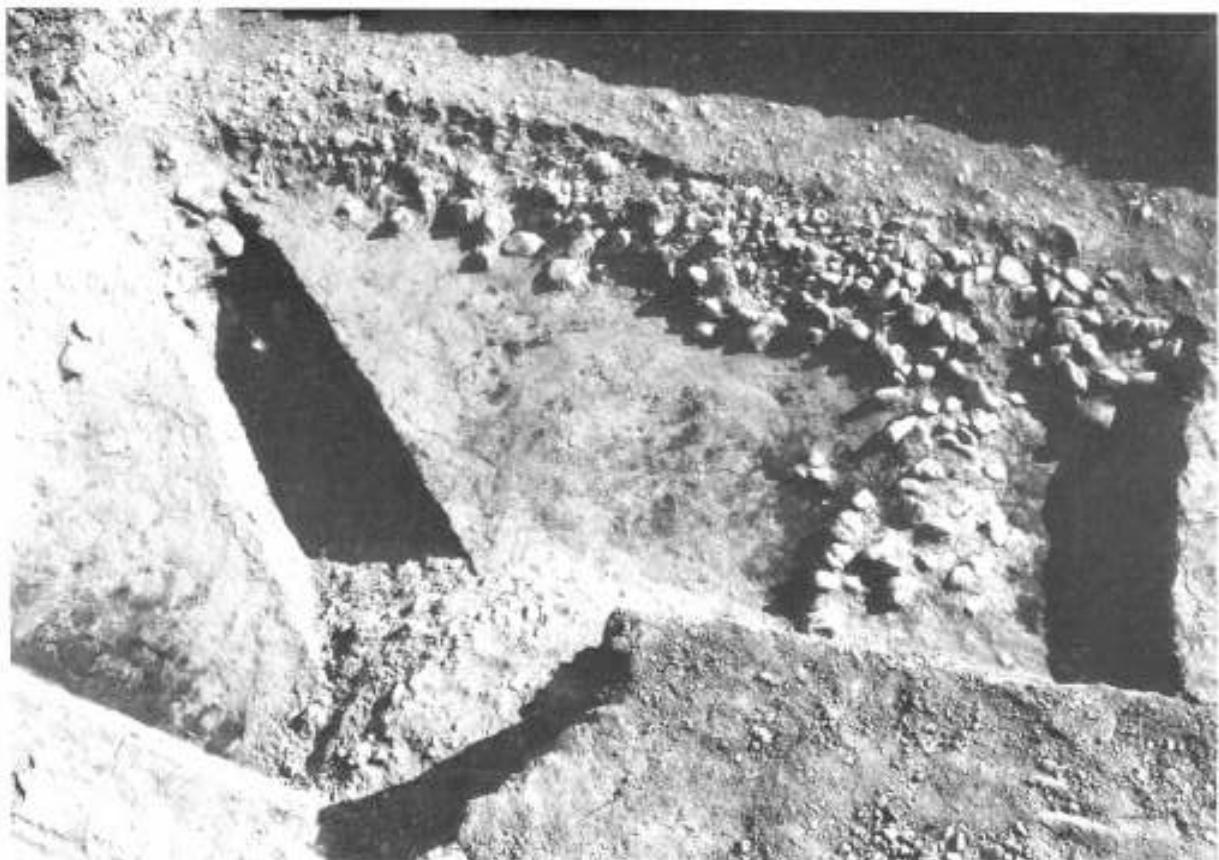


1. 第1虎口跡・板碑出土状態



2. 第1虎口跡・板碑出土状態 (5-1)

図版 4



1. 第2虎口跡・堀跡（東角）



2. 第2虎口跡



1. 堤跡（南角）



2. 堤跡（南角）

図版 6



1. 墓跡 (折)



2. 土壇跡 (北西部)



1. 烟跡・土壘跡(北側)



2. 場跡(北側)

図版 8



1. 焼跡 (出窓)



2. 焼跡 (出窓)



1. 1-5号溝跡

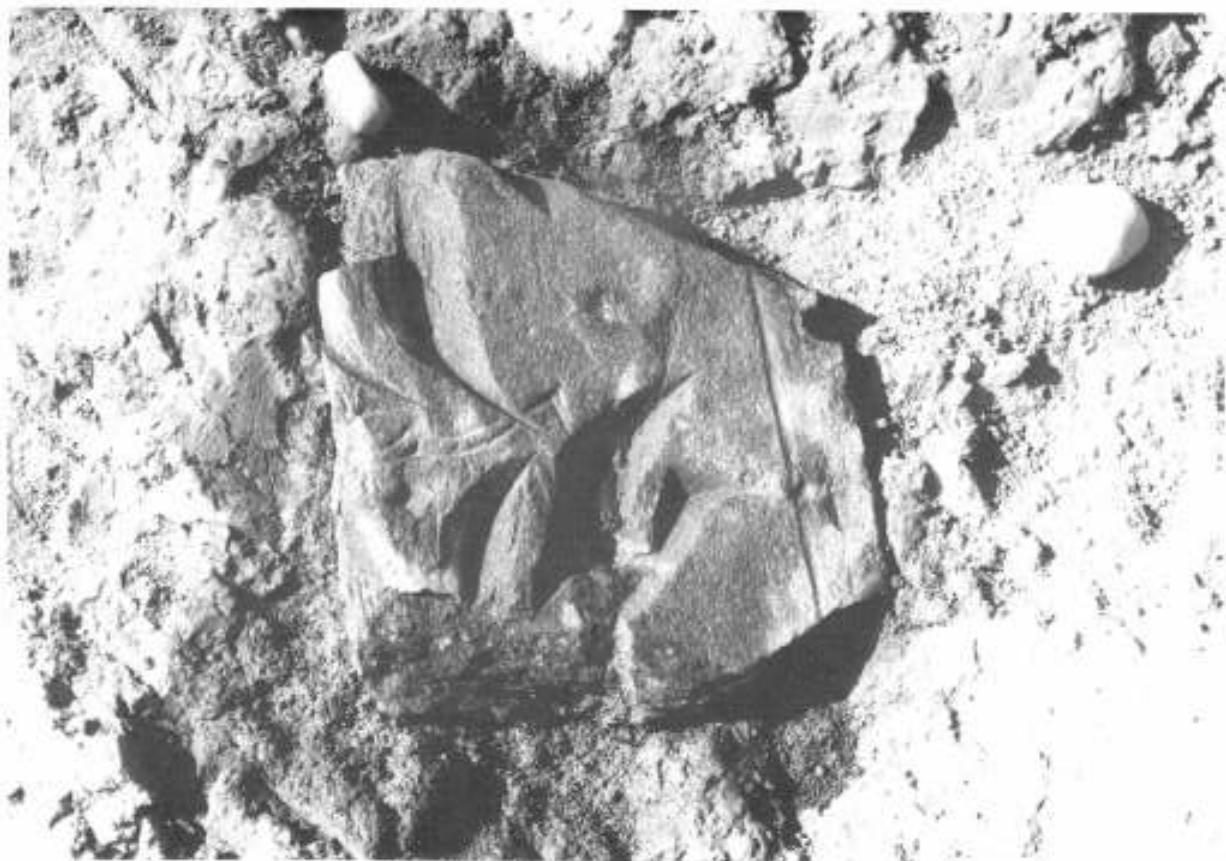


2. 6号溝跡

図版10



1. G-14区・板碑出土状態 (24-1)



2. 集石遺構・板碑出土状態 (13-2)

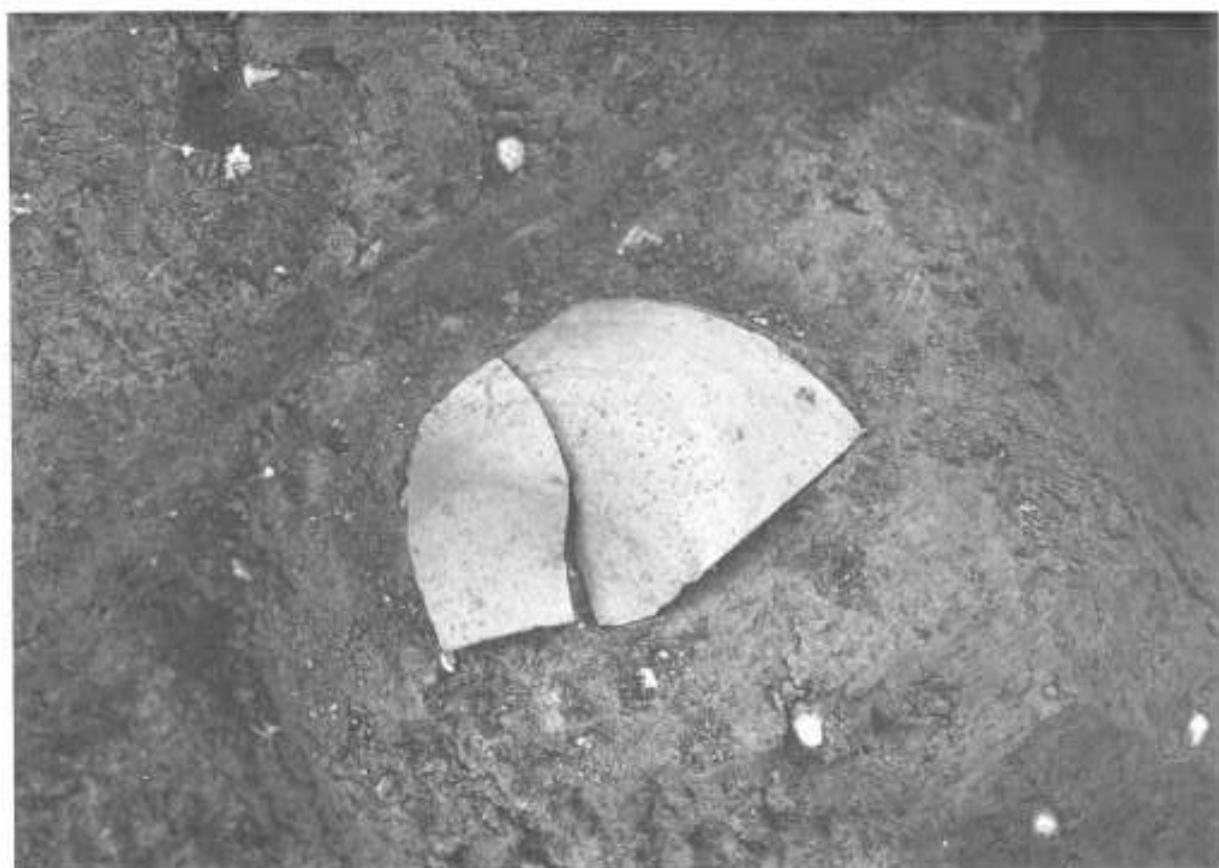


1. H・I-9区・鉄刀出土状態(24-2)

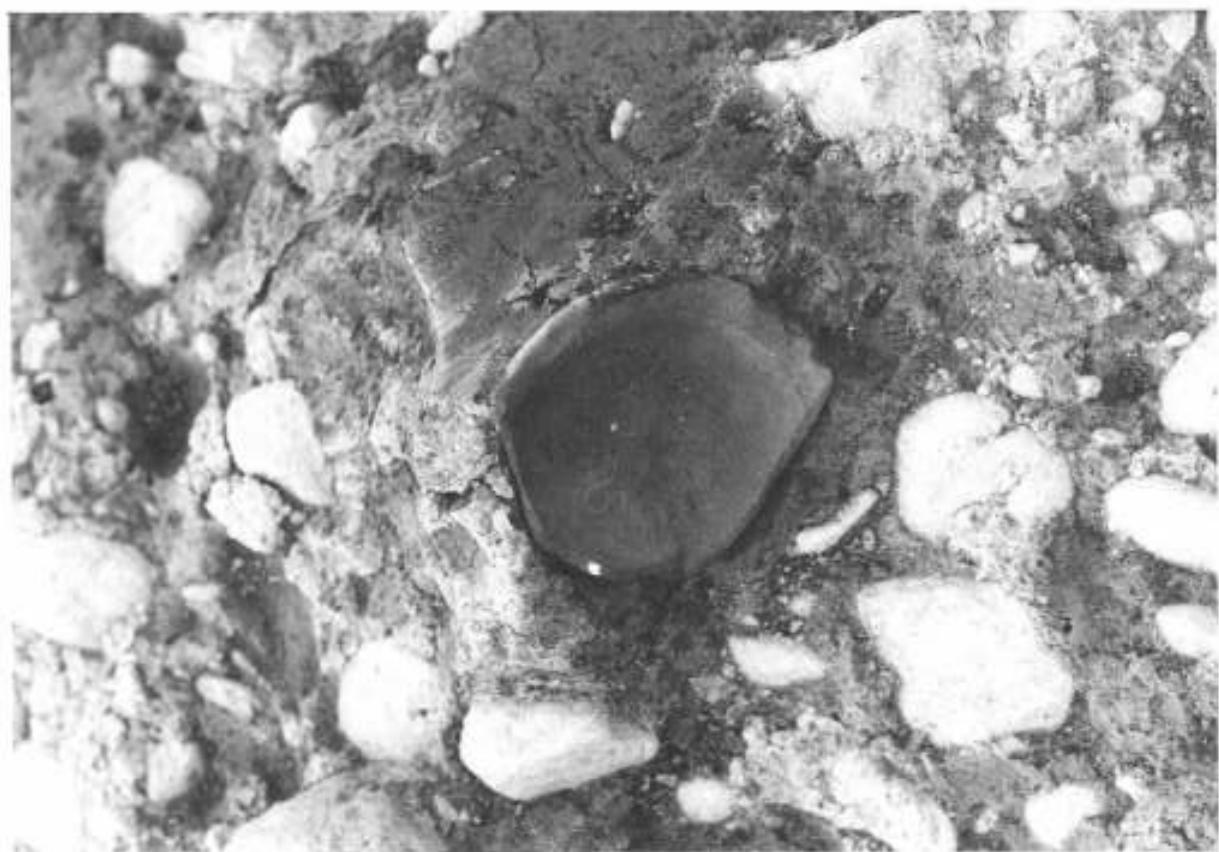


2. 6号溝跡・石臼出土状態(17-3)

図版12



1. 堀跡(南側)・かわらけ出土状態(10-5)



2. 堀跡(南側)・かわらけ出土状態(10-4)



1. 堀跡（南側）・かわらけ出土状態 (10-3)



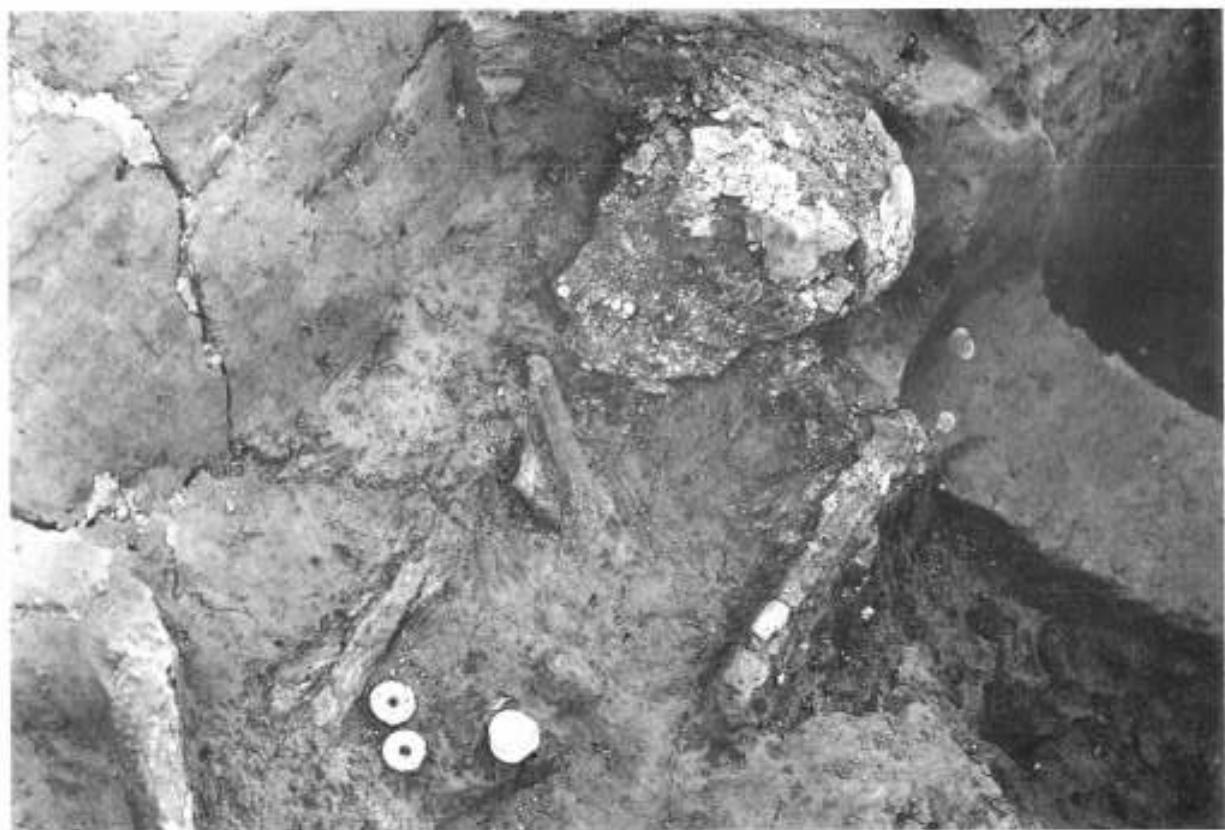
2. 堀跡（北側）・板碑出土状態 (10-2)

図版14

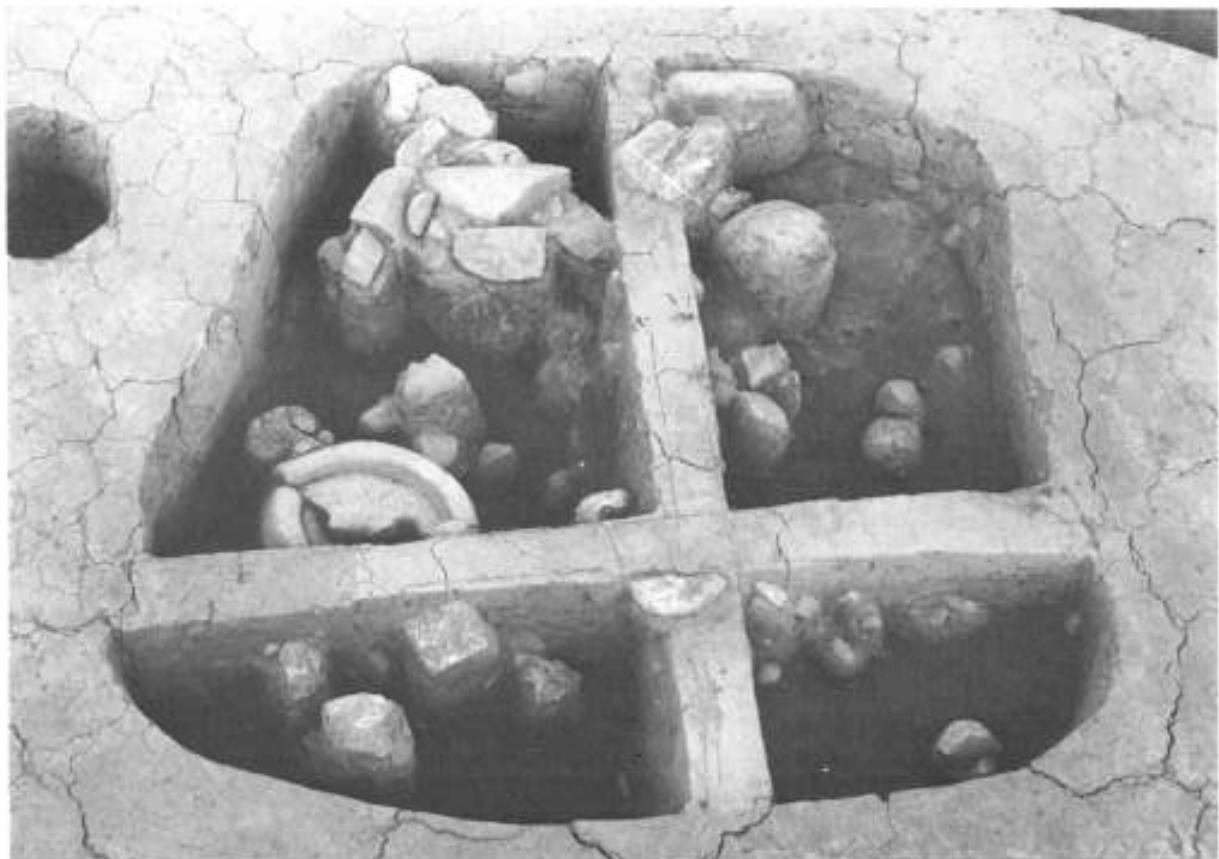


1. 2号土塚・人骨出土状態

頭位を南に向け、上腕を肘で曲げて胸上におき、後肢は両脚をそろえて、大転盤強く曲げ、膝関節も曲げられ足首がそろえられていた。古鏡6枚が腹部上位に置かれていた。仰むけ姿勢回葬。成人で男性と推定される。



2. 2号土塚・人骨出土状態



1. 7号土塙



2. 7号土塙・石臼出土状態 (23-8)

図版16



橋ノ上道路航空写真

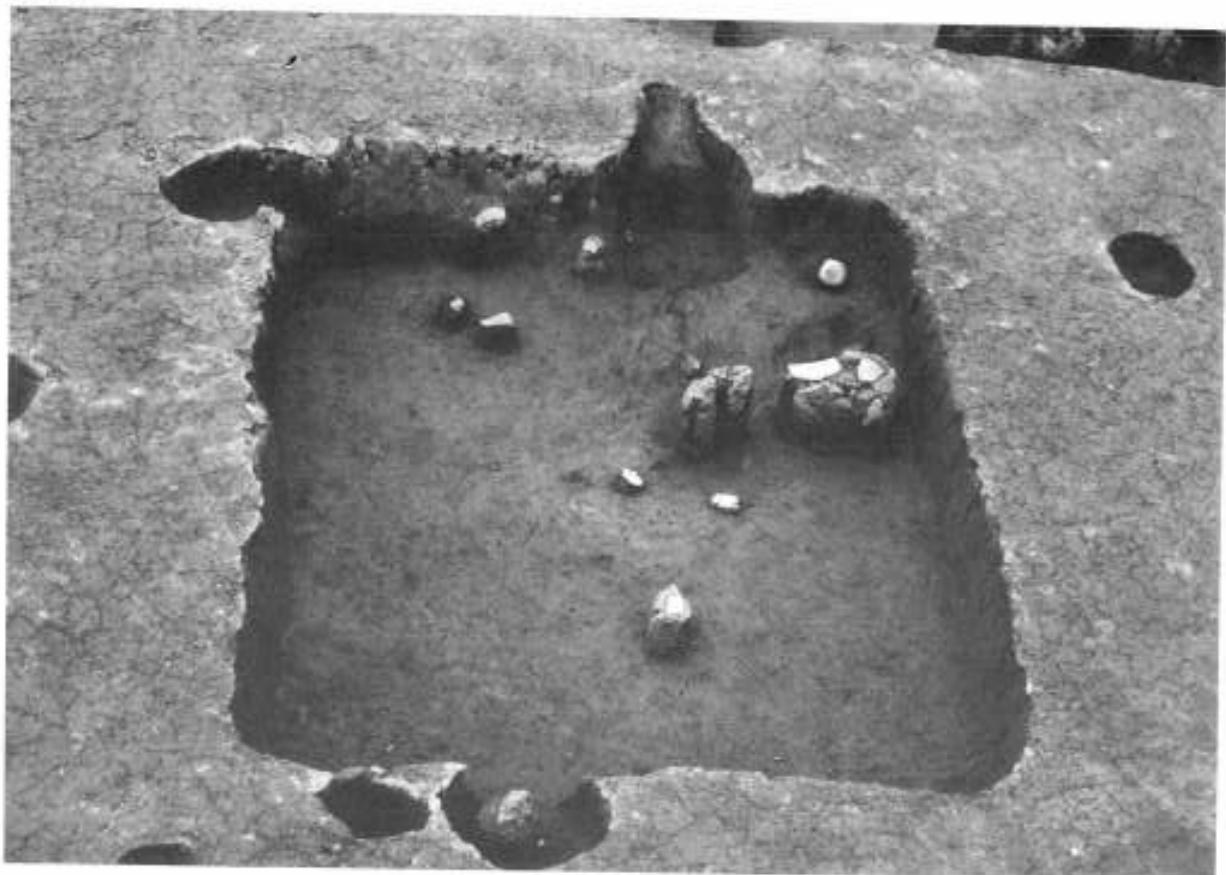


1. 桶ノ上遺跡遠景（黒沢館跡から望む）



2. 桶ノ上遺跡全景

図版18



1. 1号住居跡



2. 2号住居跡

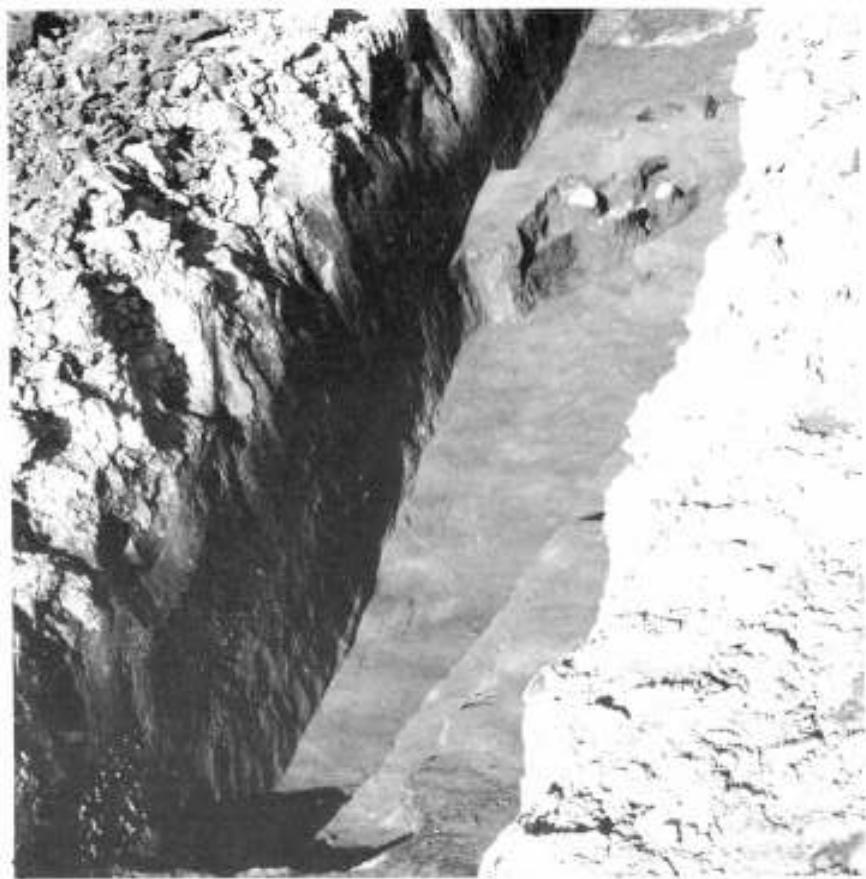


1. 3号住居跡カマド



2. 2号住居跡カマド

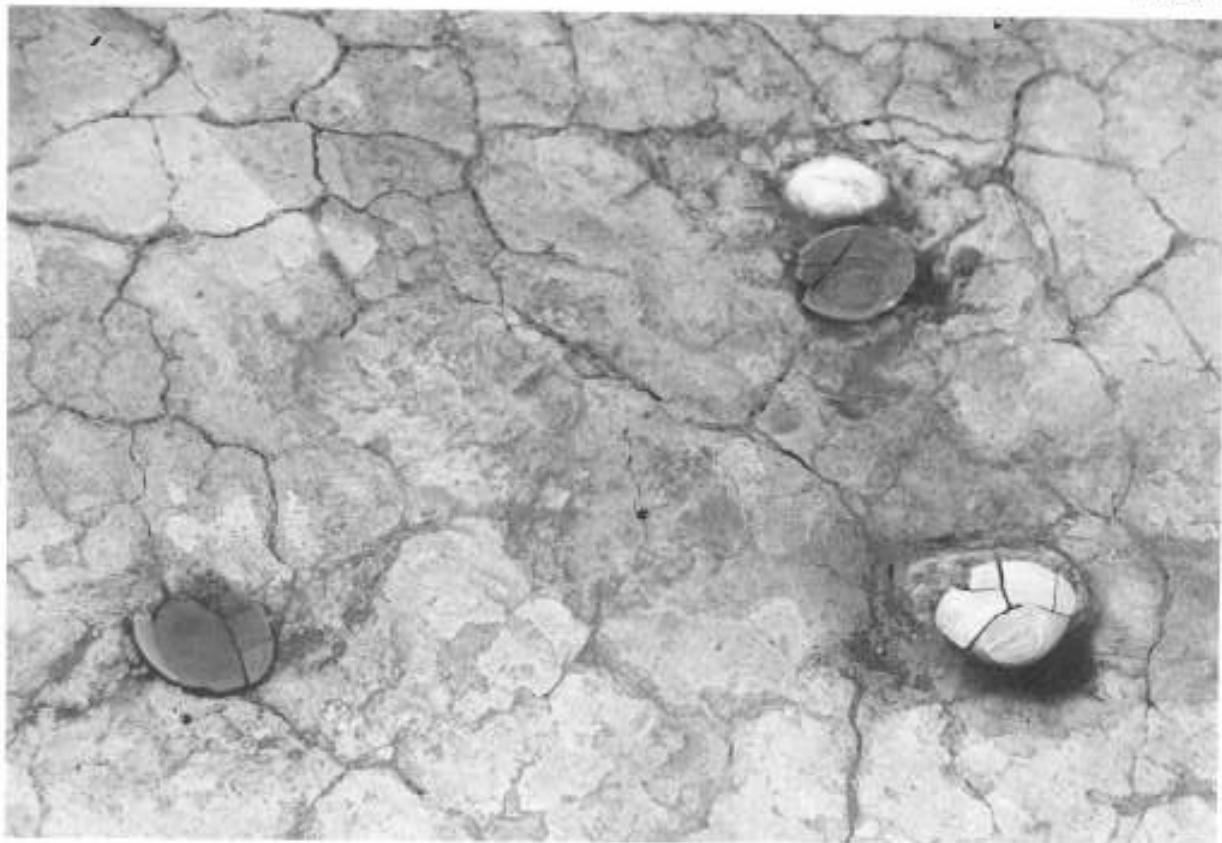
図版20



1. 5号住居跡



2. 5号住居跡カマド



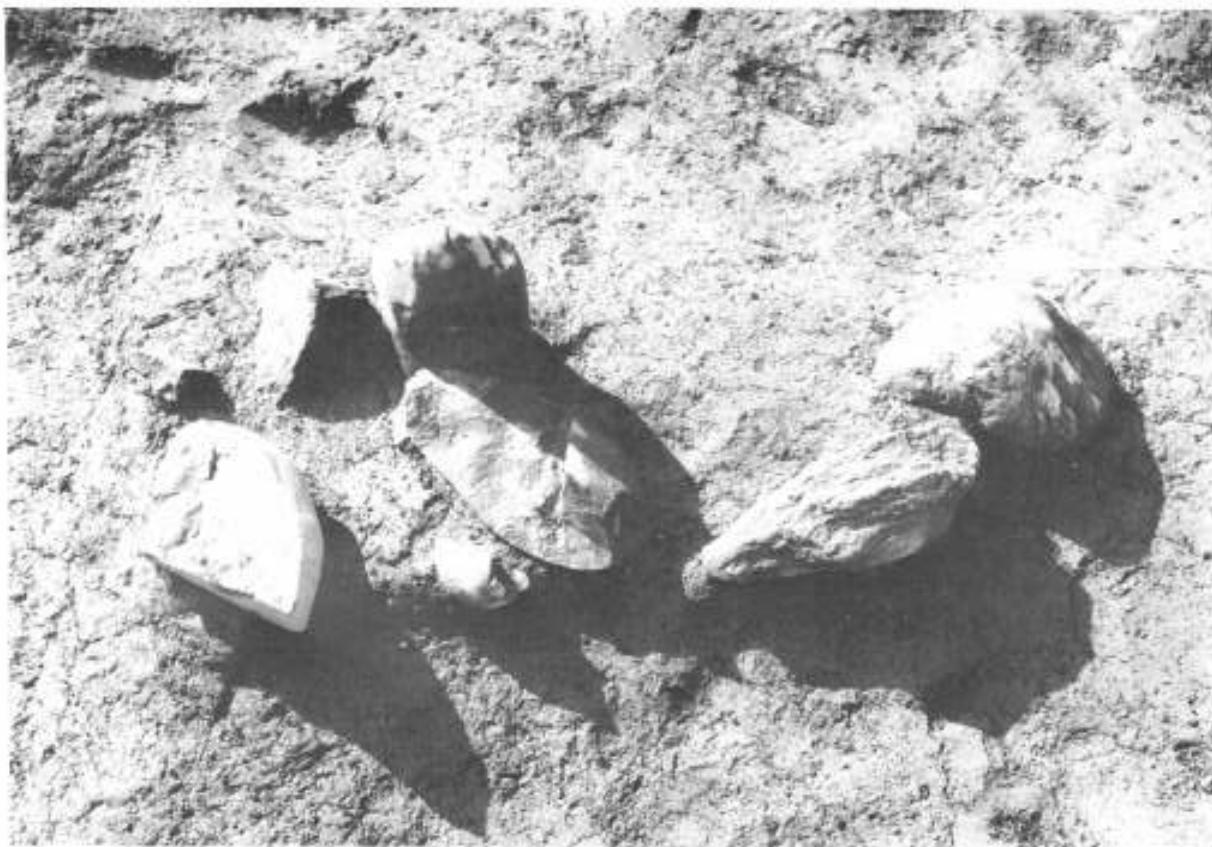
1. 1号土壙・かわらけ出土状態



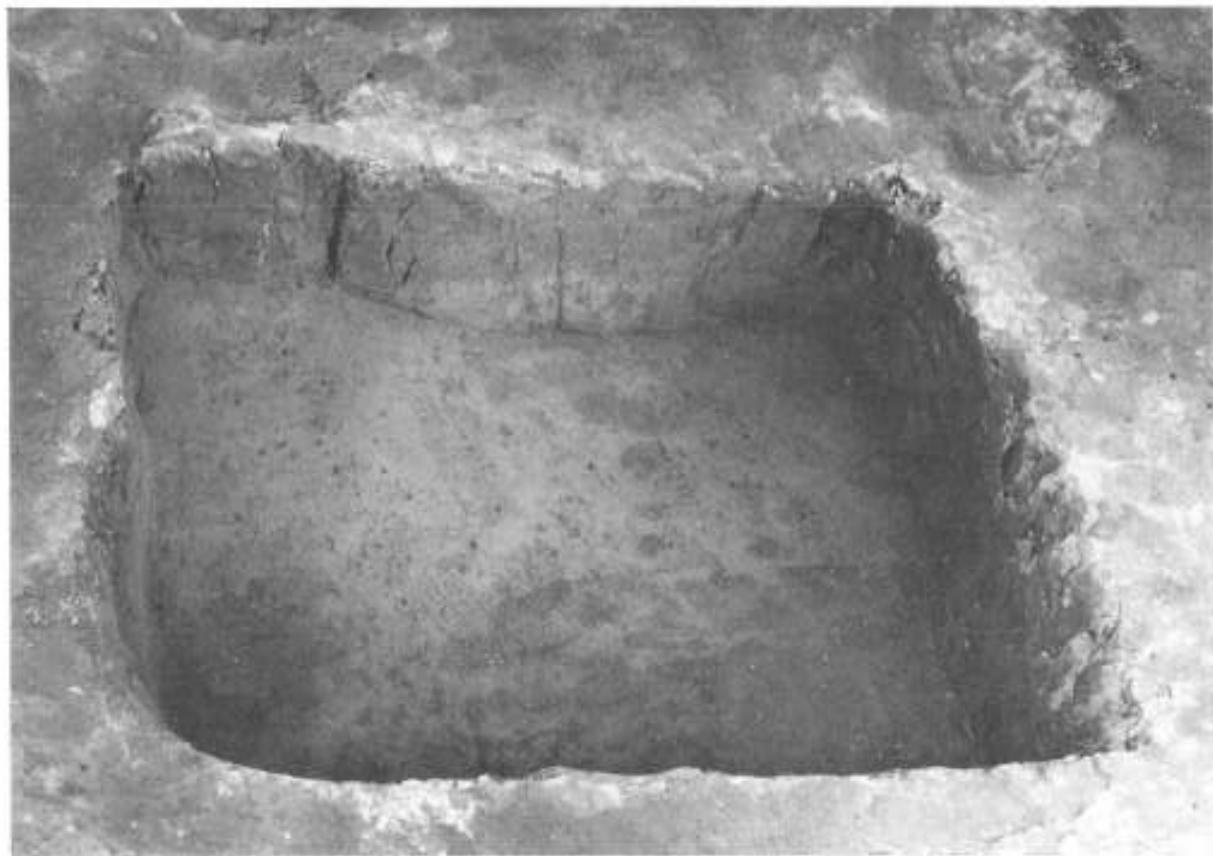
2. 1号土壙・人骨出土状態

頭位は、ほとんど真南を向き、顔が少し東に向いていた。墓壙内に斜めにはいり、上腕は下方にのばし、肘からまげて胸元で合せ、両脚の大腿は強く曲げ、膝関節も強く曲げられ、足首がそろえられていた。成人で女性かもしれない。

図版22



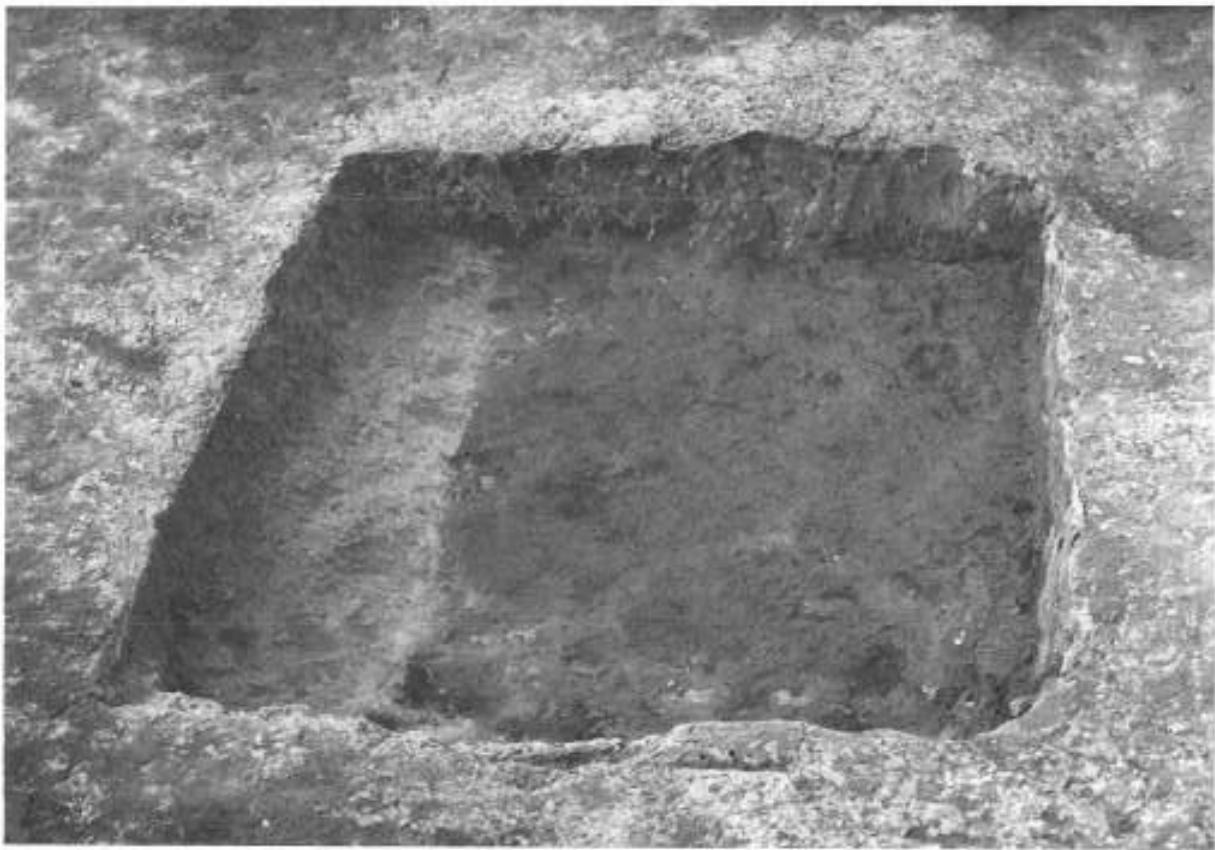
1. 2号土塁・川原石出土状態



2. 2号土塁



1. 3号土塁。川原石・石臼・板磚出土状態



2. 3号土塁

图版24



1. 4号土坑・川原石・内耳土器出土状態



2. 4号土坑・板磚出土状態

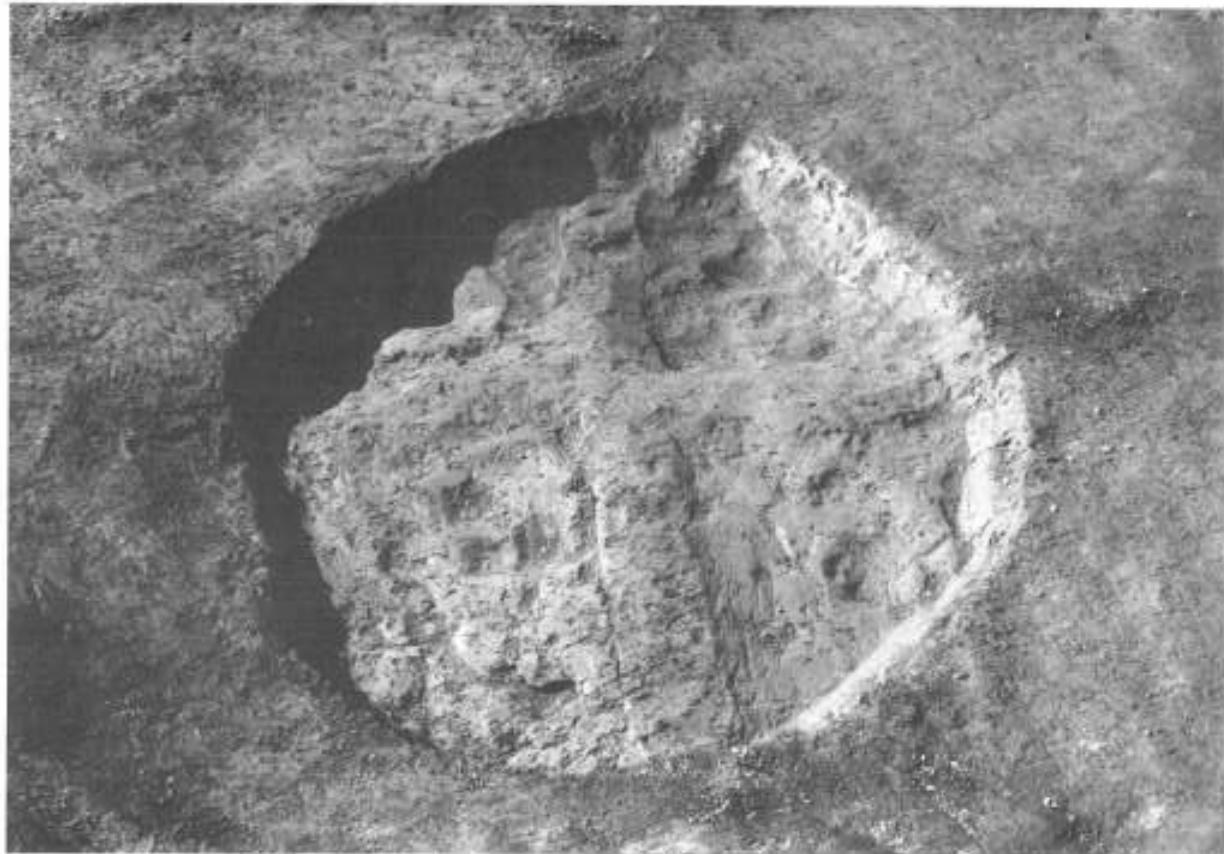


1. 5号土塚・人骨出土状態



2. 5号土塚・人骨出土状態

图版26



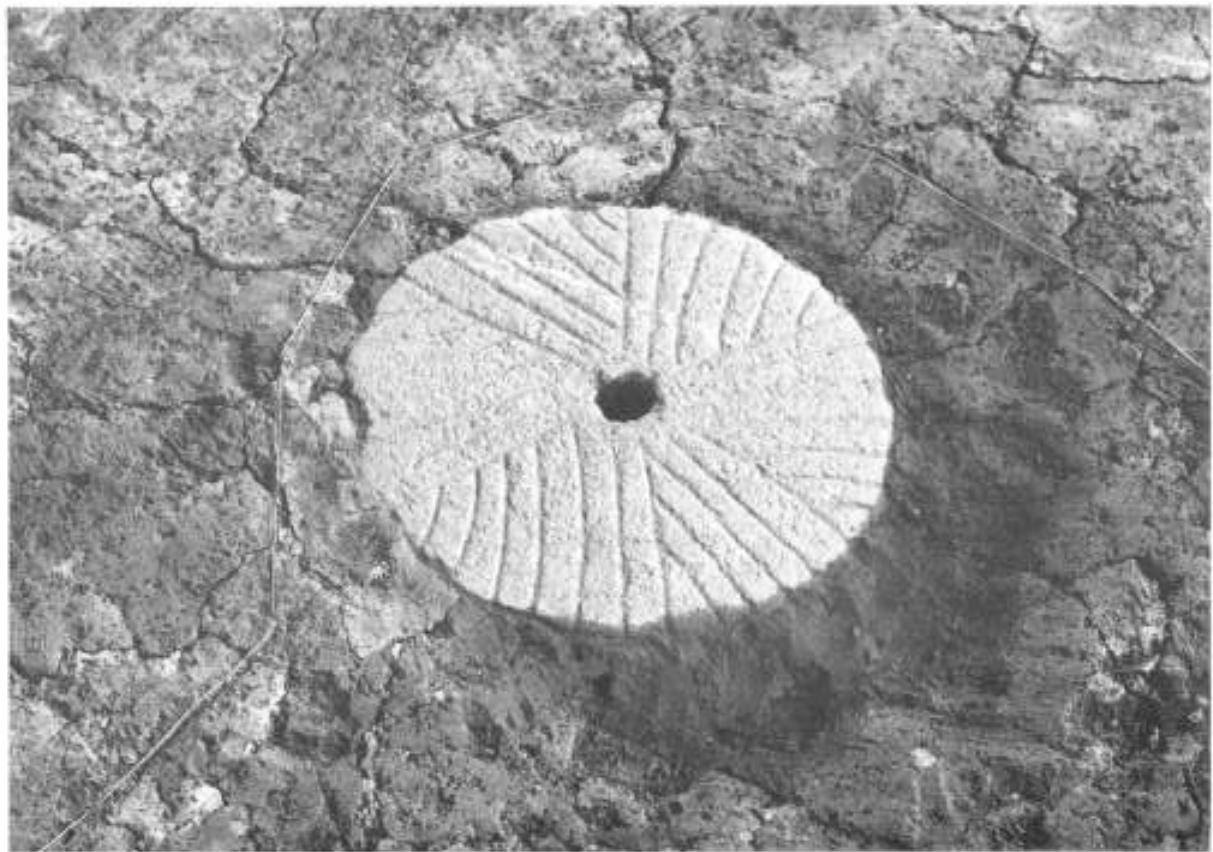
1. 6号土块



2. 10号土块

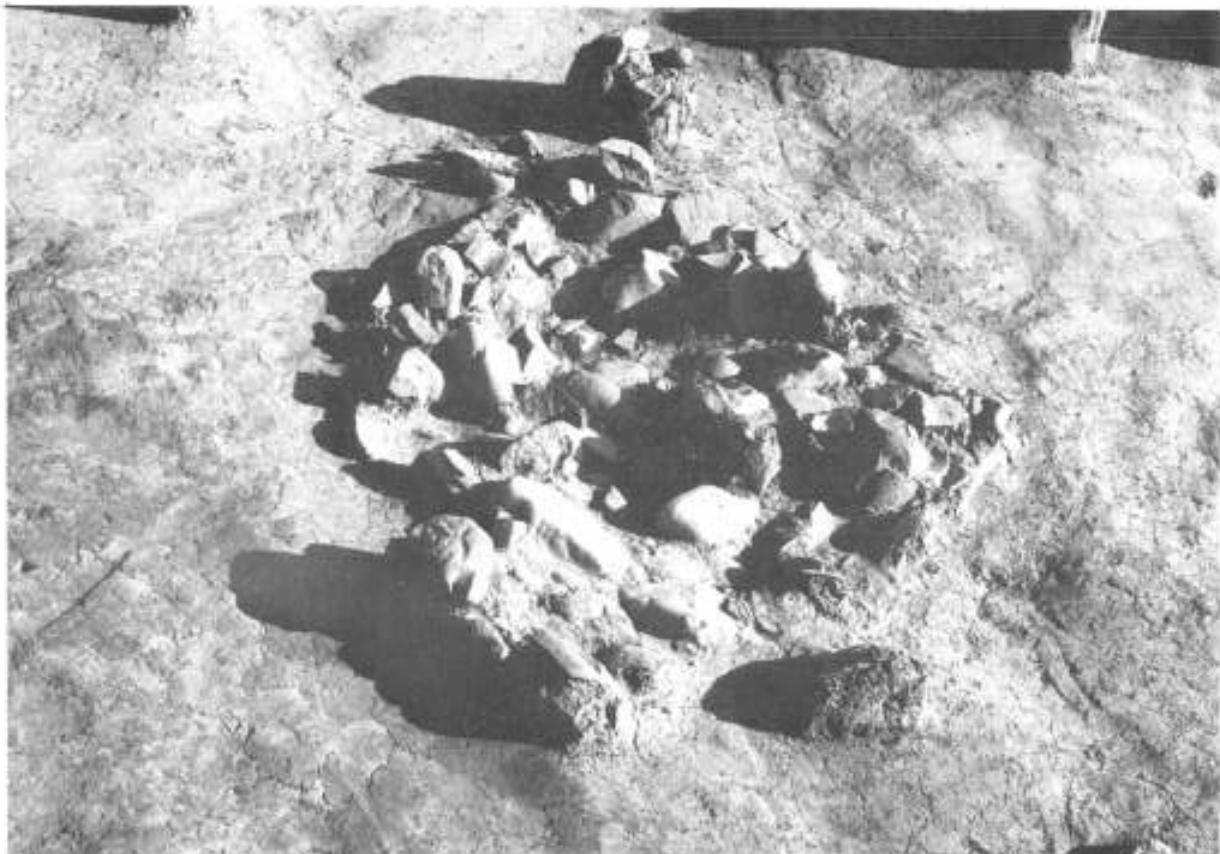


1. 11号土坑·板碑·石臼出土状态

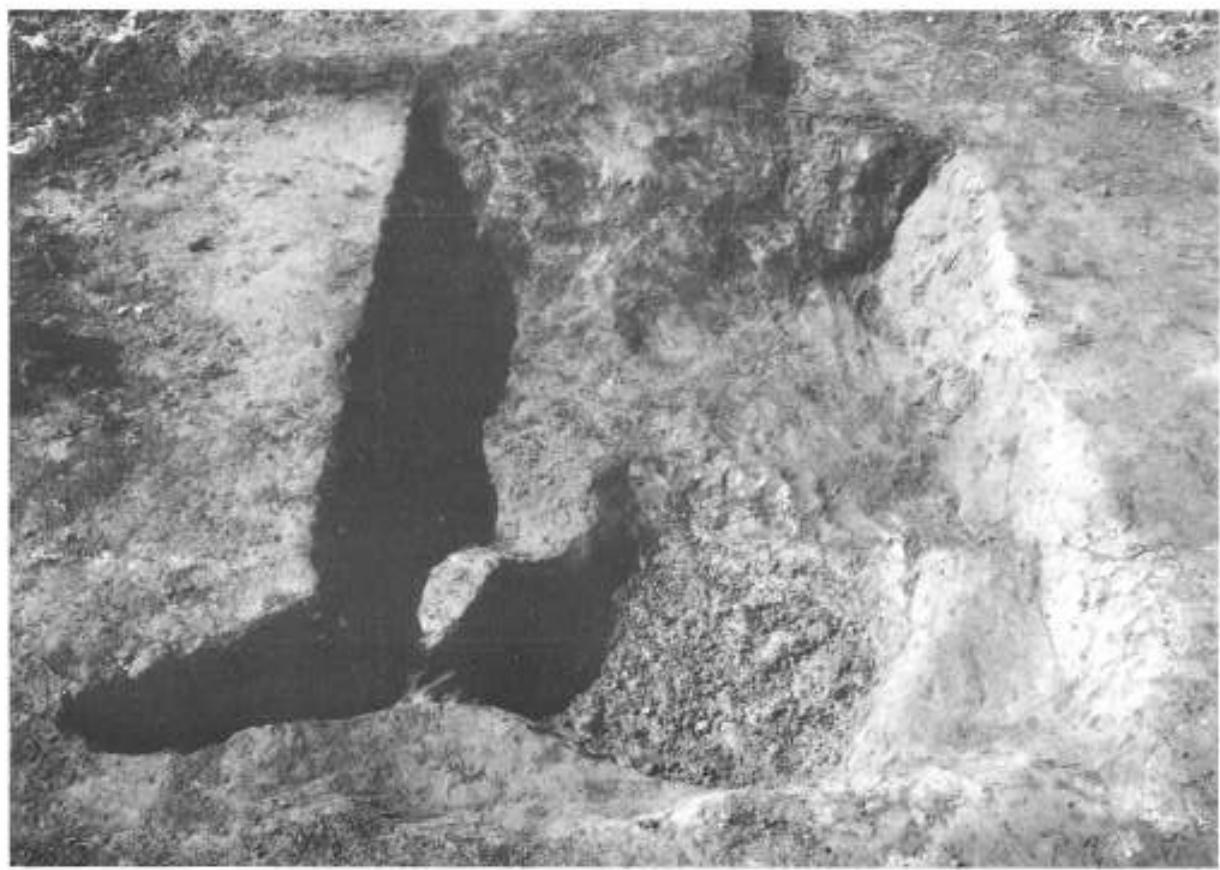


2. 11号土坑·石臼 出土状态

図版28



1. 12号土塙・川原石出土状態



2. 1号溝跡・12号土塙



1. 13号土爐・川原石出土状態



2. 13号土爐

図版30



1. 15号土塚・人骨出土状態

体軸は北北東を向くが、頭位は北を向けたものであろう。顔を西に向ける。脊柱はほぼ直線に伸び、上腕は肘で曲げ、胸元で合せてあった。下肢は腰から約90°で曲げられ、膝関節をほぼそろえて強く曲げ、足首をそろえて、裏面を向いた屈膝姿勢であった。成年だが性不明。



2. 2号集石遺構



1. 2号集石遺構・石臼(1)・板磚(3) 出土状態



2. 3号集石遺構

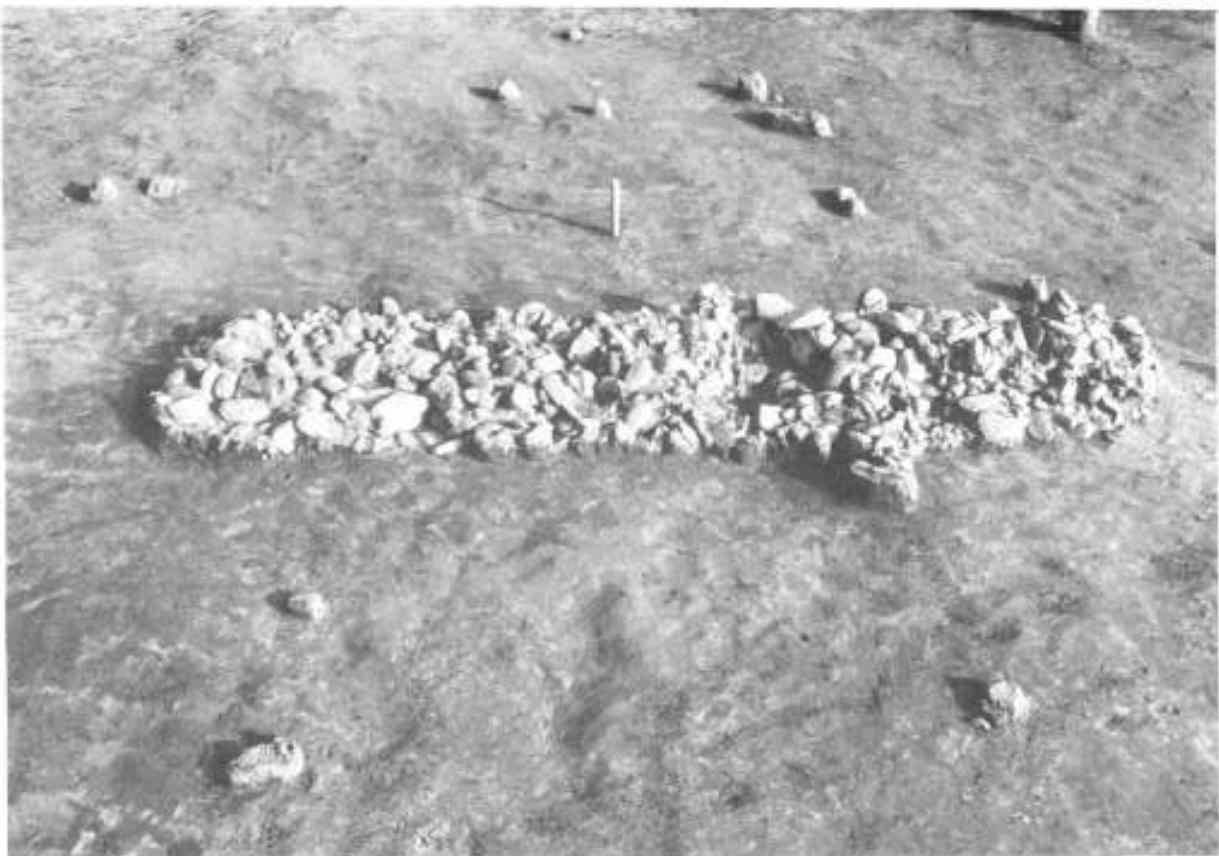
图版32



1. 4号集石遗情



2. 5号集石遗情

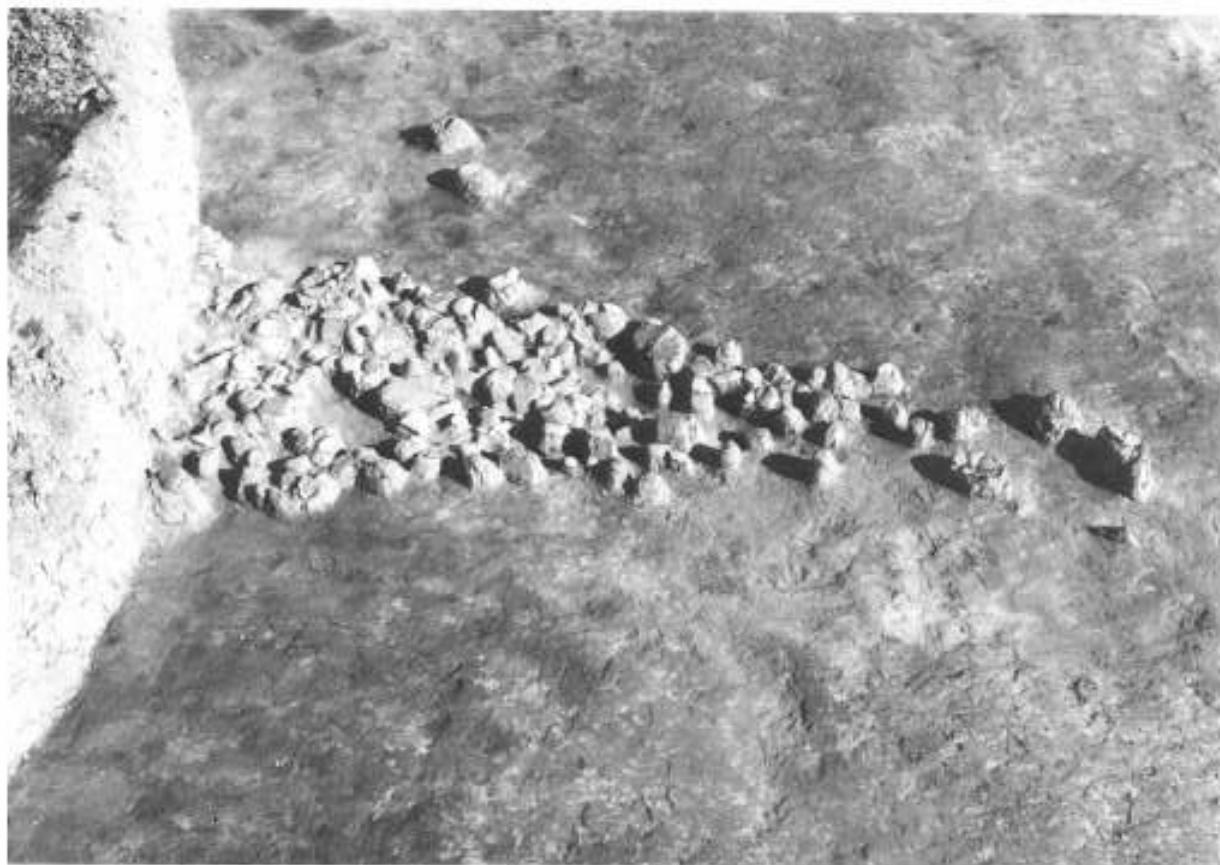


1. 6号集石遺構



2. 6号集石遺構・石臼 出土状態

図版34



1. 7号集石遺構



2. 7号集石遺構・板碑 出土状態

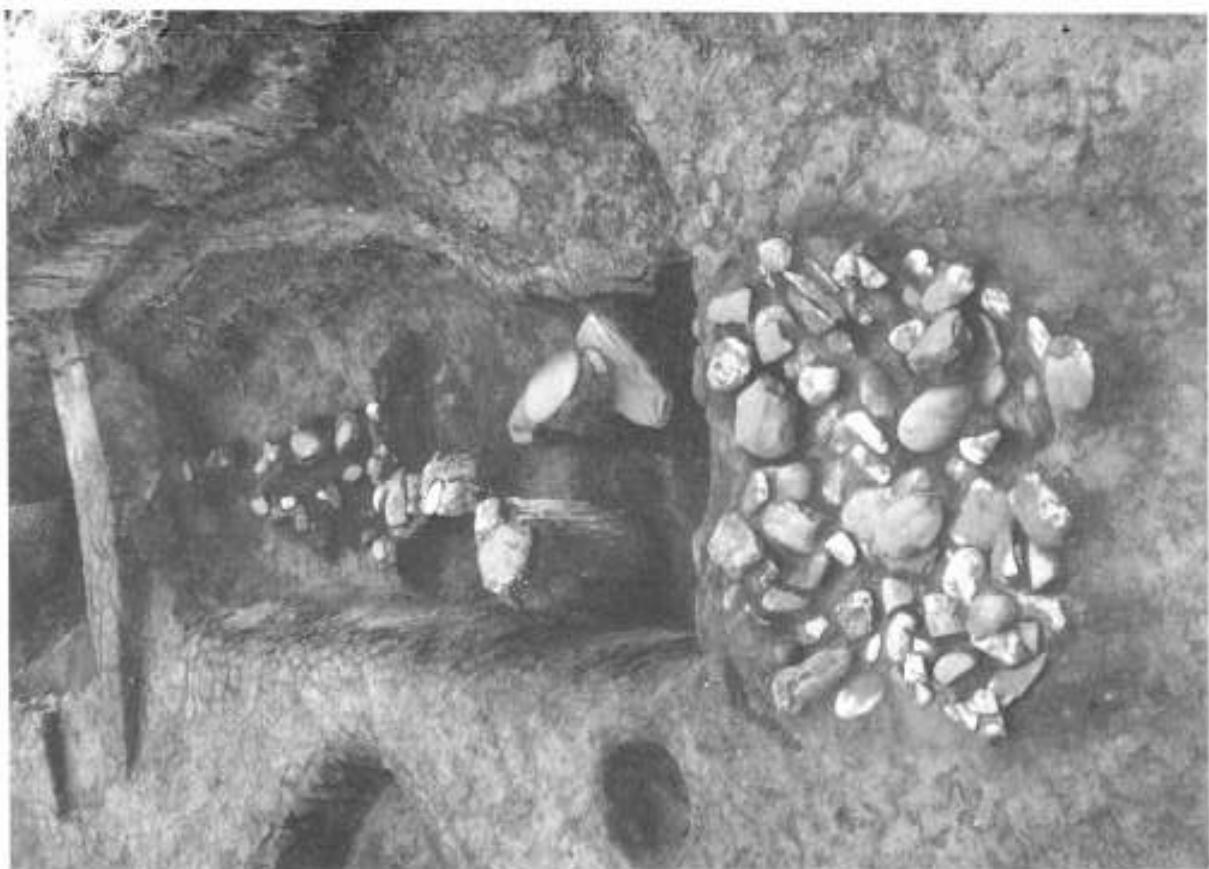


1. 1号溝跡・7号土塁



2. 2号溝跡

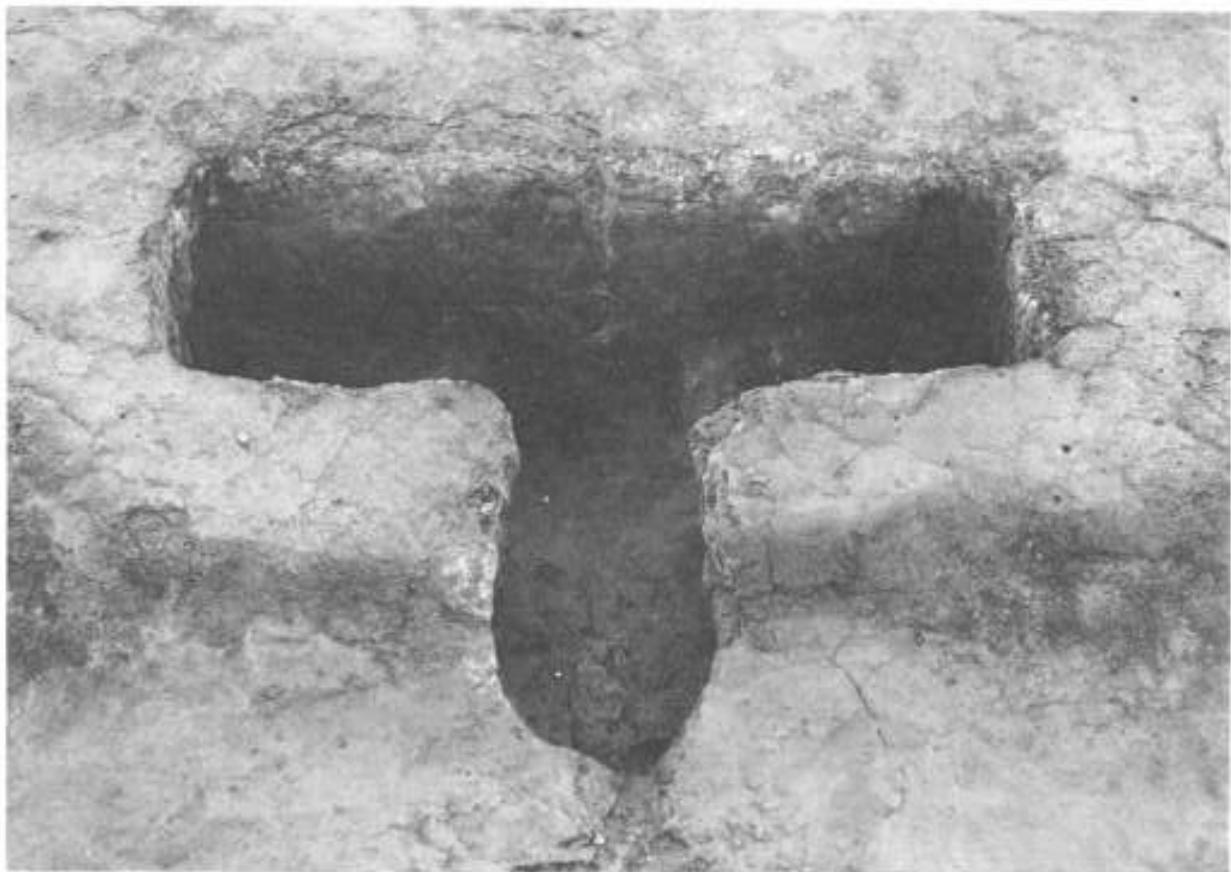
图版36



一、非裸露・一非露凹槽



2. 5号断面



1. 1号火葬墓



2. 4+5号火葬墓

図版38



1. 25号火薬基



2. Q-10区発掘出土次第



5-1



5-2



6-1



6-2



10-2



10-3



10-4



10-6

図版40



13-1



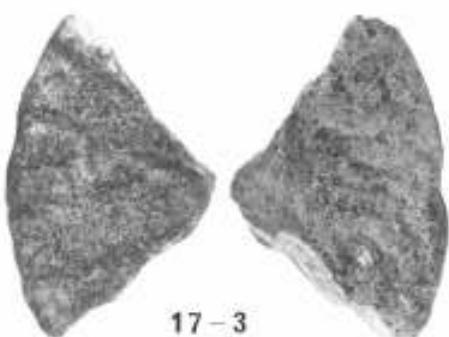
13-2



17-1



17-2



17-3



18-1



18-3



18-4



18-5



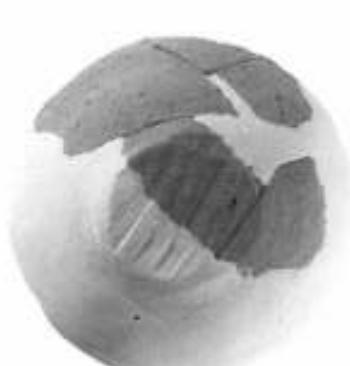
H-1-10



23-4



23-2



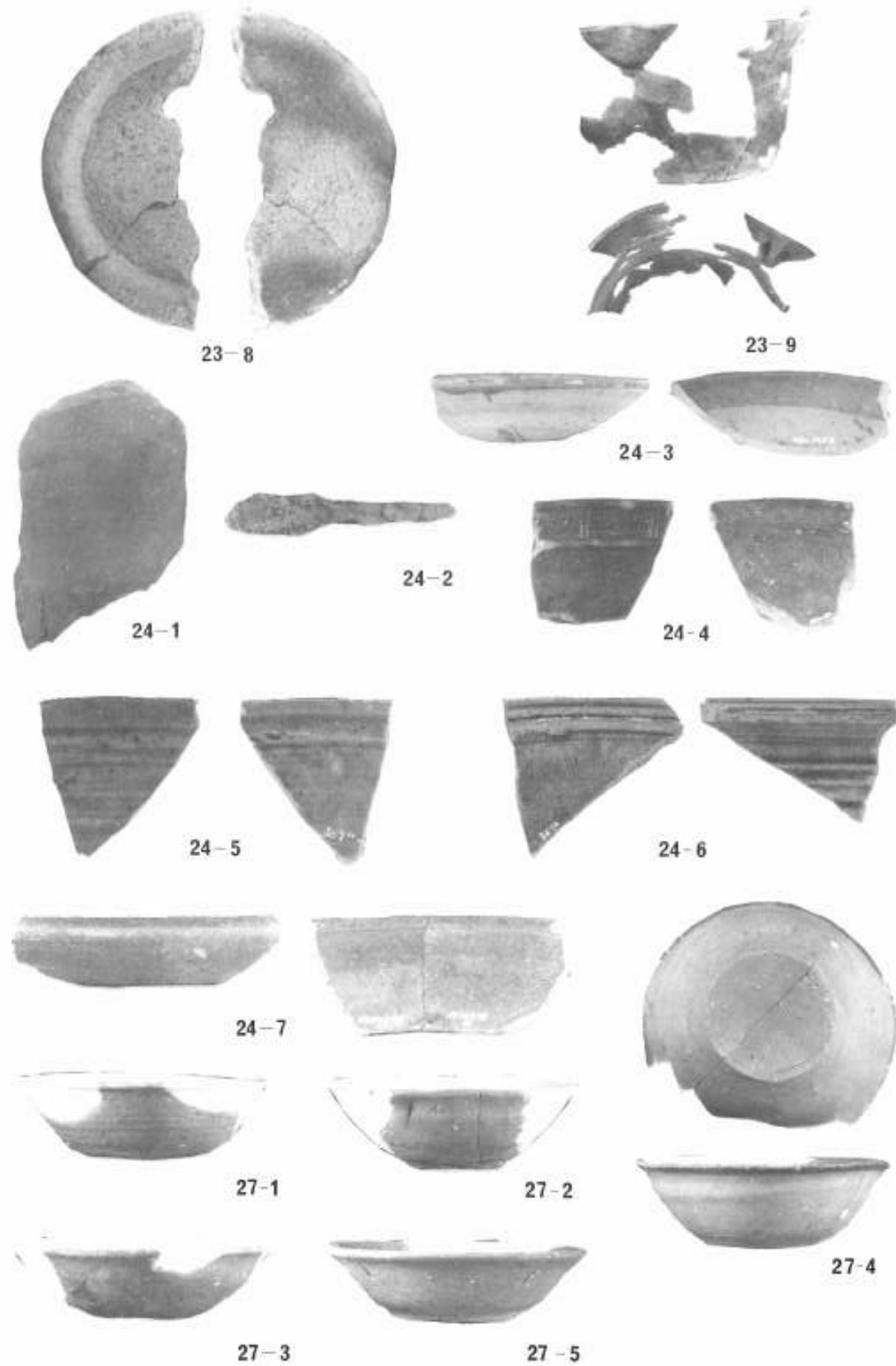
23-3



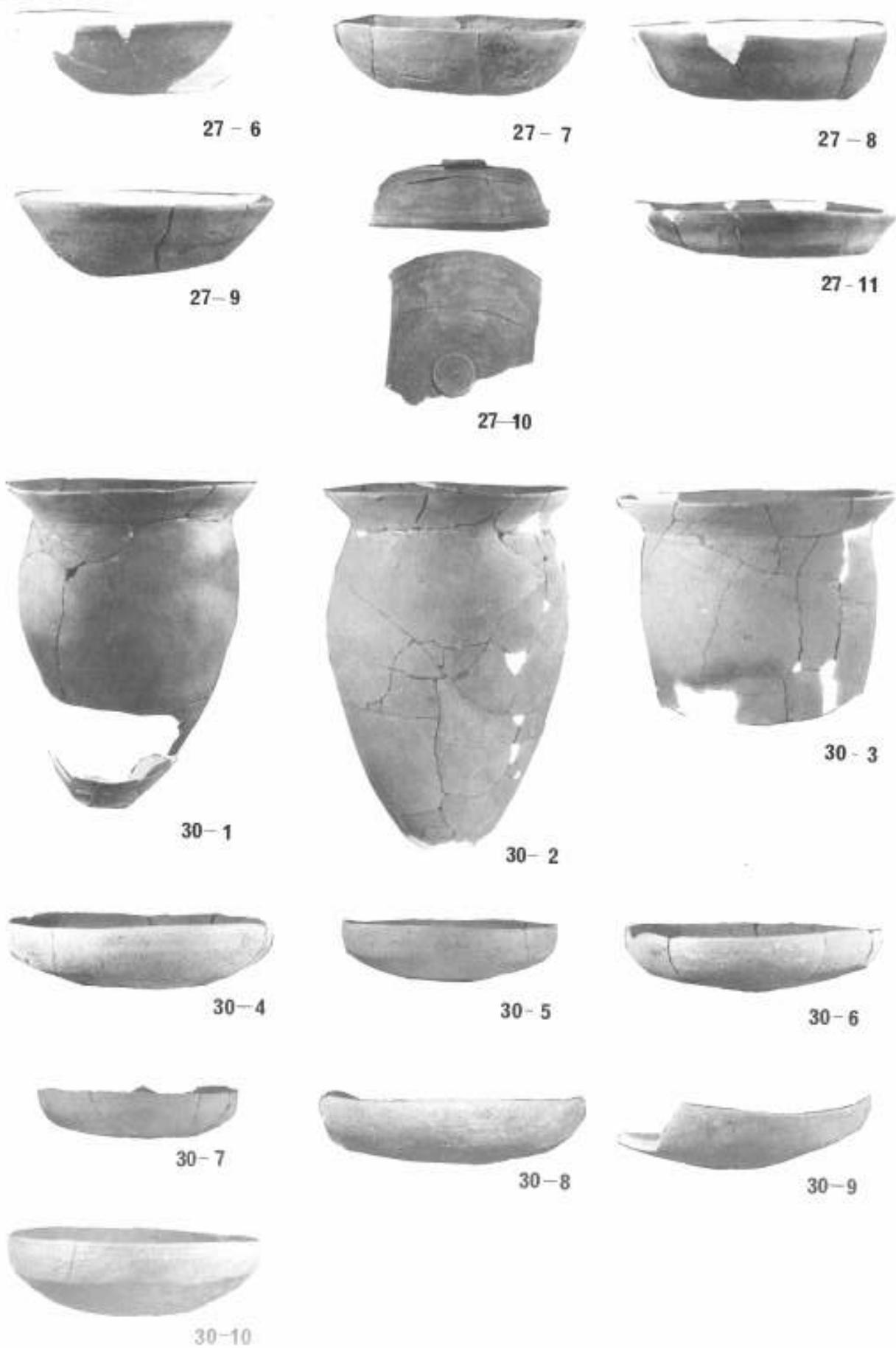
23-5



23-6



图版42





34-1



34-2



34-3



34-4



36-6



36-4



36-13



36-14



36-15



38-1



38-2



38-4



38-5



41-1

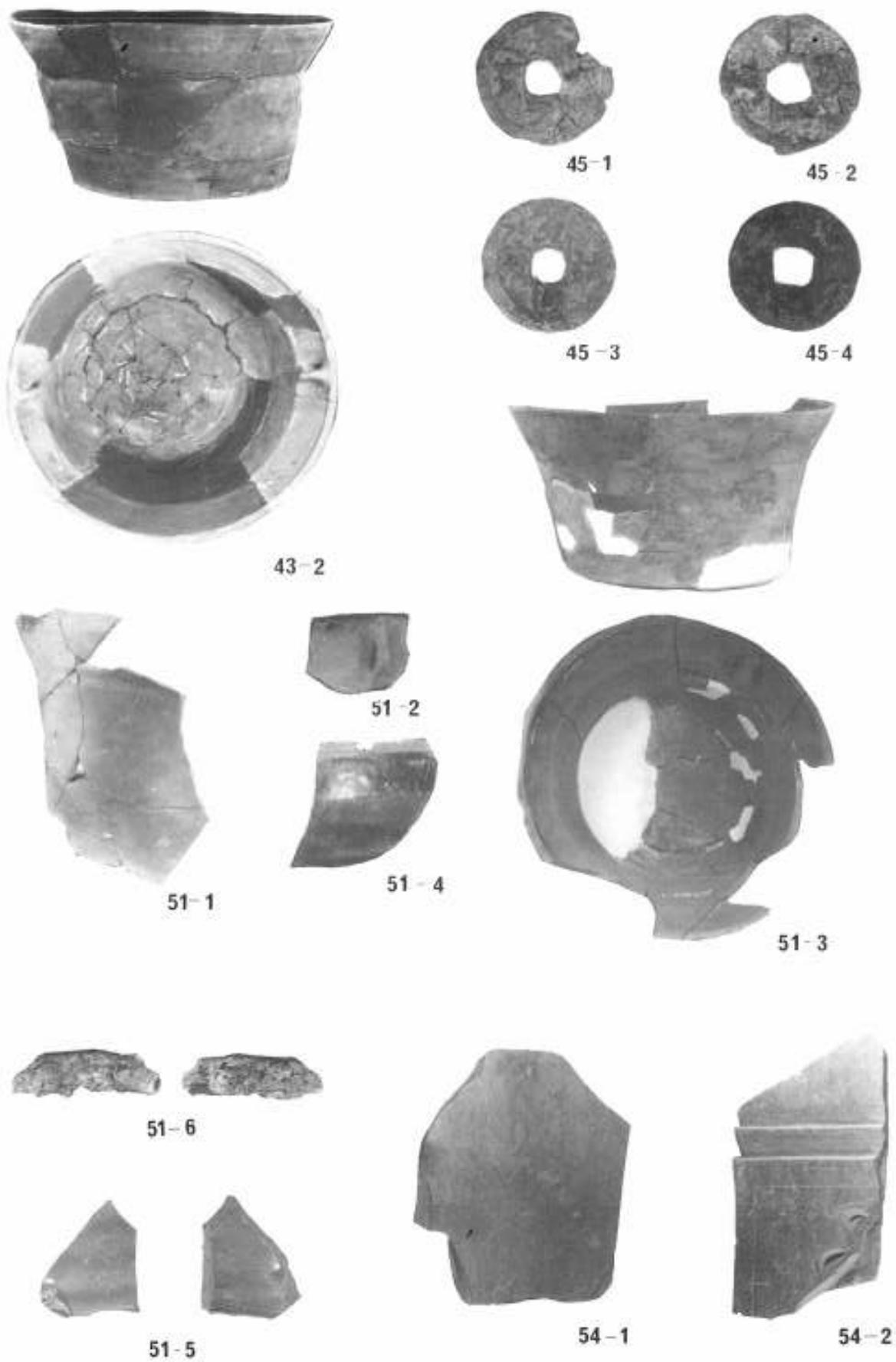


43-1



43-3

図版44





53-1



53-2



56-6



56-7



56-10



57-13



57-14



57-22



57-15



57-5



57-6



57-16



57-17

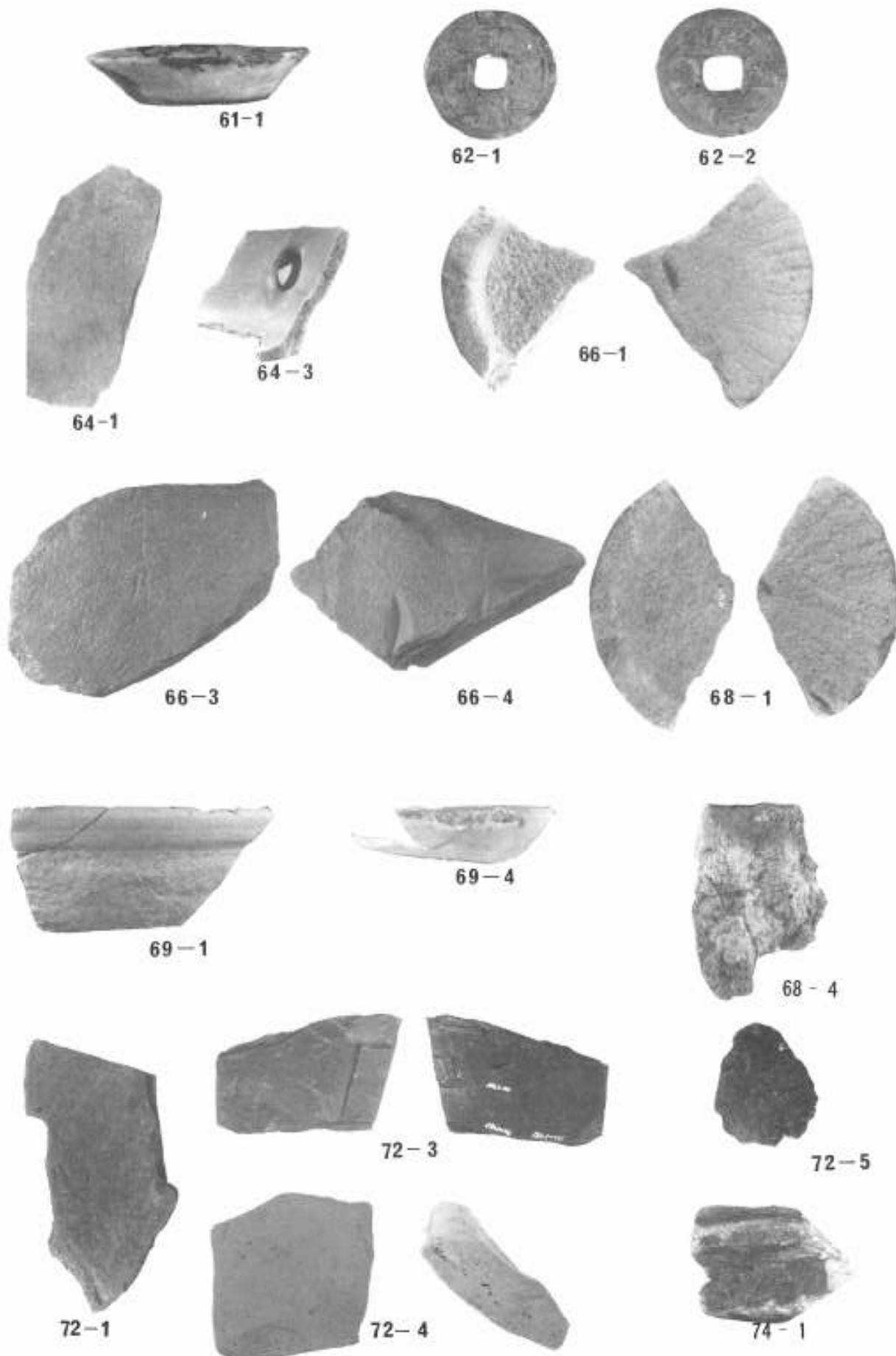


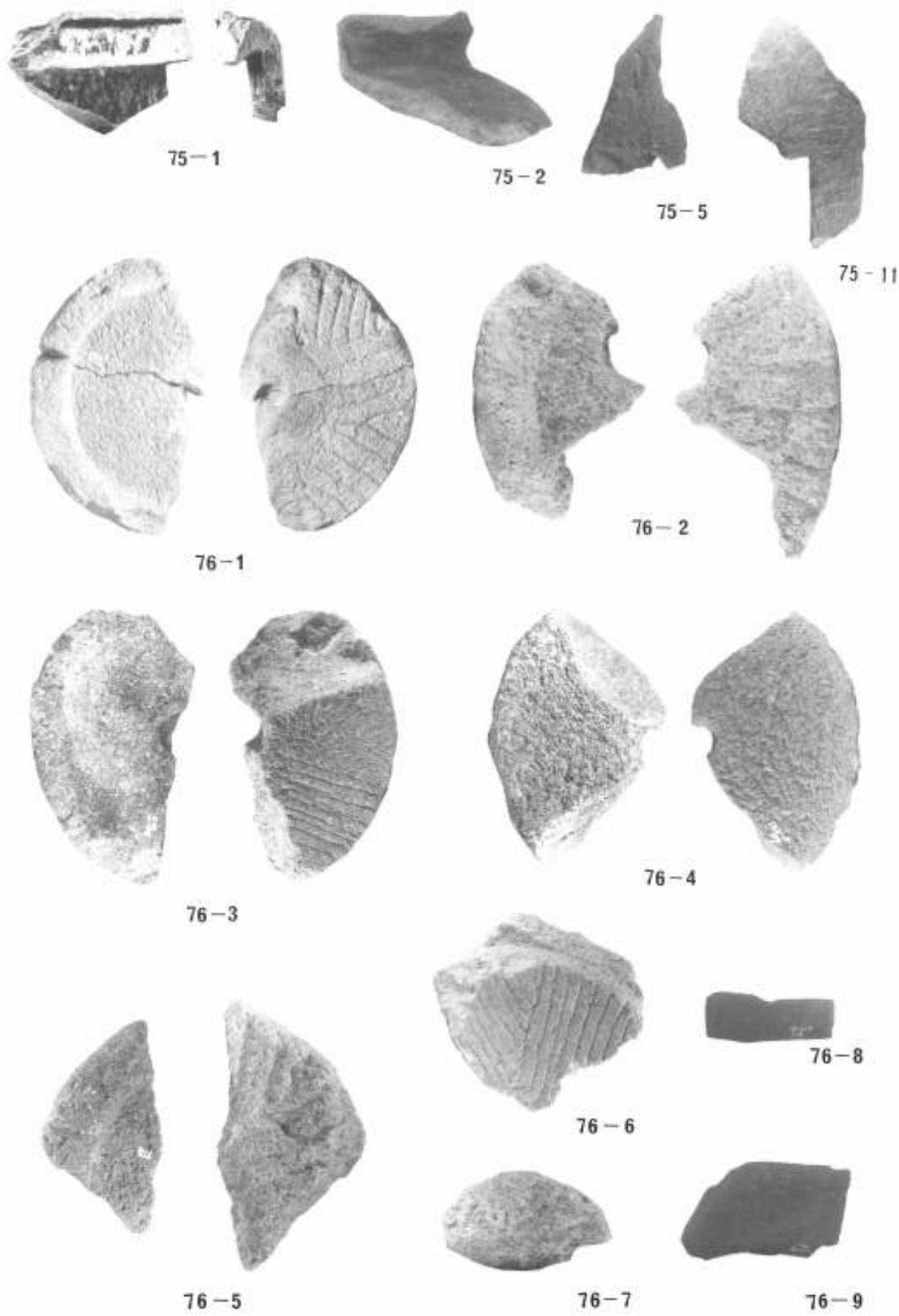
57-20



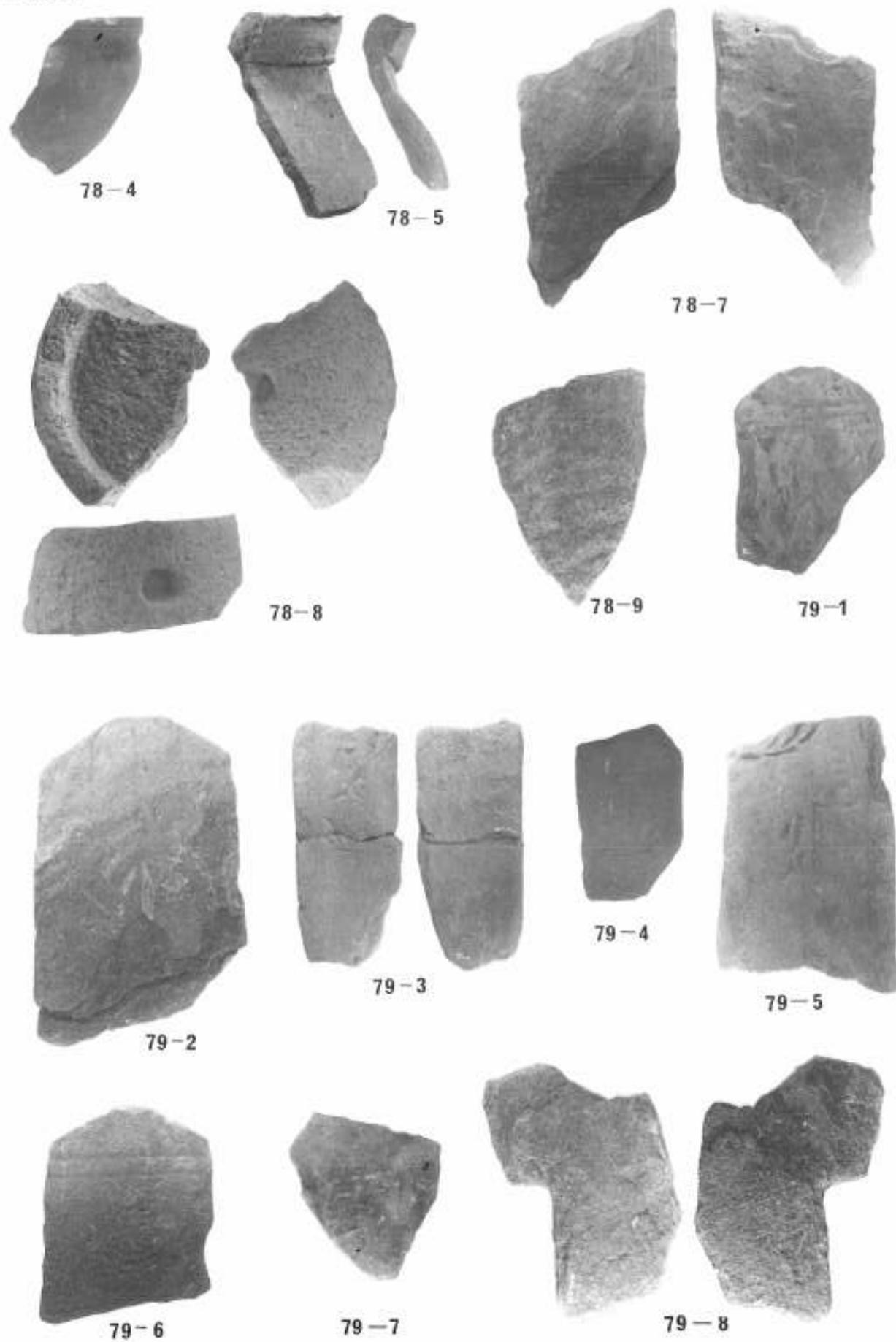
57-21

図版46





図版48





S7-1



S7-3



D13-1



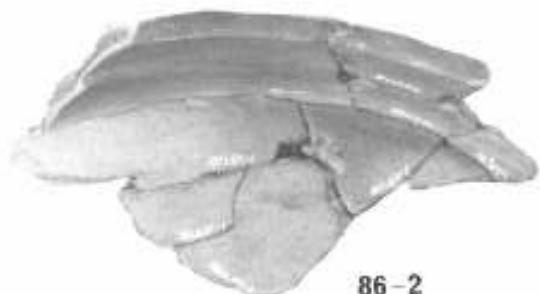
84-3



84-2



84-4



86-2



86-1



87-1



87-3



87-2

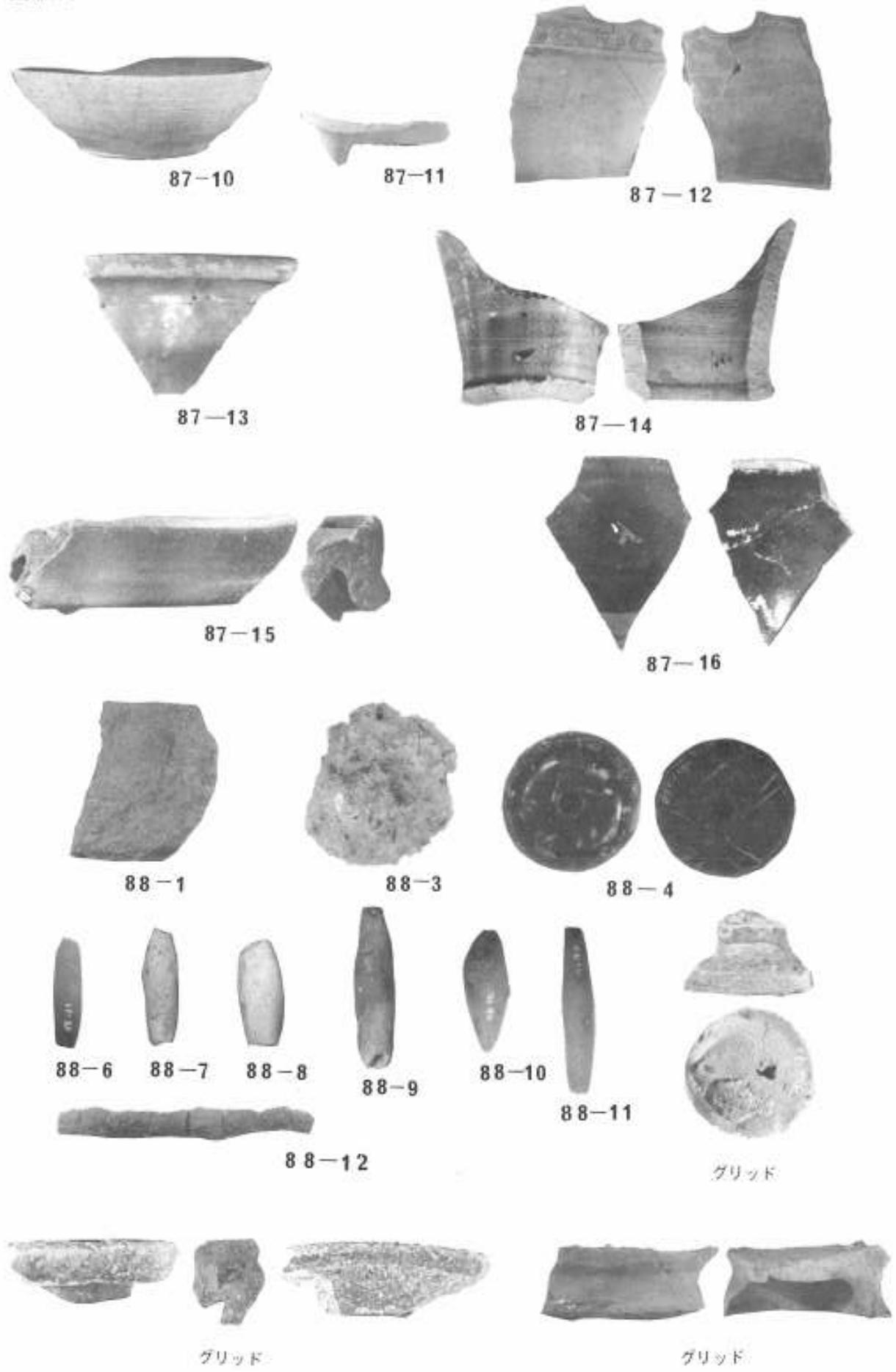


87-4



87-9

図版50



昭和60年3月発行
昭和59年度 熊谷市埋蔵文化財調査報告書

三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡

編集発行 埼玉県熊谷市教育委員会

印 刷 株式会社 博 文 社

